



東方三界黃龍伝

—帰還—

文・絵 小龍

東方三界黃龍伝

『帰還』

文・絵

小龍

目次

序章

1 木佐小次郎

2 胎動

3 幻の名酒を求めて

4 霧中

5 偃月

6 飛龍

7 杏源郷

8 降臨

9 松木ゴロー的人生論

10 陽輝大将

11 戦力外通告

12 マインド・トラップ

13 九天玄女

14 黒帝玄武佑君

15 残された秀光

16 ドクター天真

17 賽の目

18 三千年目の真相

19 あちこち模様

20 赤

21 慕情

22 疵

23 沙龍の想い

24 偉大なるキサさん

25 董天の誤算

6

164

178

190

202

217

228

238

249

259

270

283

295

308

33 32 31 30 29 28 27 26
玉京宮 白帝白虎聖君 沙龍と九雷 玉皇大帝 いざ出陣 陽輝の回顧 二者択一 晶都の月

400 391 378 366 357 336 332 320

あとがき 39 38 37 36 35 34
青い空と黄色い花 中身は沙龍です 泰山府君 将神緑麗 ブチ切れ 董天の過去
(終)

482 472 459 451 441 427 406

主な登場人物

- リーシャロン
李沙龍（甲斐馨）……神獸黃龍の保持者。中国生まれ、中国育ちの日本人。
- 木佐小次郎……沙龍の親友。四神玄武の力を持つ者。
- 松木ゴロー……沙龍と木佐の友人。陰陽師。
- へきえん
碧媛……沙龍と偃月の義姉。
- えんげつ
偃月……沙龍の異母弟。
- ひりゆう
飛龍……西海龍王の一子。
- くらい
九天玄女……崑崙防衛軍隊長。かつての緑麗と知己だった。
- ようき
九雷……天界軍元帥。沙龍と敵対する。
- りよくれい
陽輝……天界西方軍大将。九雷の親友。
- りよくれい
緑麗……故人。かつての天界の将神。
- 玉皇大帝……天界の統治者。

序章

私の両親は日本人だったらしい。

岡山の片田舎で蝶よ花よと大事に育てられた一人娘の母は、かつ飛んだ祖父曰く、どこからやって来たかも分からぬ一見軟弱そうな男にかっさらわれて拉致同然に中国に連れ去られたという話だが、養母の話では二人は仮面夫婦ながら仲は良かったそうだ。

これだけ聞いても、疑問は最低でも二つ三つは浮かぶだろう。

なぜ拉致されたんだ？ とか、なぜ中国？ とか、なぜ仮面夫婦？ とか。

まあ、慌てるな。それはそのうち分かる。といっても、私の人生にはあまり関係ないし、大して面白い話でもない。

事実、養母の大家族の中に放り込まれて、乳兄弟・乳姉妹達と一緒に育った私にとっては、本当の両親の話などどうでもよかった。

ただ、早熟だった私は幼年にして、仮面夫婦だったのになんで私が生まれたん

だ、という疑問を持つようになったが、それについては、養母があっさりと教えてくれた。

体外受精で作ったのだという。

私の父は元々、女に関心がほとんどない種類の男だったようで、養母達はこの仮面夫婦に子供を作らせるために、そりやもう、ありとあらゆる工夫をしたらしい。

さすがの養母も、その具体的な方法を教えてはくれなかったが、体外ナンチャラでさえ幼い子供に言うことなのか、といまになって思う。多分、養母も相当変わり者だったんだろう。

況や、あの村の人間達はみな変わり者だった。

私が生まれ育ったその村は、近代文明に完全に置いていかれたような、地図にも載っていないど田舎で、村の住人の大半はたった一つの目的のために生きていくような酔狂な連中だった。

すなわち、『龍穴』と『黄龍』を護るという目的である。

ここで少し説明が必要かもしれない。

『龍穴』とは、『龍脈』と呼ばれる自然界のあらゆる『氣』の流れの、始点になり、終点になる、いわば中継ステーションのようなものだ。

“黄龍様の休息所”と、村の人達は呼んでいた。それが、この村にはある。

そして、その『龍穴』に現れる黄龍は、彼等にとっては大事な大事な神獣なのだ。

黄龍は中国大陆においては唯一無二にして絶対の存在とされている。常に『五行』の中心にあり、桁違いの力を持つ、文字通り『神の獣』である。

「黄龍様は我々がお守りせねばならん」

村の長老達はことあるごとにそう言っていた。

頼まれてもいないのにご苦労なこっちゃと思うが、先祖代々受け継がれているというそのお役目は、彼等にとっては義務というよりも権利で、“疑問の裏には必ず金の動きがある”というのには上海時代に教わったことではあるが、なるほど、『龍穴』と『黄龍』を護ることで彼等の生活が保障され潤うのなら、躍起にもなるわな。

なんのことはない、ただ、己の居場所と一族の繁栄を護りたいだけで、表向き

はわけの分からぬ使命感に満ちていても、実態は、黄龍を力尽くで奪おうとする者に対しては暴力でねじ伏せるといふ、非合法的な戦闘集団に過ぎないのだ。

「で、どこにその黄龍サマが居るんだ」

最初に、その『龍穴』に連れて行かれたとき、こまっしやくれたガキだった私は、養母の父、つまり、私にとっては義理の祖父になるタヌキジジイにそう聞いた。

なんとなく、その答えは分かっていたが、風林が黙って私を指差したとき、私の人生は終わった、と感じた。

五歳にして感じたその絶望感と虚脱感は、未だに部分的に続いているが、私はそのファンタジーのような現実を無視できるほど賢くなかったし、真っ向勝負で素直に村の英雄を演じるほど馬鹿でもなかったので、この現実をしばらく静観するしかなかった。

どういふ経緯で日本人の父がその遺伝子を持っていたのかは知らないが、私はその伝説の神獣と言われる黄龍の力が使える。

物心ついたときから私はそれを自覚していたが、この力は別に離れた物を念力

で動かせるとか、空中浮遊できるとか、そういった類のものではなくて、普段は身体能力が飛躍的にアップするだけである。

例えば、私は握力が普通に百二十くらいあるが、これは小さい頃からの修業の成果だけではないだろう。

ただ、小さい頃、この力を暴走させて、何人か村の人間を殺してしまったことがあるが、そのことに鬱陶しいくらいに落ち込むよりも、目の前で暴れる巨大な黄金龍を初めて見て、普段はどこに居るんだ、とか、何食って生きてるんだ、とか、そういう疑問が心を占めた。

「金の動きを追え」？ いや、ここにはいくらなんでも金の動きはないだろう。

「黄龍はお前の代で完全に悪神として覚醒してしまったか……」

村の長老は嫌味ったらしくそんなことを言っていたが、破壊神だろうが守護神だろうが、私とそのハンドラーで、この力を欲している者が居る以上、私のやることは一つだろう。

性懲りもなくチョツカイ出してくるあの上海人達をどうにかしないことには、

私は心安らかに毎日を送れないではないか。

しかし、私の意気込みも虚しく、村の戦闘要員達は死闘の末に彼等の近代兵器の前に倒れていったし、ローティーンだった私は黄龍を発動する術を封じられて、間抜けにも彼等に捕まった。

彼等——つまり、チャイニーズ・マフィアといえれば分かりやすいか——は、『蒼龍会』という。泣く子も黙るどころか、一般的には知られてない組織だ。

このご時世、メガ企業を隠れ蓑にして上海の、いや、ほぼ中国全土の犯罪に関わってるような連中だ。

その連中が、どこから嗅ぎ付けたのか、辺鄙な村に黄龍の力を持ったガキンチョが居ることを知り、それを手中にした、という話だ。

怪しい妖術かマジックだから私の力を封じた董天という男は、この組織の中堅で、私は以後数年間、この男と共に行動をすることになった。

十年前、上海の『蒼龍会』の一室で拘束具をつけられ、尚、暴れていたのを覚

えている。

「カイ・カオル。不本意だろうが、ここで君は色々学んでもらうことになる」
細い目をした男が冴えた声で言った。

すらりとした身体つきからはとても想像できないほどの威圧感がある。

「ふざけんな、私は村に帰る。勝手に連れてきやがって！」
力の限り叫ぶ。

こういうとき、屈する術は教わっていない。

「君がああの村で学ぶことはもう無いだろう。それに、生き残っている者もほとんど居ないはずだ」

「私の祖父を殺したのはお前だな！」

「風林老師のことか。血縁ではなかったはずだが？」

「血だけで判断するな！ お前らは、全員殺してやる！」

「その感情は、ここでは抑えた方がいいな。敵討ちをする前に君が死ぬことになるぞ」

言葉の意味とは裏腹に、ひどく事務的な口調だ。

「目的を達するためには、泥水を啜らなければならぬこともある。だが、心を落ち着けて、感情をしまい込んでも、それは見せかけにすぎん。狂気への道だ」

「では、どうしろというんだ！」

「ここだ」

と、彼は私の額に手を当てた。

「……？ な、何を、した……？」

その一瞬、力が抜けて、何もかも奪われた気になった。

これは、この感覚は薬物に少し似ている。

しかし、いま、この男は額に触れただけだ。

「いいだろう。いまはお前達が勝者で、私は敗者だ」

戦闘意欲を奪われた私は、それでも村で教わった全ての生きる術を一から思い出しながら聞いた。

「何をどうしたらいいんだ？ 何をどれだけやったらここから出ていける？」

「それは君次第だ。協力はしよう。そのために私が君の教官に任命された」

「私がここを出るときは、お前を殺すときか？」

「そうだったら抵抗はする。心配するな、カイ・カオル」

「心配してんじやない。それと、その日本名で私を呼ぶな」

「ではなんと呼べばいい」

「李沙龍——」

最初は教官だったこの男も、五年後には形だけ忠実な私の部下になっていた。

「お見事ですよ、沙龍様。貴女はたった五年で自由を取り戻した」

いつも慇懃無礼な董天は、それでもお世辞は決して言わない奴だったので、彼のその言葉は本音なんだろうと思った。

驚くことに、組織の連中は、私が幹部会を掌握する前も後もあまり態度は変わらず、村の人間達は特に私を特別扱いしなかったのに、ここの連中ときたら、神でも拝むような目で私を見る。

腕一本と本能だけで生きてきたような連中が、本気で神を信じてるのか甚だ疑問だが、彼等は神獣の力を取り込んで単純に自分達の戦力にしようとしたわけで

はなく、象徴のような絶対的な力が欲しかったのかもしれない。それはなんとなく分かる。

ここでも、私は修業と称して、何度も黄龍を暴走させ、故意ではなかったにしても、何人かの命を奪った。

勿論、その度に凹んだし、その度にあの疑問が沸き起こったが。

ただ、私がハイティーンにしてこの組織のトップに代変わることができたのは、当然、黄龍の力があつたからで、時にはえげつないこともしたし、表向きの忠誠心だけはバツチリな董天の協力もあつたからだ。

大体、この男も謎だ。

年齢も不詳だし、経歴もいまいちはっきりしない。

四十前だろうが、糸目のせいで老けて見えるだけで、本当はもっと若いのかもしれないし、実は六十くらいなのかもしれない。

辛亥革命に参加していたとかいうホラ話もあるが、その気になれば多分自らがこの組織に君臨するだけの力はあるし、そうなのに、権力には興味がないようで、狭いアパートでごく普通に慎ましい暮らしをしていた。女ツ気もなし。ただ、わり

と女からはモテていたらしい。あの、なに考えてんだか分からない不気味な営業スマイルが、上海の女性陣にはミステリアスでクール、とでも映ったんだろうか。

私は、この男が教官をしていたときにはかなりの知識と戦闘術というものを教わったが、師弟愛などは全くない。部下になつてからは、それなりに仕事も一緒にやったが、信頼関係も全くない。

そもそも、私に人生初の敗北を味あわせ、あの村から拉致したのはこいつだし、風林を殺された恨みもある。いつか私が殺してもいいと思っているが、いまのところ部下としては優秀すぎるくらい優秀だし、私のプライベートには全く干渉してこないし、邪魔にはならないので、使える間は使っておこうと思っているだけだ。

「ちよつと日本に行つてくる」

そう言つて上海を出たとき、董天はあまりいい顔をしなかつた。

当然だろう。彼らにとって私はそこに居てもらわなければ困る『力の象徴』だ。

しかし、生まれ故郷の村はこいつらに全滅させられたし、他に行く所もないが、お年頃なので両親の国くらいは見ておこうと思った——というのは建前で、単に黒服連中にチャホヤされながら暗黒帝国のプリンセスやってるのに飽きたのだ。

「他の四神も探さなきゃいけないんだろ？」

更にそんな建前もひつつけて、無理矢理納得させた。董天自身は青龍の力を持っていたが「ある日突然使えるようになった」などと、董天にしては似つかわしくない、いい加減なことを言っていた。

彼が辺境の村に居た私を見つけられたのも、その青龍の力のせいだという。

四神と黄龍の間にはそういう切っても切れぬつながりがあるようで、私には一向に感知できないが、四神の力を持つ者にはそういうった能力があるらしい。

だから、度々暴走するこの黄龍の力を鎮めるためにも、四神を探した方がいいかもしれない、と言い出したのは董天だ。

彼に言わせれば「四神は黄龍と共にあるのが自然」とかいう話で、更に五行のウンチクを聞かされたが、それはあまり真面目には聞いてなかった。

しかし、偶然にも、建前だったその目的の一つは叶えられた。
そう、私は東京で見つけたのだ。四神玄武の力を持つ者を。

1 木佐小次郎

上海に居た頃はこの力をバカスカ使ってたから、もうエネルギー切れですと言われりや、そりやししょうがないんだけど、齡二十にして血を吐いたときは、もう余生をサナトリウムで静かに送るしかないのか、と本気で思ったね。

しかし、それをゲイの親友に言ったら、冷ややかに言われた。

「白いカーテンの部屋で詩でも書くつもりか？ 歌舞伎町豪遊の方がまだ馨らしいと思うんだが」

日本の狭いユニットバスの洗面所で血を吐いてる親友に言うセリフなのか？

「悪かったよ。黙ってて。でも、病院行ってどうなるもんでも、キサさんに泣き付いてどうなるもんでもないからさ」

本当は、この人だって気付いていたはずなのだ。

私の体調が日々悪化していることに。

「……」

これは怒ってる顔だな。

この居候先の家主兼、雇用主は、能面な美人で、あまり表情豊かとは言えないのだが、それでも数年一緒に暮らしていれば無言で会話もできる。

といっても、最近はこの家主の家には寄り付かずに、自分のマンションに戻って、血を吐く毎日だったんだけど。

「甲斐の家の人間は、代々短命らしい。まあ、こんなご大層なエネルギー、体に抱えてりや、負荷もたまるってもんよ」

「冷静だな……？」

「いや、そうでもない。ここんどこ毎日、どうやったら茶碗蒸しに囲まれて死ぬるか考えてる」

キサさんがその美しい顔を歪ませて、怒った顔から、呆れた顔になった。

日本に来て一番の収穫は、この家主兼雇用主がプロ顔負けの料理人であったことと、彼の作る茶碗蒸しがこの世のものとは思えないほど美味だったことだ。

彼がゲイであったことは、むしろ私にとっては都合がよかった。下心のない男と一緒に暮らすというのは、だらけ切った安心感があつて、何とも心地よいもの

である。

まして、その男が家事を完璧にこなしてしまいうマルチ主夫だとしたら、多少口やかましかろうが、辛辣な毒舌家だろうが、そんなことはどうってことはない。

「まあ、そういうことなんで、いままで色々制約のあつた人生、余生くらいは好き放題生きてみようと思ってるんで、そこんとこよろしく」

「君ほど、好き放題生きてきた人もそう居ないと思うんだが……。いっそ、死んだつもりで仙境にでも行ってみるか？」

キサさんは心配でたまらないようで、でも、それを能面の下に隠して言った。

「風呂行つてドースンだ。ドス黒い垢でも落としてこいつてか？」

と、言ったそばからハリセンが飛んできた。

痛くはないんだけど、これをやられるたびに自分がバカになっていくような気がする。

「センキョウ！ セントウじゃない！」

ハテ。私はまた日本語間違えたんだろうか。

一応、初恋の雀士から、日本語の使い方は教わったはずなんだが、実はまだ細

かいニュアンスとか、難しい言葉は分かっていない。

「あー、センキョウね。仙郷……仙境……」

携帯用の電子辞書で確認して、キサさんの言いたいことを理解した。

故郷の村にあった『龍穴』は、あらゆる場所をうねっているはずの『龍脈』のステーションの一つに過ぎない。

そして、その『龍脈』は、かなりの広範囲に渡って、大地といわず、海にもネットワークを広げている。

しかし、いくら神獣でも地球全土をカバーする力はあるはずもなく、その力が及ぶのはせいぜい東半球の限られたエリアだろう、と私の元教官は言っていた。

その限られたエリアのほぼ中心にあるのが、神仙の住まう世界であり、その一つが仙境、崑崙——であると言われている。

そして、全ての龍脈は崑崙よりいずる、といわれている。つまり、黄龍の何かしらの秘密があるとしたら、それは崑崙にある、ということだ。

「あるかないかも分からない黄龍誕生の土地に行って、結局何もなかったんで、帰ってきましたって、それこそ歌舞伎町のゲイバーで二時間楽しくはしゃぐ方が

遥かに有意義だと思っただけ」

「まあ、そんなだけ軽口が言えれば、今日明日にどうこうってことにはならないよ
うな気もするけど」

私は（多分、キサさんも）、本気でそんな世界が存在することを信じているわけじゃない。

だけど、例えば、目の前に仙人が居て、五分くらい雑談でもすれば、別に水をブドウ酒に変えてみせてくれなくたって、神仙の存在というものを信じるだろう。

私達は、そういう世界で生きてきたのだ。

自分の目と耳と、腕と勘。それさえあれば、大抵のことは切り抜けられる。

それに、何より、私達には自分の身の内に抱えた力もある。

「キサさんは、何ともないの？」

私の体に異変があったのだから、この人にあってもおかしくないと、思うて、そう聞いた。

「僕は、馨ほどこの力を酷使していないし、覚醒したのは物心ついて暫くしてか

らだからな」

「そうなのか……」

キサさんの特殊能力は色々あるんだけど、水神の生まれ変わりのようなこの人は、瞬時に水を氷に変えたり、地下水の場所を言い当てたりすることができる。

しかし、特筆すべきは、やはり、黄龍召喚時の、あの暴走を抑えてくれることだろう。

だから、私はこの人が居なければ召喚技は使えないのだ。

顔も見たこともない私の父は、甲斐弥太郎というが、その戸籍はどこを探してもないし、出身がどこなのかも分からない。

事情を色々知っているらしい養母の話では、戸籍がないのは世間から黄龍の存在を秘匿するためということだが、その養母もいまは故人だ。あの『蒼龍会』の襲撃のときにやられた。

馨というのは、父がつけた名前らしいが、私には「沙龍」という中国での通り

名があつたので、二十年の人生で「甲斐馨」を名乗ったことはほとんどない。

しかし、キサさんはうまくその発音ができずに、ずっと私を日本名で呼んでいく。

木佐小次郎。日本で見つけた、私の親友とも呼べる人だ。

京都のとある旧家で育った若旦那らしいが、私が出会ったときは彼は東京で一人暮らしをする高校生だった。

身のこなしからして只者じゃないな、というのはすぐ分かった。

そして、彼の方も、私が厄介な力を抱えていることがすぐ分かったらしい。

最初に出会ったのは、高校の教室だ。

私は董天に無理を言って、日本の戸籍（勿論、偽物だ）を作って、都内の高校に編入させてもらったのだが、その編入先の教室にキサさんが居た。

私の編入は、いわば我俣お嬢の祖国見学ついでの物見遊山と思ってもらってもいい。

そのセレブリテイ特有の嫌味さを感じ取ったのか、キサさんは最初私には近付かなかつたし、私が脳天気話しかけても、どこまでも冷ややかだった。

(日本人特有のシャイ・ボーイか)

そう思ったものの、彼の冷淡さには女性への無関心も含まれてることが分かった。

尤も、そんなことでめげる私ではないし、なぜ彼のことがこんなに気になるのか直感で分かったので、単純に同志を見つけたような嬉しさでまとわりついた。

そうして、私に下心がないと先方が理解するまで続けて、いつの間にか彼の人暮らしの家に上がりこみ、気付いたら居候していた。

勿論、その間に色々トラブルに出くわした。(その九割が、キサさんに言わせれば私が招いたトラブルだそうだが)

初めて彼がその力を私に披露したのは、新宿のとある繁華街だった。

発端はただのナンパだったはずの小さな出来事が、いつの間にかマルヤさんを巻き込んだの抗争になってしまつて、深夜の道端で大乱闘になった。

私が我先に参戦するのを、このキレイな顔をしたゲイ・ボーイは、「またか…」と冷ややかに見ているだけだったが、段々とその能面が、焦りと驚愕に取つて変わった。

街中で黄龍ぶつ放すなんて荒技をするつもりはなかったのだが、私がこの力を最大稼働させると、キサさんは咄嗟に止めに入ったのだ。

「それはやめろ！ 頼むから、それだけはやめろ！」

このときは、まるで、麻薬を打たれたような心地で、へナへナと力が抜け、私は小雨に濡れた舗道に座り込んでしまった。

（あれ？ これって……）

と、一瞬思ったが、すぐ忘れた。

しかし、このとき、木佐小次郎が北方玄武の力を自在に使える者なのだということは、はつきり分かった。

最初にナンパしてきて、私のデコピン一発で撃沈していたはずのアロハシャツのチンピラ君が、お粗末な改造銃を取り出して私に向けたが、それも本気モードのキサさんに粉碎された。

かくして、路上には気絶（絶命……はさすがに居なかったはずだが）した数名が転がった。

その静寂の中で、キサさんが言った。

「僕が止めなかったら、本当に黄龍召喚するつもりだったのか、君は」
私がニツコリ笑ったら、彼も気付いたらしい。

「まさか、僕の力が見たくてわざとやったのか」

「さあ？」

半分は計算もあつたかもしれないが、半分はもはや本能だ。

「結構、策士だな……」

「改めて自己紹介しよう。私は沙龍。多分、貴方に会うために、日本に来た」

「シャルン……？」

「沙龍。まあ、呼びにくければ、日本名でもいいよ」

「甲斐さん、君は中国人なのか？」

「いや、一応両親は日本人らしいが、私は中国で生まれ育った」

「なぜ、黄龍の力が使える……？」

「『why』と『how』のは私も知らないが、『how』なら答えられる。つまり、私は物

心ついたときから既に黄龍と共にあつたからだ」

「なるほど、先天的ってことか」

「私が育った村のジイサマがたに言わせれば、それには何か意味があるそうだし……？」

「いや、代々男だった『黄龍』が、私の代には単に女しか生まれなかったんで、その理由づけが必要なんだろう」

「それは『血』なのか？」

「かもね。父もそうだったらしい」

「そうか。僕と一緒だな」

「キサさんも？」

「うちは京都に本家があるんだが、遡れば先祖は渡来人ってことになるんだろう。古いしきたりに縛られた、窮屈な家さ」

「フーン……」

それで家出同然に出てきて、親類縁者の居ない東京で気ままに高校生やってんのか。

キサさんが、戸惑いつつも手を差し出す。

ああ、そういえば、まだ座り込んだままだった。

よつこらしよ、とその手を取って立ち上がり、天空を見上げると、雨上がりの綺麗な夜空が見える。

「中国ではね、あの星のことを『紫微星』というんだ」と、柄杓型の星座の延長上にある星を指差す。

「北極星か」

「そう。昔は、船乗りが目印とした、指標となる星だ」
不動の星。

それは、昔から、希望の星でもあった。

「私は『孤蓬（根無し草）』でね、紫微星を目指し、導かれて、いま、ここに居る。しばらくは第二の故郷に根を下ろすことにするよ」

「嫌だと言っても居座るんだろ……？」

「そうだね、行くなと言っても居座るね」

キサさんは、最後には笑いだしていた。何がおかしいのか、それを聞くと、
「いや、馨の日本語がヘンな男前である謎がやっと解けた。外国人だったんだな

そんなことを言っていた。

洗面所に座り込んだままの私に、キサさんがもう一度言った。

「馨、崑崙に行こう——。このまま、弱って力尽きるなんて、僕の知ってる甲斐馨じゃない」

終わったと思った私の人生は、実はここから始まった。

2 胎動

本当は、こんな状態を知られる前に、キサさんの前からは格好よく消えるつもりだったのだ。

上海にでも帰って——、いや、いつそ誰も居ないあの村に帰って、静かに大地に還ってもいい、と思っていた。

当然のようにこの人外の力を使ってきて、仇敵であるはずの組織に与して、多くの命を奪ってきた私が、誰かに「ハイ、ここまでよく」と言われれば、甘受するのもまた一つの道だ。

(ん？ ……「誰か」?)

だいたい、日本に来てからだって、ロクなことしてない。

ブラブラと高校を卒業して、キサさんが始めた怪しげな商売を手伝って、いつも適当に力技で仕事を終わらせていたけど、損害額がいつも報酬額を上回るものだから、雇用主には「無能」だの「クラッシャー」だの、とさんざん言われてき

た。

それでも、キサさんとの生活が楽しかったから、中国に帰るのも、他の四神を探すのも忘れて、のほほんと毎日を過ごしていただけ——。

ああ、私も普通の女の子なんだな——とか、本来なら、日本でこうして、人の急所なんか知ることなく——。

（「本来なら」……？）

あ、なんか、急に思いついた。

いや、思ったことがないわけではないんだけど、いまほど明確に、クリアーに、言葉で考えたことはなかった。

「私は『なぜ』黄龍の力が使える……？」

それは、いつだったか、キサさんが聞いた疑問でもある。

そうだ。私はその『なぜ』に対する答えを知らない。いや、知らされてない。

誰に？ そう、誰かに、だ。

黄龍は最初から人間の住まうこの世界に居たのか……？ いや、龍脈の始まりが崑崙にあるというなら、それはありえないだろう。

なら、黄龍はもともとは神仙のものだった……？　しかし、だとしたら、人間に宿るのはおかしい。

自然にそうなったんだよ、なんて誰が納得する？

神仙というものが（居たとして）、人間に、人外の力を授けたと考えるのが、一番、しつくりくる。

しかし、使い捨てのマジック・アイテムならともかくとして、神獣ではモノが大きすぎる。

「ねえ、キサさん。もしかして、黄龍も四神も、『誰か』の思惑によって、地上徘徊してるんじゃないの？」

「なんの話だ？　誰かって、誰？」

「うん、例えば、どつかのオエライさんとか」

「……？」

「でも、仮に人間にくれたか、預けたかしたとしても、それは果たして見返りなしなのか……？　そんなはずないよね」

「ただほど高いものはないって話か」

「うん。金の動きを追え——つてのは、貨幣経済での話だけど、根本の部分では、どんな話にだって応用できる。さて、ここからが問題です。黄龍も玄武も、なぜ一民間人の好きにできるような状態なのか。答え、誰かがそう仕向けたからです。……どう思う？」

「その『誰か』が、考えられないほど、上の方に居る人物だと、馨は考えてるわけだ」

「うん、そう。まあ、居たとしての話なんだけど。で、その『誰か』は理由なり目的があつて、そういうことをしたんじゃないかと思うんだけど、それはどう思う？」

「具体的な理由は、いまの段階では思いつかないが……、馨のその直感は正しい気はするな」

「そか。なら、やっぱり、私達は崑崙へ行こう」

「どうしてそうなる」

「だって、恐らくその『誰か』は私の敵だよ」

「なぜ……？」

「いや、単純に、こんなイケイケな女の子の寿命をたった二十年に設定しやがって、コノヤローってこと」

「いたいけって言いたいんだな」

コソコソと電子辞書で確認して、咳払いした。

「あー、それですね、私の体が動くうちに色々やりたいんで、可及的速やかに情報収集してから、動きましよう。OK？」

キサさんの答えを聞くまでもなく、その日から私達の戦いは静かに始まっていった。

私達が目指したのは、勿論、実際の地上にある新疆の崑崙山脈ではない。

董天の言ったことが正しければ、東半球の赤道以北の限定されたエリアの中心点というのは、西安と成都のほぼ中間くらいということになる。

そこに何があるのか、もしくは何も無いのか、なんにせよ、行ってみななければ始まらない。

キサさんには、一度だけ念を押した。

「今回ばかりは私にも勝算がない。私達の邪魔をする人が出てきたら、それはいつもの興信所仕事で因縁つけてくるチンピラ君や、どこぞの軍隊あがりとかじゃないと思う」

「そうだね」

「それに、いまの私では、キサさんの命は保障してあげられない」

「誰かに保障してもらおうとは思ってないよ」

「……そう」

「問題、ないだろ？」

笑って、そうだね、とかるうじて言えた。

まあ、確かに、彼が『ブラック・キサ・ハイパーモード』になれば、大魔王にだって勝てそうな気もするけど……。

キサさんは、それから、しばらく仕事を休業する旨を各所に連絡したり、未解決の仕事を私以上の力技で終わらせたりして、忙しそうにしていた。

私は、主に国際電話で情報を集め——「コレクトコールで！」というキサさん

の鬼の形相の言いつけはちゃんと守ったさ——、整理していた。

その中でも一番引つかかったのは、香港に居るはずの弟が、ここ一年ほど、行方不明になっていることだった。

あの子は放浪癖があつて、各地を身一つでフラフラする常習犯なので、最初はいつものことと気にしていなかったのだが、義兄の話では、弟が消える直前に誰かが訪ねてきたという。

「どういうこと？ ユエ（注1）は、そのじーさんにかどわかされたとでも？」

「別に険悪な雰囲気ではなかったから、それは無いと思うんだけど……。そそのかさされて着いていったにしろ、もし自由な環境にあるなら、便りの一本くらい寄越すかなって」

淳兄（注2）のこのスタンダードな中国語も、懐かしいな。

「出て行くときはちゃんと行っていったんでしょ？」

「まあね。いつもみたいに『ちよつと遠出してくる』って感じだったけど。でも、一年も音沙汰ないと、さすがに心配で」

「あの子だって一通りの武術は仕込まれてるんだから、何かトラブルに巻き込ま

れてたとしても大丈夫だよ。もしどこかでのたれ死んでても、それはあの子の責任だし」

「相変わらずだねえ、沙龍は」

口ではそう言っても、心配になったので、後で董天に連絡しておこう、と思った。

「あ、そういえば、淳兄は元気？ 再婚とかしてないの？」

「ホントに、相変わらずだね、沙龍は……。そうだね、もう十年経ったのか……」

淳兄は、私の育った家の長女の旦那さんだった人だ。

私にとっては血のつながらない義姉の夫ということになるが、大家族になると、もうそこらへんはごちゃつとしていて、実際には、歳の離れた兄代わりみたいなものである。

日本に来る前に会ったのが最後だから、もう三年くらい会ってないが、淳兄はずっと亡き妻を偲んでいて、あの『蒼龍会』の襲撃事件があった直後は誰よりも悲嘆に暮れていたらしい。淳兄が殺されなかったのは、元々あの村の出身ではな

く、事件当時は香港で仕事をしていたからだ。

『蒼龍会』の連中も、無抵抗の者と、村とは関係ない者は殺さなかった。

が、あの村の住民は、女性も子供も例外なく、赤ん坊の頃から徹底的に武技を仕込まれた戦士である。当然、襲われれば返り討ちにしようとする。

その結果として、皆殺しの悲劇が起きた。

あの村の人間でいま生き残っているのは、虫の息だったが奇跡的に助かった偃月と、遠出していて村には居なかった義姉の碧媛くらいだろう。

「再婚は考えてないよ。そんな人も居ないしね」

「そう……」

「偃月は、またフラッと戻ってきそうな気もするんだけど……、ひよっとして沙龍の所に行ってるかとも思ったんだけど？」

「いや、こっちには来てないよ」

「そっか。さすがにもう姉離れはしたのかな」

淳兄は笑って言っていた。

まあ、ユエの場合は笑って済ませられる程度のシスコンだからいいけど、早く

彼女を作って欲しいと私は密かに願っている。

それはいいとして。

確かに、あのユエが私にも連絡を寄越さないのはおかしい。

以前は、数ヶ月に一回は連絡があったのに。

国際電話じゃ埒が明かないので、淳兄には「西安に行く前に香港に寄る」とだけ言っただけで電話を切った。

嗚呼、背中の古傷が痛むぜ……。

(注1) 偃月の原語読みが「yan yue」。沙龍は弟を「月(yue)」と呼んでいる。

(注2) 「く兄」というのは、男性に対する尊称で、日本語での「兄」とは意味が違う。いわゆる一般的な「(血の繋がった)お兄ちゃん」という意味の中国語は「哥哥」。

3 幻の名酒を求めて

「さて、諸君」

場面はいきなり西安の超一流ホテルの一室だ。

ここに来るまでに、東京の職場は畳んできたし、私にしては比較的長続きした恋人には一方的に別れを告げてきたし、香港の淳兄に会ってきたし、その後、上海にも飛んで情報をかき集めたが、大した収穫はなかった。

しかし、昨日の深夜、董天が部下にしている若者がこのホテルを尋ねてきて、にわかには事態が変転していく。

董天の奴、上海に居ないと思ったたら、ちゃんと私の言ったこと調べてくれたのか。

「で、本人はどこに居るの？」

と聞いたら、若造は「知りません」と硬い表情で答えていた。

別に取って食やしないっての。世間的に見れば私なんてまだイタイタな小娘だ

ろうが。

怯える若造をさっさと帰して、董天の報告書を読んだ。

で、その朝、というわけである。

いま、ここに勢ぞろいしているのは、ボトルを持ってきた私と、座っているキサさんと、新顔二名。

一人は、日本人にしては背の高い、一見爽やかスポーツマン風だが、普段は、政治家を舌先三寸でだまからかして法案成立をさせたりさせなかつたりしている自称いい加減な占い師。松木ゴロー、二十八歳。

しかし、本当はスポーツマンでも、占い師でもない。

家は神職をやってるお金持ちらしいが、色々メンドイのは嫌と言って勝手に分家に納まり、気楽に占いで生計を立てている。

数年前に仕事で会った人だが、以来、わりと親密にしている。

しかし、基本的にこの人はただの愉快犯である。今回、このツアーにひつついてきたのも、キサさんを落とすため、と言い切る。

ちなみに、ゲイではなくバイだ。老若男女、手当たりしだい口説いてるフリー

セックス野郎（注1）で、最初に会ったときは、私を口説いてきた。

が、それも彼にしてみれば「初めて会った人はとりあえず口説かなきゃ失礼」というモットーによる挨拶程度のもので、三十分後にキサさんが登場したときは、私のことなんか冥王星までフツ飛ばしていた。

そして、二人目。私の義姉の碧媛。

年齢は知っているが、これを言うときとアンドロメダあたりまで蹴り飛ばされるので、妙齢ということにしておく。

この義姉も、弟ほどではないが一つの場所に落ち着けない風来坊で、捕まえるのに苦労するのだが、今回は偶然にも西安の街でバッタリ出会った。

「沙龍か。なるほど、これはアツラーのお導きかもしれん」

「いつ回教徒になったんだよ」

「いや、数日前までそのふりをしていただけだ。ちよつと仕事でな。リヤドに行ってた」

「ホー……」

この義姉も色々謎で、小さい頃から、普段の生活風景などにも姿が抜けてるこ

とがよくあった。

もしかしたら、ICPOの刑事なのかもしれないし、某国の工作員なのかもしれない。勿論、どっちも冗談だが。

頼もしい碧姐々がこのツアーに参加してくれるなら願ったり叶ったりだ。早速、パーティーに引き入れた。

「さて、諸君。ここに大層美味なるお酒がある」

ドン、と机にボトルを置いた。

まだ朝早い時間で、アルコールはちと不似合いではあるが。

「ま、騙されたと思って飲んでみたまえ。なに、味見はしてある。毒も麻薬も入っていないから、大丈夫」

少々芝居がかった口調と仕草で、一体何が始まるんだ、という顔の三人にそのボトルの中身を飲んでもらった。

「……フム」

「これは……」

「また、随分と……」

三人三様の顔をして、グラスの中身を堪能している。いや、せずにはいられないだろう。

「どう？ どう？」

「なんとというか変わった味だな。いや、信じられないくらい美味しいんだが」と、キサさん。

「そうだね。いままで味わったことのない……」
マツキーはこういう感想。

「沙龍、これ、どこで手に入れた」

碧姐々は、何か知ってるらしい。

しかし、その問いには答えず、このお酒の説明をした。

「成分的には限りなく普通の杏露酒。でも、不思議なことに、同じ糖度の杏を使つて普通に醸造してもこのお酒は造れないらしい。多分、いま、地上にこのお酒はここにある一本しかないだろうな」

疑問顔をしているお二人。

「つまり、人間業じゃないってこと。噂では、仙人が育てた樹齡ン千年の杏で

造ってるとかいう話で」

「……で？」

キサさんが先を急かす。

「うん、だからね、この幻の名酒を造っているという村に、行ってみようかと思
いまして」

「はあ……？」

「題して『幻の名酒をゲットせよ。秘境の村を探せツアー』」

「……」

「……」

「……」

三人が揃って胡散臭そうな目を向ける。

「信用されていないのねアタシって……」

「もしかして、偃月君がそこにいるかもしれないってことか？」

と、キサさんが勘のよさを發揮して言った。

「フフフー。このお酒を持ってきてくれた人の話では、どうやらそうみたい」

行方不明のユエの話は、碧姐々にもした。

そして、私と同じように「あの子は放っておけばそのうち帰ってくる」という反応をして、その数秒後に全く違うことを言い出した。

「もしかして、ユエを訪ねに香港に来たってのは、風林の知人かもしれない」「爺々の？」

「ウム、風林が元々はあの村出身じゃないってことは知ってるな？」

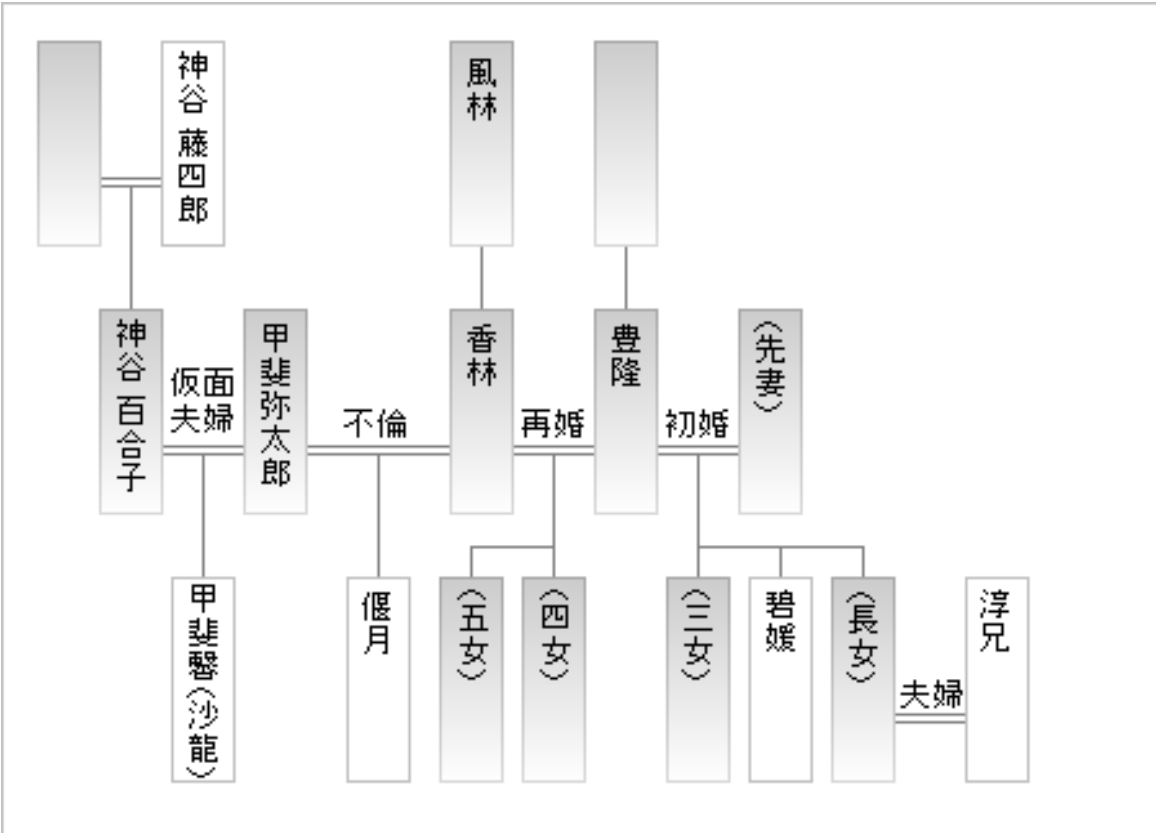
「うん。香林の話では、風林の代から居ついた、元は北の方の遊牧民でしょ？」

「ああ、その話は半分本当だが、半分は嘘だ。風林の過去については、かなりあやしい部分があつてな」

十年前にはちっとも知らなかったそんな事実をいきなり聞かされて、思わず身を乗り出した。

私と碧姐々の間に、血の関係はない。偃月と碧姐々の間にも、ない。

しかし、私と弟の偃月には半分血のつながりがある。



そして、私の養母、香林の父である風林と、実際に血が繋がっているのはユエだけなのである。

その関係は複雑なので、大抵、説明された人は混乱する。

昨日、キサさんに説明するために書いたものを、改めて自分でも見てみた。灰色は故人である。

ユエは、自分が豊隆の息子であると、わりと最近まで信じていた。私だって、そう信じていた時期もある。

なぜなら、香林と甲斐弥太郎の関係はバリバリの不倫だし、ユエが出来たときは、恐らく、私の母が亡くなった直後くらいなので、いくらなんでも不道德だと思っただけ本人達が秘密にしたのだろう、と普通には考えられる。

しかし、それは単に分別のつかない子供に対する配慮だっただけで、村では公認だったし、実は香林に甲斐弥太郎の子供を産むように薦めたのは豊隆自身だったというのだから驚きだ。

そこらへんが、あの村のすごいところなのである。

つまり、村全体が『黄龍の保持者』の後継者が欲しいがために、甲斐弥太郎の

遺伝子を持った男子を「作った」のである。

幸か不幸か、偃月が産まれて、その陰謀はそこで終わったが、もし偃月が女の子だったら、彼等は何度でも男の子が産まれるまでこの馬鹿げた子作りを繰り返しただろう。

母は娘である私一人を産んですぐ亡くなったし、あの夫婦は仮面夫婦だったわけだから、当事者達的心情としても、そこに愛憎渦巻く人生劇場はなかったのかもしれないが、いずれにしても殺伐とした話だ。

といっても、実際、私が子供の目で見えていた限りでは、香林と豊隆は仲は悪くなかった。私の両親も仲は悪くなかったらしいので、それだけが救いといえれば救いだ。

「なに？ 鍵を握ってるのは風林なの？」

「さあ、それはどうか分からん。一度、村の長老に言われて、風林の過去を洗って見たことがあるんだが、大した事実は出てこなかった」

「碧姐々、あのさ……、ものすごく今更なんだけど……、聞いていい？」

「ん？ なんだ？」

「昔、よく村を空けることがあったよね？ あれは、そういう長老の命令で動いていたってこと？」

「ああ、それもあるが。そう言えばお前にははっきりとは言っていなかったな。

知ってるかとも思ってたが。実は、私は仙籍を持ってる。といっても、師が洞府を持っていない、アウトローなんで、正式メンバーとは言えんが」

「センセキ？ え……？ ええええくッ!? 仙籍いいいい!？」

灯台下暗しか！ なんと、ここに実物の仙人様が居たのかよう！

「碧姐々、仙人だったのか！」

「いや、まだ道士だ」

「それはどうでもいい！ つまり、仙界ってホントにあるんだな!? 御伽噺じゃなく!? して、それはどこに!？」

「ちよつと落ち着けて、沙龍。お前、信じてなかったのか？ なら、なんでここに来た」

「え、いや、なんでだろ……。直感？」

そう答えると、姐々が苦笑した。

「相変わらず行き当たりバツタリなんだな。まあ、いい。とにかく座れ」

私も歳のわりに動じない方だとは思っているが、まだまだこの人の前では修業が足りない。

というよりも、身内の気楽さで、サバイバル・モードが解除されるだけかもしれない。

「で、話を戻すが、この風林がな、やはり崑崙の関係者だったのではないかと私は思っている」

「へ、へえ？」

「普通の冗談好きの爺々にしては、不自然なところがいくつかあった。それに、軍属の経験があつたくらいで、自称遊牧民がまともに『蒼龍会』の連中とやり合えるとは思えない。私はその現場を見てないから何とも言えないが……」

そうだ。なんで忘れていたんだろう。

“あのととき”、風林は私を庇って大層な死闘を繰り広げていた。

そして、董天は、風林だけを狙っていたような感じがある。

「うーん……。だとしても、碧姐々。風林が只者ではない道士だったとしても、

その知人かもしれない人物は、ユエを何の目的で、どこに連れて行ったんだ？」

「さあな。それも分からんが、黄龍絡みであることは間違いないだろうな」

「なんでそう言い切れる？」

「アツラーのお告げだ」

「オイオイ……」

碧姐々の冗談は置いておくとしても、ユエの行方を探すことは、何か意味がありそうな気がした。

(注1) フリーセックス……沙龍は少し誤解しているが、本来は一九六〇年代のアメリカにおける「性別からの開放運動」が元になっている。

西安からやや南に下ったところにある広元という町で三日ほど滞在した。

広元の近くには白龍江という河川がある。その近辺に、董天が報告書で「偃月が居る可能性が高い」と指摘した場所があったのだ。

そして、そこは奇しくも、私が最初にアタリをつけた「北半球赤道以北エリアの中心点」でもあった。

(これは偶然か……?)

碧姐々に聞いただと、「私が普段出入りしている場所とは違う」とだけ言われた。

なるほど、崑崙への道には、幾つか入り口があるわけだ。

「ここから先には暫く人工物はない。最後の文明的な生活になると思うんで、ベッドとは別れを惜しんでおくことをお勧めする」

広元での最後の夜、パーティー・メンバーにはそう言って、特に中国大陸のウ

ンザリするような広大きさを知らないキサさんとマツキーには念を押した。

といっても、オンボロのレンタカーで一週間も走れば、目的地には着くだろう。

安宿の一室で寝酒をチビチビ飲んできると、眠れないのか、キサさんがやってきた。心なしか、顔が険しい。

「どういふつもりなんだ？」

「え……？」

「偃月君が心配なのは分かるけど、馨には、レベル1から地道にスライム倒して暇なんかないんだぞ」

「まあ、そうかもしれないけど……」

キサさんは知ってるのだ。私の病状が酷くなってきたことを。

実際、身体はかなり軋んでる。この街に辿り着いたときも我ながらホツとして、三日といわず、一週間くらい滞在したかった。

「私も、よく分かんないんだ」

「……」

「ところで、マツキーは？」

「さあ？ さつき、街中でナンパしてるの見かけたけど」

「またか。あの人は一体なにしに来たんだ。キサさんも、口説かれても、あんまり相手にしないでよね。あの人じゃ……」

何を言いかけたのか、自分でそれに気付いて、ゾツとした。

あの人じゃ、あなたを任せられないよ。

そう言おうとしたのだ。傲慢だけど、正直な気持ち。

「……馨？」

「なんでもない」

そうだ。感傷的になってる暇はない。レベル99の反則技が使えるうちに全てを終わらせなければ、私はサナトリウム直行か、最悪、冥府直行なのだ。

4WDで走り続けること、五日間。

中国大陸の果て無きスケールの大きさを忠告したのは私なのに、一番最初に音

を上げたくなつたのも私だった。

砂漠が続くかと思えば、突然森林に出くわしたり、さらには断崖絶壁の岩山を迂回し、滝壺で行き止まり、なんて道程を繰り返し、七日目に熱を出して寝込んだときは、医師免許を持っている碧姐々に怒られた。

しかし、さんざん怒った後で、碧姐々は大あく溜息をついて言った。

「分かったよ、沙龍。お前、もうガス欠なんだな？ だから、崑崙へ行こうとしているのか」

「うん、そう……」

「神獣は人の身に余る力。『保持者』は、最後はその神獣に食われるのだという……。弥太郎さんも三十前後で亡くなった。お前は少し早すぎるようだが……」

「碧姐々は、何か知らない？ 黄龍のこと……」

「私は崑崙では新参者だし、龍脈の始まりとされるところからは、かなり遠い場所に住たからな。お前の役に立てるような情報は持ってないんだ、悪いな」

「そっか……」

「しかし、沙龍。お前の求めるものが崑崙にあるかどうかは分からんぞ。仙人の

秘術は、他人に施すものではなく、自分が得るものだし、仙桃というものもあるにはあるが、あれだって万能薬というわけじゃない。黄龍に蝕まれたお前の身体を治せる術が見つかるかどうか……」

「実のところ、具体的に何を、ってのは、私も分からないんだ。ただ、何かあるかなっていう希望的観測で来てみただけ」

「お前らしいよ」

「でも、ユエはさ……、何か知ってる気がする……」

眠りそうな意識の中で言った。

碧姐々が額から送り込んでくれる体温が気持ちよくて、目を閉じた。

「そうだな、あの子がもし自ら行方をくらまして、何かをしているとしたら、それはお前のためだろう」

「いい加減、自分のために生きてもいいのにな。負い目を感じるとしたら、それは私の方なのに……」

「お前やユエに罪はない」

「罪は……、結構犯してきたよ。私はね」

「生きるため、だろう。それが罪になるなら、人類皆、罪人だ」

「プ……、今度はキリスト教徒？」

「いいから、もう寝ろ」

その日は、妙な夢を見た。

死んだはずの香林が食事の用意をしていて、その傍には、豊隆と甲斐弥太郎も居る。

私は父の顔を知らないし、写真も見たことはないのだが、そうだと分かった。

「おめーがしらばっくれて日本で余生を送ってりや、『こいつら』も余計な宿命背負い込むこともなかったのによ」

豊隆がそんなことを言っていた。

私は、この養父が大好きだった。

村一番の猛者で、若い頃は相当悪さをしてきたような皮肉屋で、毎晩浴びるほどのお酒を飲んで陽気に酔っ払い、最後はいびきをかいて寝てしまうような、そんな人だった。

対して、話に聞く甲斐弥太郎はそれとは正反対の男だ。

岡山の祖父も「ヤサ男」と言っていたし、当時を覚えている碧姐々も「都会から来た軟弱男」と言っていた。

「それは私も何度も考えました。私の代で終わらせれば一番平和なのかもしれない、と……」

夢の中の弥太郎が言う。

「しかし、私は弱い男です。結局、運命には逆らえなかった」

「まあ、どっちが『保持者』になるにしても、ならねえにしても、俺が立派に育ててやらあ」

そう言う豊隆も、後ろを向いてる香林も、弥太郎が明日をも知れぬ命であることを理解しているようだった。

翌日、とうとう、車ではどうしたってこの先は進めない、という所まで来た。

目前は、鬱蒼とした針葉樹のジャングルで、更に視線を上げると、頂上が霞んで見えない山々が連なっている。

松木ゴローは、手元の地図と右方向に見える山を見比べていた。

「どしたん、マツキー」

「アレ？ やっぱりそうか。磁石が壊れてる」

「磁場が狂ってるんでしよう。ちよつと降りて様子を見てきます」

キサさんが最初に車を降りて、運転手をしていた碧姐々も降りていった。

「これは、偶然かな……」

私が呟くと、マツキーは律儀に返答する。

「うーん……、偶然で片付けちゃいたいところだけど」

「……？」

「そうそう。偶然と言えば、もう一つ。この前の街で、キュートな女の子から寝物語に面白い話を聞いたよ」

マツキーはニツコリ笑って、指を一本立てた。

「ちよつとは慎しむという心意気はないのか。こっちは真面目に真実探求の旅をしてるってのに」

「まあまあ。諜報活動の一つだと思ってよ。で？ 聞きたい？ 面白い話」

「なに？ 話したいなら話して」

「うん、単なる噂話らしいんだけど、この近所には、一年中霧に包まれた場所があつて、そこに迷い込んだ人間は、記憶を消されて戻ってくるっていう話さ」

「アブダクションの話なら聞かんぞ」

「宇宙人は関係ないんじゃないかなー？ 戻ってきた人間は口を揃えて、超美女の酌で信じられないくらい美味しい酒を呑んだって言うらしいから。しかも杏の木の下でね」

「杏の木……？」

「だからなのか、そこは『杏源郷』と呼ばれてるらしいよ？」

「『桃源郷』のパクリかよ……」

「まあ、行ってみたら秘境を売りにしたコテコテの観光地だったりするかもしれないけど。奇妙なくらい、馨君の話と一致するなーって思ってたんだ」

ふーん、と、いい加減に相槌を打ちながらも、私はもう確信していた。

辺りが濃い霧に覆われていくのを見て、車のドアを開け、機械的にシートを倒した。

そこに、キサさんの『一文字助宗』と、私の『備前長船秀光』がある。

岡山のじーちゃんから奪ってきた、曰く『国宝級の名刀とまでは行かないが無茶苦茶値打ちモノ』だ。

その名刀二振りを手に、改めて外に出ると、近づくシルエットが一つしかない。これはキサさんだ。

「あれ？ 碧媛さんは？」

マツキーが聞いたたら、キサさんが眉をひそめた。

「戻ってないのか……」

私は、キサさんに『一文字助宗』の方を放って、辺りを窺ってみた。

「おーい、碧姐々ー！」

呼んでみるが、反応はなし。

十秒後にもう一度呼んでみたが、この霧の中、我々三人以外の人の気配はなかった。

「ウーン、これはなるべくしてなった状況か、それともハプニングか……」

「どうする？ 馨君」

「碧姐々を探しに行くか、ここで待つか……、それとも、放っぽって先へ進むか……」

「先へ……進めるのか？」

「どう思う？」

と、キサさんの問いを、そのままマツキーへ流した。

「なんで僕に聞くの？」

「だって、専門でしょ？　こういうの」

そう、この人はただの占い師じゃないし、ただのフリーセックス野郎でもない。
い。

日本に風水ブームが起こる千年以上前から、あの国で陰陽道を極めていた一族の若様なのだ。当然、私とキサさんの正体も知っている。

「で？　どうなの？」

「この霧の結界はね、外部からの侵入者を阻むというよりも、特定の者を誘い入れるためのものだよ。ちよつと、パワーが桁違いなんで、僕も驚いてるところなんだけど」

「何者かの毘ってこと？」

「いや、悪意は感じられないな」

「じゃ、進むしかないね」

「え？ 碧媛さんはどうするの」

「姐々は、大丈夫。合流しようと思えばできるのにしないだけだと思おう」
「なぜ？」

「さあ？ 私達と一緒にだと不都合なのかもしれない。色々」

「不都合って？」

「立場上ってことだと思おう。まあ、それはおいおい分かるでしょ」

「……なんかさ、馨君って、もしかして、勘だけで動いてない？」

「今頃気付いたんですか、松木さん」

悪かったな。これでも、少しは色々考えてるんだってば。

私の一歳下の弟は、小さい頃、『泣き虫偃月』と、村の子供達によく苛められていた。

歩き始めると同時に体術を仕込まれるあの村では、弱音を吐いたり、人前で泣いたりすることは一番恥ずべきことだった。

修練が辛いのはみな同じで、大抵の子供は影でこっそり泣いていたが、ユエはそれをやらずに、思いつきり泣くもんだから、余計苛められたのだ。

しかし、ユエは泣き虫ではあったけど、弱虫ではなかった。

ある日、香林と二人で山に入ったがはぐれてしまって、泣きながら一人で熊を倒して帰ってきたという逸話もある。

豊隆は、自分の子供を分け隔てなく可愛がったが、中でも偃月は唯一の男児だったこともあって、（血が繋がっていないにも関わらず）特別に目をかけていたような感じがあった。

多分、この時代に、何かインプリンティングされたんだろう。「黄龍の守護者たれ」と。

いま、唐突に目の前に現れた偃月は、そういうまつすぐな目をしている。

「やっぱり現れたな、沙龍哥々ユコ（注1）」

「ユエは、どうしてここに？」

「散歩。哥々は？」

「社員旅行だ」

「……」

「……」

明らかに、和やかな姉弟の再会という場面ではない。

キサさんとマツキーもなにか言いたそうな顔でこちらを見ている。その二人に声をかけたのはユエのほうだった。

「マツキさんも、コジローさんも、久しぶり。ゆっくり旧交をあたためたいところだけど、そうもいかないだろうな」

以前、ユエが日本に遊びに来たときは、この四人で京都旅行もしたし、その

後、キサさんがひとりで香港に行ったときは、ユエが案内した。気心は知れてい
る仲である。

「ユエ、色々聞きたいことがある」

「そうだろうな。できれば、それに答えてやりたいが、俺が言いたいのは一つ
だ。哥々、このまま帰ってくれないか？」

「それはできない」

「そっか。まあ、そうだろうな。分かった。哥々がそう言うのは分かっちゃい
たが……」

「ユエは何をどれだけ知ってるんだ？」

「半分だろうな」

「半分？」

「ああ。なんで哥々がいまの時期、ここに来たのか。この先に何があるのか。そ
して、この先何が起こるのか……。それは分かってる」

「でも、結果が分からない……？ いや、その結果があまりよくない可能性があ
るから、いま、お前が私の目の前に立ってるのか」

「そういうことだ」

私の後ろをついて回っていたちっちゃなユエはもうどこにも居ない。

だけど、面倒なことに、この子の性根はあの頃とちつとも変わってない。

だがな、ユエ。残念なことに、私もあの頃とちつとも変わってないんだ。

「では、お前の選択肢は二つだ。そこをどくか、私に倒されるか」

秀光の刀袋の紐を外し、本体を取り出した。

「それは無理だ。この結界の中では、哥々は満足に動けないはずだし、いまの身体では尚更、俺には勝てん」

やはり知っているのか。

私の病状を。

しかし、

「それを判断するのは私であって、お前ではない」

ユエの顔がこわばった。私の本気度が分かったらしい。

が、私は、ユエが香港でお熱を上げていた女の子の名前を思い出すのに忙しくて、カッコつけてる余裕はホントはなかった。

「一応、一度だけは忠告しよう。そこをどけ、偃月。私の邪魔をする奴は、誰であらうと容赦はしないぞ」

「馨君、手伝おうか？」

マッキーがそう言ってくれたが、断った。

「いや、単なる姉弟喧嘩だ。すぐに終わる」

「……ふう。哥々にとって、俺はいつまでも頼りにならない弟か」

「頼りにならないとは思っていないが、お前に負ける気はない」

「俺だって、この一年、遊んでたわけじゃない」

「だろうな。だが、お前こそ、見誤るなよ。黄龍のオプションなしで私がどれだけ闘えるか見せてやる」

緊張が走る。

ユエはまだ戦闘態勢を取っていないが、この状態から、瞬時に攻撃できるのが李偃月である。

三秒ほど待って、鞘のままの秀光を小脇に抱え、ポンと手を打った。

「あ。そういえばさあー」

と、トゲトゲの空気をスツパリ切って、続けた。

「栄蕾、無事かなー。この霧の中ではぐれちゃってー」

「えッ!? 栄蕾!? い、一緒に来てるんかいッ……!?!」

急に緊張を解いたユエは左右を見渡す。

その一瞬の間に、我が弟の背後に回りこむ。

「甘いんだよ。この未熟者」

ズゴツ

と、秀光の鞘でユエの後頭部を軽く殴った。

「テッ……!」

「これが抜き身だったら、死んでたな? ハイ、私の勝ち」

「……哥々、ズルイ」

「たわけ。こんな初歩の手に引っ掛かるお前が悪い」

なるほど、我ながら確かにすぐ終わったわい。

「それでだな、ユエ、事情を——」

と言ったそばから、またハプニングが始まる。

ドゴオツ

と、派手な爆音がして、わずか数メートル先に何かに着弾した。

「なっ、なんだ!？」

「あ、ヤバ……」

ユエがそそくさと身を翻して、逃げるように背を向けたのだけ見えた。

「ちよつとっ!？」

キサさんとマツキーの無事を確認する暇もなく、またしても、大地を抉るような爆発音が二度、三度、した。

某国のミサイル兵器ではなさそうだし、それほど広範囲を巻き込む威力はなさそうだが、あれに直撃したらまず助からないだろう。

「こらあ！ 軍事演習ならヨソでやれ——!」

なんて言ってる場合じゃない。私も逃げなければ——。

上空から撃ってきているのは間違いない。

だとすれば、戦闘機か？ いや、しかし、エンジン音もプロペラ音も聞こえない。

ただ、風を鈍く切るような音は聞こえた。

「飛龍！ ここには哥々も居るんだぞ！」

何やらユエが騒いでいる声が聞こえるが、この霧の中で姿は分からない。

「だから、聞けって！ 飛龍！」

私の馬がどうしたって？

ああ、もう、なんだってこんな目にあわなきやいかんのだ。

「馨！」

「こつち！」

キサさんの声が遠くに聞こえたが、やはり姿は見えない。

私は動かない方がいいのかもしれない。どうも敵の狙いはユエのようだし。

「おーい、馨くーん」

呑気なマツキーの声はわりと近くで聞こえる。

「こつち！ マツキー、この霧なんとかして！」

「えー!? 聞こえないよー」

とところどころ爆音に消されて、お互い何を言っているのか分からない。

ユエの叫び声も、ところどころ支離滅裂だ。抜け駆けがどうの、と、ニヤンニヤンがどうの、と聞こえる。

「マツキー、この霧なんとかして!」

他力本願で叫んでみたが、その数秒後、見事に霧が晴れた。

「え……?」

思わず、我が目を疑う。

アマゾンのような針葉樹のジャングルがあつたはずなのに、目の前に広がるのは眩しい程の青い空と、赤茶けた山道。その脇には背の低い木々がポツポツと茂っているだけ。

息切らして座り込んでいた私に、マツキーとキサさんが近付いてくる。

「おーい、大丈夫? 馨君」

「いまの、松木さんがやったんですか……?」

「うん、結構簡単だった。媒体がすぐ見つかったから。……馨君、大丈夫?」

「だいじょうぶ……だと思っけど……」

私が呆然と見上げる先に、マッキーも視線を移した。

青空の中に、何かが飛んでいる。

あれは、飛行機でも鳥でもないし、スーパーマンでもない。

しかし、紛れもなく人の形をした、恐らく男の子——で、ユエを追い掛け回し、ロケットランチャーのようなものを空から撃ち続けている。

「飛龍——！ だから、俺の話をつ！」

だから、私の馬がどうしたって？

（注1） 哥々……「お兄ちゃん」の意味。 偃月は沙龍のことをわざとそう呼んでいる。

私が育った村では、一人で馬に乗れるような歳になると、子供達はみな、自分の馬を持ちたがった。

しかし、馬のオーナーになれるのは成年になってからと決まっていたので、子供達は家長の馬にたまに乗せてもらっただけで我慢していた。

が、私には贅沢にも物心ついたときから、私専用の馬が居た。『黄龍の保持者』だから長老達が許してくれた、というわけではない。

その馬は、ある日、村に迷い込んできた野生馬で、手のつけられない暴れん坊だったのを、大人達が何とか馴らそうとして失敗し、最後には村から追い出そうとしていたのだ。

しかし、私の前では嘘のように大人しくなって、以後ずっと、私の馬となったのである。

私はその馬に『飛龍』と名付け、可愛がった。赤兎馬ほどの賢い名馬ではない

が、どの馬よりも速く走ることができた。

気性が荒くて、乗り心地も決して良くはなかったが、アーモンド型のつぶらな目が可愛くて、馬にしては珍しい、綺麗な群青色の瞳をしていた。

『蒼龍会』の襲撃のときにはぐれてしまつて、私はそのまま上海に拉致されたので、その後の行方は知らない。

霧の晴れた風景の中で、ユエが逃げ惑いながら叫んでいる。

「飛龍！ 少しは！ 俺の言うことを！」

しかし、ユエも飛行少年も、すぐに視界がクリアーになったことに気付いたのか、地形を変形させるような大喧嘩から、単なる口喧嘩に移行した。

「お前が抜け駆けしたせいで、俺はあの後、九玄にとつ捕まつて、岩牢にぶち込まれたんだぞ！」

「だから、それは悪かつたつて！」

二人の様子を遠巻きに見ていた私達は言葉もなく、ただ呆然としていた。

「ちよつと……、浮いてるよ……、あの子……」

足元に反重力装置でもついてるのか、少年の身体は空中に滞空している。

「武空術……？」

マッキーがそう呟くと、キサさんが嗜めた。

「いや、それはどこかに抵触しそうな……」

そのうち、少年が口喧嘩もやめて、地上の一点、つまり、こちらを凝視した。

「……？」

こちら——というか、もしかして、私？

キサさんも、マッキーも、そして、少し離れたところでへばっているユエも、少年の視線と、その直後の行動に目を見張った。

勿論、私もだ。

「緑麗——っ！」

「……っ!？」

え。いや、シヨタ趣味はないんですけど。

じゃなくて、どういうこと？ 私、見知らぬ少年に抱きつかれてんですけど。

「会いたかったぞ！ 緑麗！ 久しぶりだ！」

「えーと……」

「馨……、誰なんだ？」

いや、それは私が聞きたいんですが。

固まったまましていると、ユエが「あーあ」という顔をしてやって来て、少年の身体を引き剥がしてくれた。

「邪魔をするな、偃月！」

「こんなに結界荒らして、娘々に怒られるぞ？」

「怒られるのは、勝手に緑麗を追い帰そうとした偃月の方だ」

「飛龍、お前だって、崑崙の連中が哥々を利用しようとしてるのは分かるだろ？」

「『飛龍』……」

ユエが言ったその名前を、なんとなく繰り返した。

「私の馬と同じ名前……」

すると、ユエに噛み付いていた少年が、急に顔を輝かせた。

「ああ、それが俺だ！」

「は……？」

その場の一同を、助けを求めるように見渡して、最後にユエに焦点を絞ると、観念したように言った。

「スマン、哥々、順を追って説明する……」

奇妙な一行で山道を進みながら、私はまだ懐疑的に少年特有の華奢な後ろ姿を眺めていた。

アーモンド型の群青色の瞳。それは、確かに変わってなかった。

しかし、だからと言って、この子が、あの暴れん坊の飛龍だった？

「この少年が昔は馬だったって、どう信じるっていうんだ」

隣のキサさんの呟きに、前を行く飛龍少年が振り返って、訂正した。

「俺は西海龍王家の一子で、馬の姿にされていただけだ」

それを聞いたマツキーが、「へえ」と言った。

「じゃあ、馬にされてしまうのは家系なのかな？ 西海龍王家の三男は、玄奘三

蔵と共に天竺へお供したんじゃないかな？」（※玉龍の話）

「俺は母の違う兄弟のことは知らん」

「じゃあ、その風火輪はどういう経緯で君が使ってるの？ それは哪咤太子の寶貝（※仙界で開発されている便利グッズ）でしょ？」

わけ知りのマッキーがそんなことを聞く。

飛龍少年は完全に立ち止まって、無表情ながらも感心するように言った。

「お前は物知りだな。太子は俺の目標だ。だから同じ寶貝一式を作ってもらったのだ」

「でも、哪咤太子は確か東海龍王敖光を倒したのでは？ 君には同族を倒された恨みはないの？」

「本当によく知ってるな。俺は敖光は嫌いだ。それで納得したか？」

「それじゃ、緑麗って言うのは？」

飛龍少年が会話を続けることに同意してくれたようなので、マッキーは質問を続けた。

「そこに居る」

と、私を指す。

「馨君が、君の大好きな緑麗さんって人に似てるってこと？」

「似てるんじゃない。本人だ」

「人違いじゃないのか。そもそも、なぜ、天界の龍族が崑崙の近辺に居る。ここはいわば仙界だろう」

キサさんが口を挟んだ。

「うるさいぞ、玄武。お前こそ、地上に転生した身だろう」

そう言われて、妙な顔をするキサさん。

そのとき、それまで黙っていたユエが、私達の会話をさえぎった。

「飛龍、お迎えだぞ」

前方の木々が茂る暗闇の中に、ボウツと光が灯ってる。

それを見て、飛龍はチツと舌打ちした。

光の中に現れた人影らしきものが、徐々に形を作って、恐ろしくレトロな服を着た女性になった。

小さい頃絵本で見たような、ヒラヒラした薄い絹の漢服だ。髪は黒々としていて、軽く結うように後ろでまとめている。

「敖開様、すぐにお戻りを」

その女性が、誰にともなく一礼して言った。

「その名で呼ぶなど言ってるだろう。……緑麗、また来るぞ！」

飛龍少年はそう言うと、特に洩るでもなく、背を向けた。

女性は、それから、明らかにユエに向かって言った。

「お話が済み次第、吉羅公主様のもとへお戻り下さい。いくら九天玄女様でも、これ以上、西王母様の目を逸らすのは限界でしょう」

「ああ、分かってる。娘々には、いつか借りは返します」

しばらく、その光景を、眉間に皺を寄せたまま見ていたが、考えても分かるはずがない。

「私にや、もー、何が何だか……」

そう呟く頃には、飛龍少年も、女性も、木々の中に消えた。

振り返ったユエが、困ったように微笑んでいる。

「あの子は、ホントにあの飛龍なの……？」

「ああ、俺のこともちゃんと覚えてた。それでなくとも、あの気性は飛龍に違い

ないけどな」

「じゃあ、緑麗って誰？」

「あゝ、それはな、哥々の前世のおヒトだ」

「は……？」

「こればかりは信じられないだろう。俺だって、全部信じてるわけじゃない。しかし、飛龍は信じてるみたいだな」

「どうということ……？」

「飛龍はな、実は、村で哥々と出会う前に、緑麗さんという人と過去に出会ってるそうだ。あの気性の荒い野生馬だった飛龍が、哥々にだけはすぐに懐いただろう？ あれは、子供心に不思議だったけど、つまりそういうことらしい」

「輪廻転生……、ってことか？」

キサさんが、代わりに言った。

「ああ、そうだ」

「マジ……？ いや、それ聞いても、私はこの冗談話のどこにツツコミいれようか、未だに考えてるんだけど」

「まあ、そうだろうな」

と、冷静に言うユエ。やはり冗談じゃないのか。困ったな。

「どういう人なの？ その緑麗って人」

「これ言ったら、もっと信じないだろうけど……。緑麗は人じゃない。天界に住んでいた神様だ」

「カ、カミサマあ……？」

「ざっと三千年も昔の話だ」

まともな反応ができないうちに、目的地に到着した。

「着いたぞ。ここが『杏源郷』だ」

「コテコテの観光地？」

マツキーは、数時間前に自分が言った言葉を繰り返した。

街の入り口に佇むこと、ゆうに五分。

その入り口らしき門には、『杏源郷へようこそ！』の横幕があり、花輪なんか
ついちゃってる。

「……」

「……」

「……」

メイン通りは、嫌になるくらい賑やかだった。

屋台が並び、ブランドショップの隣にはなぜか八百屋があり、ゲーセンらしき
ものまで見える。パソコンの安売りをしている店の隣には、ハンバーガー屋、向
かいにはパチンコ屋だ。

道行く人達は、上海の通りを歩く人達とまるで変わらない。秘境の村、というにはあまりに拓けている。いや、拓け過ぎていた。

「なんか、時代とか国籍が無茶苦茶なんですけど……」
そんな感想を呟く。

一人、冷静というか、気難しい顔をしたユエはさくさくと道案内をして、呆けている私達を一軒の宿屋らしきところに連れていった。

ここにも庶民的なノボリがはためいていたので、嫌な予感はしたが、外観は洋風なのに、ロビーの内装は思いつきし中華風で、どこかのテーマパークの仕掛け人が勘違いして作った街並みにでも入り込んだ錯覚を覚える。

『歓迎！ 緑麗様ご一行様』

ロビー―真正面の派手な横断幕には、デカデカとそう書かれてあった。

「もしかして、僕達はなんか間違った所に来てしまったんじゃないや……」
キサさんがボソツと言う。

「もう帰ろっか？」

「いやあ、なかなか情緒があっついいいんじゃない？ 温泉あるかなあ」

爽やか笑顔のマツキーは放っておこう。

そのとき、背後から厳肅な声が掛かった。

「緑麗様、お待ちしておりました——」

うんざりした顔のまま振り向くと、そこには、三人の男が居た。

驚いたことに、彼らは叩頭の礼を取っている。よく中国の時代モノの映画で見
る姿勢だ。

「長旅お疲れでしょうが、今宵、歓迎の祝宴を開きますので、是非足をお運び下
さい」

中央の年長者らしき男が言った。

「……。もし私に話し掛けているのだとすれば、人違いだ」

「いえ。人違いではありません」

「しかし、私は『緑麗』じゃない」

「では今のお名前は？」

「沙龍——」

敢えてその名前を使った。

甲斐馨でもいいが、それだって別に日本での名前というだけで、正式名というわけでもない。私にはそもそも、本名がない。

「分かりました。沙龍様。後ほど迎えの者を遣します。それまではごゆるりとお過ごし下さい」

三人の男達が辞すのを待たずに、ユエに言った。

「ちよつと来てくれ」

案内されたのは、恐らく一番良い部屋なのだろう。一流ホテルのスイートルーム並だった。

そこで、やっとわけ知りの弟と二人きりになって、本題を切り出した。

「半年だ」

「……？」

「保って半年だろうと言われた。私もそれぐらいだと思う。何の話をしてるか、分かるか？」

「ああ、哥々の寿命だろう」

ユエは、顔を伏せたまま答える。

「黄龍の力が使えなくなったのは、去年くらいからだ。今じゃ、ほとんどコイツに頼ってる」

最近では常に手にしている秀光を、目の前に掲げた。

「静かに余生を送るといふ選択肢もあるかもしれない。けど、私は最後まで足掻くことにした。だから、日本で調べることは調べ尽くした。甲斐の家のこと、父のこと、全て。でも、何も分からなかった。分かったのは、黄龍の保持者達がみな短命だと言うことぐらい。だから、ここに来た。何か手がかりがあるだろうと思ってる」

淡々とそんな説明をして、いよいよユエが『気難しい顔』から『泣きそうな顔』になっていくのを、眺めていた。

泣くぞ、絶対、泣くぞ、こいつは。

「ユエ。香港に訪ねて来たという、風林の知り合いって、誰？ その人に何を吹き込まれた？」

「そう。それが始まりだった。俺はそれまで何も知らなかったからな……」

「……」

「さつき挨拶に来ていた一人だ。ああ見えても、崑崙の道士で、名前は張桂。

『杏林会』の実質的リーダーだ」

「杏林会……？」

それは、とあるレジスタンス・グループの名称だと、ユエは言った。

風林も張桂も、共にその杏林会を創りあげたメンバーだったらしい。

やはり、碧姐々の言った通りだ。

「なんで爺々があの村に居たのか、それは勿論黄龍を護るためであり、監視するためだった。爺々達は、長年、探していたそうだ。単なる保持者ではない、『真の保持者』ってやつを」

「保持者に違いがあるのか？」

しかし、ユエはその質問には答えず、別のことを言った。

「哥々、仙界と天界の関係を知ってるか？」

「知ってるも何も、そういう世界が本当にあることを、私はいま知ったよ」

「天界は天帝様が治める、一番上の世界。そして、その下に西王母様が治める仙界、つまり崑崙がある。さらにその下が人間の居る人界だ。昔から、地上はほとんど放置されてるが、天界と仙界は微妙なバランスを保ったまま、その関係はずっと変わらず続いている。つまり、仙界は天界から生かさず殺されずの状態で一方的に統治されてるんだ」

「仙人って、本来、自由なもんじゃないのか」

「表向きはな。だから、一般の仙道達にとってはあまり関係ないことだし、大勢に影響もない」

「フーン……」

「しかし、上の方じゃ天界の統治の仕方に不満を持つ者達がたくさん居る。その代表格が杏林会だ」

だが、所詮はアナキーである。彼らは、強力な指導者と、絶対的な力を欲した。

それが『真なる黄龍の保持者』である、と。

「杏林会のメンバー達は、長い間、『とある人』の生まれ変わりを待っていた。

それが、哥々なんだ」

「つまり、その『とある人』ってのが、飛龍の言っていた『緑麗』か」

「そう。緑麗は、一番最初に神獣黄龍の力を取り込んだ人、いや神だという。天界では最強の将神と言われ、三千年前に、クーデターを起こして、処刑された。その神様の魂が地上を彷徨い、人間に転生するようになった……というのが、俺の知ってる全ての話だ」

胡散臭い話だな。

それが本当だとしても、今の私には冗談にしか聞こえない。

「分かっただろ？　ここ杏源郷に居るのは、ほとんどが杏林会のメンバーだ。奴等は、緑麗を自分達の象徴にして、あわよくば天界に殴り込みに行こうとしている。その昔、緑麗がクーデターを起こしたときも、杏林会と共闘したことがあるらしい」

「それで、私がここに来るのを止めようとしたのか……」

「俺は、爺々の代わりをしると、張桂に頼まれた。奴等は俺に哥々を説得して欲しいんだらう。自分達に協力するように。だから、いまのところ、形だけは引き

受けてる」

「ユエの立場は分かった。でも、一つ分からないことがある」

「なんだ？」

「ユエは、なぜ、ここに来たの？」

「そりゃ、黄龍の秘密を知るためだ。杏林会に誘われたのは、きっかけに過ぎない」

「違う。そういうことを聞いてるんじゃない」

「……。分かってる。だけど、哥々のためだって言ったら……。怒るんだろ？」

沙龍と偃月が話す部屋の隣では、木佐と松木が壁に張り付いて、二人の会話を聞いていた。

「ご丁寧に、コップまで使っている。」

「……（ここって怒るポイント？ 彼は純粋に馨君のために行動したんでしょう？）」

「……（そこが、馨の天邪鬼なところなんですよ）」

二人がコソコソ話している背後では、もう一人がため息をついていた。

「自分のために生きろと言ってる。もう一族の呪縛から解放されてもいい頃だよ」

「……」

あー、この顔は、そろそろ本気で泣くぞ。

「頼りにしてるし、感謝もしてる。だけど、ユエ」

「余計なのか？ 俺が哥々のために思ってることは全部余計なのか？」

「そうは言っていない。私のために無茶をするなど言ってるんだ」

「俺には手伝わせてもくれないのか？ なんでだ？ じゃあ、哥々が連れてきたマツキさんとコジローさんは？ あの二人は、いいのか？」

「キサさんは私と同じ宿命を負っている。マツキーは単なる物見遊山だ」

「……（馨君、ヒドイ）」

「……（まあ、ああ言っても、結構頼りにしてるんですよ）」

木佐と松木の背後で、溜息をついていた碧媛が、そろそろ実力行使に出そう
だ。

「お主ら、いい加減にせいよ……」

「ユエ、お前まで、私が万能だと思ふなよ？ お前まで巻き込むわけには行かな

いんだよ」

「……」

あー、やっぱり泣くのか。

変わってねーな、こいつ。

しかも、泣き方まであの頃と全く同じって、どういう純粹さだよ。

「なんでだ？ 哥々に生きてて欲しいって思っちゃいけないのか？ 俺だって、

力になりたいのに……。哥々はいつまでたつても俺を信用してくれない……」

「信用してないわけじゃないんだろうがな……」

碧媛は壁にコップをつけて聞いているわけではないのだが、沙龍と偃月の会話が聞こえているようだった。

「碧媛さん、貴女は一体どこに消えて、なぜいま戻ってきたんです？」

木佐がそう聞いても、碧媛はまともに答えてはくれなかった。

隣の部屋で、派手にドアが開き、駄々っ子のような偃月の捨て台詞が聞こえたので、追いかけて宥めるつもりのようなようだ。

「いや、またすぐ消える。私は仙籍持ちなのでな。残念ながら、いま表立って沙龍に協力はできんだ」

そう言うと、碧媛は、木佐に札のようなものを数枚渡した。

「なんです……？」

「沙龍は力技しか知らんからな。一応、それを渡しておいてくれ」

そして、廊下に出て行った。

木佐は追うつもりはなかったが、部屋で寛ぐことにしたらしい松木ゴローと一緒に居ても、口説かれるのは分かっていたので、逃げることにした。

別に口説かれるのが嫌なわけではないが、今はラブアフェアをやっつけられる余裕はない。

「すみません、松木さん、ちよつと街中を見てきます」

「はい」

分かってるんだか、分かってないんだか、松木はにこやかに返事をする。

しかし、木佐は、沙龍がこの曲者をこの旅路に同道させた理由をなんとなく察していた。

彼には彼なりの役割があるのだ。

そして、恐らく、自分にも。

それは、木佐が表通りで見つけた人物にも、少しは関わりがあることだろう。

「董天さん、なぜ貴方がここに……？」

驚く木佐を他所に、董天は冷たい笑顔で迎えた。

「おや。見つかってしまいましたか。まあ、貴方なら仕方ありませんね」
木佐は、日本で一度だけこの男に会ったことがある。

董天が『遊興中のボス』の様子を見に来たとき、沙龍から「あまり仲の良くない昔の知り合い」と紹介されたのだ。

「私は、先日、沙龍様から解雇されましたね。今は求職中の旅行客です」
などと、白々しいことを言う。

勿論、二人ともそれが嘘であるのは分かっている。

解雇されたのは事実かもしれないが、木佐の不審な表情に答えるように、董天は腕に抱えた酒瓶を見せた。

「一度味わって以来、病み付きになりましたね。このお酒を買いに来たんです」
「そうですか……」

何も教える気はないのだ、と分かったが、木佐は食い下がった。

「では、せめて、貴方がなぜ青龍の力を持っているのか、教えて頂けませんか？」

東方青龍。

最初に会ったときから、木佐はそれに気付いていた。

「四神の力は時として惹き合い、反発する。一部の力しか持たない私でもそれは例外ではないのですね」

「……？」

「知りたいですか？　なら、天界へお行きなさい。全ての答えはそこにあります」

「天界へ？　貴方は一体——」

しかし、董天はそれ以上は何も言わず、人混みに消えた。

夜も更けた。

長い一日だったような気がする。

飛龍のこと、ユエの話、杏林会の思惑――。

何もかもが一気に降りかかってきたようだ。

軋む身体に秀光を携えて、外に出た。

眠った方がいいのかもしれないが、頭が飽和していて、とても眠れそうになかった。

張桂の主催した宴は、厳かに開かれ、短時間で終わった。彼らの要求は簡単だ。

『力を貸して欲しい』

そして、私の答えも簡単だった。

『お断りだ。私は個人的には天界とやらの恨みはないし、貴方達に協力する義理

もない』

目の前に並べ立てられた豪華な食事にも、ちつとも魅力を感じなかった。

正直言つて、最近、食欲もない。もう、本当にそろそろやばいかもしれない。

なぜ？ という疑問はたくさんある。

杏林会のメンバー達は、私がここに来ることを知っていたようだった。

私の性格と、この蝕まれた身体の事情を知らない限り、予測することはできないだろうに。

それに、輪廻転生を肯定するとすれば、三千年の間、他の生まれ変わりだつて居たはずのなに、なぜ今、なぜ私、なのかわからない。

ユエの話では、杏林会が欲しているのは『黄龍の保持者』プラス『緑麗の転生』であるという。

もしかして、三千年の間、その両者が合致した例がなかっただけかもしれないが、いずれにしても、不可解な話だ。

そもそも、私には緑麗と黄龍の関係が分からない。

地上に落とされた将神と、天界の神獣だった黄龍が、タッグを組んだってこと

なのか。

あれ？　しかし、黄龍は崑崙にあるという龍脈のはじまりを発祥とするんじゃないか？　なかつたつけ……？

いや、甲斐馨には関係のない話だ。きつと。

そろそろ、部屋に戻ろうと思った頃に、足元に自分の影ができていた。

「……？」

月は出ていなかったはずだが、と思ったそのとき、目が眩んだ。

「な、なに……？」

まるで、満月の輝きがそのまま目の前に降りて来たかのように、視界を奪われ、一瞬、真っ白になった。

「――」

私を呼ぶ声が、光の中心から聞こえた。

ハッキリとは聞こえなかったが、そうだと分かった。

その声の響きはまるで闇そのもので、何もかもを呪縛するような甘美な囁きにも似ていた。

「――」

もう一度、聞こえた。これは幻聴じゃない。

目の前の白い光は、やがて、ヒトの形をした影になり、その影が、実体を現した。

男――に見えなくもない。人間で言えば二十代後半くらいの容貌で、漆黒の髪が美しかった。

端正な、と言うよりは、いっそ整いすぎたその顔立ちは、一度見れば忘れられないだろう。

「久しぶりだな、緑麗」

姿に相応しく、その声は低過ぎず高過ぎず、静かな力があつた。

闇そのものを映したような双黒の瞳が、間違いない、私を見ている。

（この人は……誰？）

思わず後ずさった。

「記憶がないんだろう。だが、お前の魂は俺を覚えているはずだ」
なぜ自分がこんなに動揺しているのか、分からない。

それが一層、私を不安にした。

「貴方は……誰？」

絞り出すような声で、やつと、それだけ言えた。

「俺の名は九雷——。忘れたのか？ 薄情な恋人だ」

「……」

初めて聞く名前だった。しかし、名前を聞いても、私の疑問は変わらない。

（この人は……誰？）

男の声は聞こえているが、言葉としては届いてない。

否、私が、その言葉を理解しようとしていない。

（私、何してるんだ……？）

頭の片隅で、そんなことを考えていた。

いつの間にか座り込んでいて、こんなもの、初めて逢った不審人物に対する態度じゃない。これは、完全に、負けのポーズだ。

いや、勝ち負けの問題ではないのかもしれない。相手は丸腰だし、そもそも、殺気はないのだから。

そう、殺気はない。だが、人を圧倒する力は申し分なくある。

これは、魔性の力だ——、と思った。

(この人は……誰?)

もう一度、同じ疑問を心に繰り返した。

「だが、俺はお前を待っていた」

「私は……、緑麗じゃない」

自分の声が震えるのが分かった。

でも、逃げるに逃げれない。身体が動かないのだ。

「お前が黄龍と共にここに帰って来たのが、緑麗である証拠だ」

さつきからこの人は何を言っているのだろう。

私にはちっとも理解できないし、この人も言葉で理解させようとは思っていないらしい。

「……」

秀光は——、手元にある。

しかし、それを確認したとき、目の前の男はフツと笑ったようだった。

「無駄だ。いまのお前では、虫一匹殺せまい」

「……」

こういうとき、私はいつもどうしてたんだっけ。

上海モード全開なら、こんな怪しい不審人物、有無を言わず瞬殺だ。

だって、この人こそ、一瞬で私を殺せる——。

咽が詰まりそうになって、必死に何かを飲み込んだ。

いまは、吐血してる場合じゃないし、何も入ってない胃が騒ごうが、胃液はそ

こにおさまってる！

「お前を救えるのは俺だけだ。俺と共に来い」

危険だ、と分かってる。

なのに、この男から目を離すことができなかった。

もう何も考えられず、男が差し伸べた手を、思わず取ろうとした——、そのと

き。

「……馨ッ二」

その声に、我に返った。

「き、キサさん……」

「無事かッ!？」

キサさんが既に太刀を手にして、私の目の前に立つ。

やった！ かつこいいぞ！

普段はゼニゲバ雇用主でも、こういうときは誰よりも頼もしいんだよね！

「やはり、お前が一緒か、真武君……」

「誰だ!？」

「緑麗のそばから離れられないと見える。だが安心しろ。今日は挨拶しに来ただけだ。いずれ、緑麗の方から俺の所に来る」

「……ッ!？」

「それしか、いまの緑麗を救う道はないぞ、黒帝玄武佑君——」
そう言って、男は、スウツと闇間に消えた。

同時に、私も力が抜けたように、沈み込んだ。

「大丈夫かッ？」

「だ、だい……じょうぶ……。ちよつと気が抜けた……だけ」
しかし、私はそのまま気を失ってしまったのだ。

翌朝、異変を聞きつけて飛んできた張桂が、ブランチの席で色々教えてくれた。

といっても私は相変わらず食欲がなかったので、食べる振りをしてカフェオレを飲んでいただけだ。

「天界軍総司令、九雷元帥……？ その男が馨に何の用だったんだ」
キサさんが不機嫌面でそんなことを言っていた。

昨夜、敵があっけなく引き下がったことや、あの不可解な呼びかけに対して消化不良のようなものを感じているらしい。

「噂では、緑麗様が将神でいらっしやったとき、懇意にされていたとか。ですが、あの男は敵です。緑麗様の叛乱の際には裏切って、天帝側についた男です」

「三千年前に？」

と、今度はマッキーが揶揄気味に聞く。見てきたように言うなよ、と言いたげ

だ。

それを張桂はやんわりと肯定しながら、答えた。

「はい。そうです。私は当時、杏林会の幹部として、緑麗様と共に闘った身ですから」

「……」

絶句したマツキーに代わって、今度はキサさんが口を開いた。

「どうも、不確定要素が多すぎるな……。そもそも、どうして、みな、馨がその緑麗さんの生まれ変わりだと信じてるんだ？ 姿が生き写しなのか？」

「いいえ。お姿はかなり違います、我々には『分かる』のです」

「分かるって、どういう……」

「言葉通りの意味です。仙道には第三の眼がございますから」

「心の眼ってことか。馨君は納得してないみたいだけど？」

急に、三人の視線がこちらを向いたので、適当に流した。

ああ、もう、ホントは口を開くのも億劫なんだ。ちよつとそつとしておいてくれ。

「張桂さん、いずれにしても、馨がこんな状態なら、貴方がたに協力はできないでしょう」

キサさんが事務的に言った。

「沙龍様のお体のことは分かっています。黄龍の力を宿すには、人間の身体はあまりにも脆弱。しかし、我々には希望があります」

「希望？」

「天界には、沙龍様を救う手立てがあります」

「なんだって？ それは、どういうことだ？」

「詳しくは申せません。我々も沙龍様の協力を必要としている立場です。我々の要請をご了承頂けないなら、無条件でお教えするわけには参りません」

「交換条件か。なんか、商談やってるみたいだな」

と、キサさんが苦笑する。

「ところで、偃月君はどうしてるの？」

マッキーが聞いてきた。

「ああ、ユエなら、崑崙の仙人様の所に世話になってるそうだ。多分、女だね」

「偃月君、タラシには見えなかったけどな」

「天然なんだよ。ところで、張桂」

口を開いたついでに、一気に言ってしまったおもうと思った。

「昨日は天界云々なんて話は聞かなかったぞ。お前、結構、策士だな」

「仙道も人ですよ、沙龍様」

「九雷と名乗ったあの男も、確かに同じようなことを言っていた。天界に行けば何かあるんだろう？ だったら、確かめるためにも、私は行く。お前らの力は借りん」

「待てよ、馨。その身体で崑崙に昇って、さらに天界に行くなんて、無理だろう。なに考えてんだ」

「キサさん、言ったはずだよ。途中で力尽きても、恨みっこなしだって」

もう何もかもが面倒臭くなったので、険悪なムードを残して、一人で部屋を出て行った。

追いかけてきたのは、キサさんではなくマツキーだった。

全く、あんたも結構フェミニストだね。

表通りを歩いて、どこかでコーヒーを飲みなおそうと思っていたところだったので、付き合ってもらおうことにした。

「馨君、昨夜何があったの？」

洒落たカフェのウッドデスクに落ち着いて、マツキーが改めて聞いてきた。

「別に、言った以上のことは何もないよ」

「そう……。ならいいんだけど」

マツキーは鋭い。

いまはキサさんよりも冷静な分、私の微妙な心情に気付いたのかもしれない。

「馨君が引っ掛かってるのはさ、もしかして……」

「なに……？」

「いや、僕なりに単純に考えるとき、普通、訣別した恋人に男は会いに来ないんだよね」

「……？」

「『彼』は天界軍を動かせる地位に居る人なんですよ。それを考えれば、普通、何かやるにしても部下にやらせるもんじゃない？」

「……」

「緑麗さんの恋人で、でも裏切った人。その男が、何をしに微妙な力関係にある仙界くんだりまで来るんだ？」

「何が言いたい……？」

「いや、昔の恋人に会いに来るというのは、未練があるときだけじゃないかって思うんだけど」

「……だとしても、それは私じゃなくて、前世の方だろう。余計な痴情ネタまで持ち込まないでくれ」

「大概の事件ってのは、その痴情ネタこそが、一番の理由であり、モトになってたりするんだけどねー」

「……」

「さつき、張桂さんも言ってたじゃない。仙道も人ですって。神様も、結構変わらないんじゃないの？ そこらへん」

「知るか。それよりもマツキー、あのじーさんを攻略するならば、早いところして。さっき言ってた秘密を聞きだせるならそれに越したことはないが、杏林会と天界軍部の内情とかでもいい。私は明日にでもここを出たい」

「分かったよ。ちゃんと準備はしてるって」

一方、その頃、沙龍と松木ゴローの会話を聞いている人物が居た。

といっても、聞いている本人はその場には居ない。杏源郷からは数キロ離れた場所である。

偃月が眺めているそのモニターは俯瞰になっている。映像も音声も、かなり明瞭だった。

高感度のビデオカメラなどで撮っているのだとしても、それは不可能だろう。なぜなら、この角度ではカメラは宙に浮いていなければならぬからだ。仙界の特殊な宝貝でもってして初めてこういった裏技ができるのだ。

「助けに行かなくていいの？」

モニターを凝視していた偃月の首に巻きつく白い腕があった。

「……脅かさないでくれ。寿命が縮む」

「崑崙の迎撃システムは作動してるし、天界軍だってチョツカイ出してくるわよ？ 多分」

この女性は吉羅公主という。西王母の末娘で、この庵の主でもある。

年の頃は、まだ十六、七といった所だが、実際は何百年という年月を生きている仙女であった。

「俺の助けは要らないだろう。この前だって、追い返すつもりが、追い返された」

「意地っ張りねえ」

吉羅公主は、クスクスと笑った。

「なあ、公主。哥々が崑崙に昇ったら、仙界だって天界軍に睨まれることになるだろう？ なのに、なんで西王母様は本気で止めようとしなんだ？」

杏林会は、あくまでも一部の仙道達で組織されている鷹派であって、崑崙の全体意思ではない。

そう理解していた偃月だが、崑崙の動静を見守っていると、どうもそう言い切れないところもある。

仙界を統治している西王母は沈黙を守って、まるで杏林会の行動を黙認しているようだ。

「そんなの簡単よ。崑崙の仙道達はみな、密かに天界の統治から逃れたいと思ってる。ただ、それを実行できる人がいないから沈黙してるだけ。平和主義といえど聞こえがいいけど、日和見の他力本願といえなくもないわね」

「フーン……」

「お母様だって、本当のところは緑麗様にこの現状を何とかして欲しいって思ってるんじゃない？」

「しかし、いまの哥々に天帝様は倒せんと思う。最強と言われた将神だって無理だったのを、黄龍の力の使えない生身の人間だったら、尚更じゃないか」

「少なくとも、そのハンデは解決できるって思ってるのじゃなくて？ お母様や、杏林会は」

「その秘策ってのはなんなんだ？」

「フフ。偃月はそれが知りたいのね？ でも、残念ながら私じや無理よ。その秘密が知りたければもつとキナ臭い人に近付かないと」

吉羅公主は純粹な親切心で言っている。

が、偃月は責められているようにも感じた。

「公主、俺は——」

確かに、公主と親密になる段階で、そういった下心がなかったわけではないのだ。

「フフ。そんな顔しないで。分かってる」

同じ頃、崑崙のとある場所では、鎖に繋がれた飛龍が暴れていた。

洞窟のような地下牢にも見える。

「このッ、離しやがれッ」

ジャラジャラと派手な音がするが、飛龍の馬鹿力でも引きちぎれない強度の鎖を使っている。

「結界を荒らしまくった罰だ。三日ほどそうしている」

スラリとした長身の美女が、厳しい表情で言い放った。九天玄女という、崑崙では古参の仙姑である。

長い黒髪は高い位置でキリツとポニーテールにされている。明らかに戦闘用と
いった髪型だ。

「お前は俺に命令できる立場じゃないだろう」

飛龍がギリツと睨んで言った。

それに怯む九玄ではない。

「これは命令ではない。教育もしくは躾という。そして私がお前の保護者である
以上、私にはお前を教育する義務がある」

九玄が見下すようにふんぞり返って言うも、飛龍は服の下で着々と脱走準備を
している。

ドッカーン！

「……っ!？」

どこに隠し持っていたのか、武器は全部取り上げたつもりだったが、飛龍は簡

単に鎖と檻を吹っ飛ばしてしまった。

「待て！ 飛龍！」

制止の言葉も虚しく、飛龍は龍形態に変化すると、飛んで行ってしまった。

「西海龍王殿宛てに、請求書、切っておけ」

九天玄女は、傍らの女性に言った。昨日、飛龍を迎えに来た侍女である。

「はい。しかし、よろしいのですか？ 敖開様の振る舞いによっては、九天

玄女様のお立場というものも……」

「放っておけ。緑麗が崑崙に昇るには、あの子の助けも必要だ」

「分かりました」

「全く、西王母様も何をお考えなのか……」

九天玄女の心情は複雑である。

所変わって、こちらは崑崙からはやや東に位置する、通称、天界と呼ばれるエリアである。

水雲宮と呼ばれる宮殿の最上階に、九雷の姿があつた。

高い塔である。

ここは彼の別荘の一つではあるが、かつては違つた。将神緑麗の宮殿だつたといふことは、年月が経ちすぎて覚えてゐる者はあまり居ない。

見渡す視界は、雲一つない青空だつた。

九雷は、近づく気配に、物思いを断ち切る。

「……陽輝か」

くわえタバコの男が、九雷の立つテラスに近付いて来た。

軍服も着ていないし、容貌からしてとてもそうは見えないのだが、これでも一軍の将である。

「やはりここか。探したぜ」

「……」

「抜け駆けしたな？ お前。だから、こんな処に居る。違うか？」

九雷はフツと笑つた。

確かに、ここは思い出の場所だ。そして、それを知っているのは、いまやこの

男だけである。

「感慨にも浸るさ。なにせ三千年ぶりだ」

「まあな……」

濡れたような漆黒の髪の毛の九雷の隣に、明るいオレンジ色の髪の毛の陽輝が並んだ。

「迷ってんのか？」

陽輝がためらいがちに聞く。

「いや……。緑麗の意図が見えない」

「……？」

「記憶があるうとなかろうと、あいつの魂が目的を果たすためにここに来るのは分かっていた。が、問題はその方法だ。甲斐馨はこのまま生きようとしている。

だが、緑麗が何を考えているのか分からない」

「なるほど。それは本人に聞いてみるしかないが……。どうやる？」

「少々揺さぶってみてくれ。闘いの中で覚醒するかもしれん」

簡単にそう言った九雷に対し、陽輝は顔をしかめた。

「気が進まねえなあ……」

「心配するな。いまの緑麗は人間の身体だ。かつての力はない」

「そうじゃねえよ。いくら記憶がないってたって、かつての戦友に刃を向けられるほど、俺は非情にできてねえのよ」

「お優しい神様だな、お前は」

「本来、神つてのは、そういうモンだぜ。ま、形だけでも行ってくらあ。天ちやんにバレない程度にな」

「ああ、頼む……。そういえば、もう一人、懐かしい人物に会ったぞ」

「もう一人？」

「黒帝玄武佑君……。真武君さ。ま、当然といえば当然だがな」

「ああ、黄龍追っかけて転生を望んだ奇特な御仁か」

「緑麗同様、かつての記憶はないが、油断するなよ」

「分かってる。奴は怒らせると恐いからな」

10 陽輝大将

キサさんは難しい顔のまま、山道を歩いていた。

杏源郷で董天に会ったという話は聞いたけど、なんかそれ以来、おかしい。さらに、

『黒帝玄武佑君——』

キサさんをそう呼んだ、あの九雷元帥の謎の言葉もある。

天界に行けば、全ての謎が解けるといえるのだろうか。

「木佐君、あんまり悩んでるとハゲるよ？」

見かねたマツキーが声をかけたが、キサさんの反応は鈍かった。

「あ……？ ああ、すいません、何か言いました？」

「……いや、いいんだけど」

こここのところ、パーティーが出たり入ったりで忙しいが、基本はこの三人、いや、二人だ。マツキーはカウントしない。

彼の戦闘能力は高いとは思いますが、私はマッキーを戦力として引き入れたわけではなく、参謀という役割でお願いしたのだ。

だから、そのマッキーが、一番気になる人として九雷元帥の名前を挙げたのは、考慮すべきことだった。

多分、マッキーのその勘は正しい。

私にも、彼の印象は強烈に残っている。

(あの男は……何者?)

闇夜に浮かんだ、神々しいというよりもいつそ禍々しいあの男の瞳が忘れられない。

目を逸らしたいのに逸らせない。まるで射すくめられたように、身体が硬直した。

とても太刀打ちできない、格が違う——、と全身が訴えていた。

あれが『神』というものなのだろうか。

(私は……あの人が怖い)

生まれて初めて、そう思った。

これが、怖いという感覚なのか、と。

『蒼龍会』のどんな屈強な暗殺者も、私は怖いとは思わなかった。

私には黄龍という切り札があつたにしても、気持ちの上では誰にも負ける気はしなかった。

なのに——、あんな一見優男が怖いなんて、『蒼血』と呼ばれていた私がお笑いだ。

黄龍の力が使えなくなつて、自分は弱気になっているのだと思おう。

「……ふう」

一旦、足を止めて、標高を確認した。

「かなり薄いな」

この計器が狂つてなければ、ここはいま、富士山の頂上くらいだ。

「馨は、輪廻つて信じるのか？」

キサさんがおもむろに聞いてきた。

「どうだろ。信じてない、とも、信じてる、とも言えないな……」

「だよな。いきなりそんな話をされても、納得できるはずがない」

「人間はさ、例え生まれ変わっても前世を覚えてないわけじゃん？ 多分、それは、その必要がないからなんだよ」

「まあ、そうかもしれないな」

「……うん」

つまり、私はその必要がないのに、前世云々の話を目の前に突きつけられるという災難に見舞われた、憐れな少女ということになる。

面白くないと言えば、大いに面白くなかった。

飛龍も、杏源郷の仙道達も、九雷元帥も、当然のように自分を『緑麗』と呼ぶ。

彼らにとって、甲斐馨などどこにも居ないわけ——。

(なんか……、腹立つよな、それって……)

「ちよつと休憩する？」

マツキーの提案にはボンヤリと頷いた。

「向こうに水の匂いがする。汲んでくるよ」

キサさんはそう言っ、さっさと行ってしまった。私よりはてきぱきしてる

な。

丁度いい。私もこのスッキリしない頭を整理しよう。そう思って、キサさんが向かった方向とは逆に歩を進めた。

「……馨君？」

「悪い。ちよつと一人で考えごとしたい」

「気をつけてね。あんまり離れないように……」

マツキーの言葉は半分ほどしか聞いてなかった。

進んだ先は、切り立った崖になっていた。

一陣の風が髪を撫でつける。伸ばしっぱなしの髪が、目の前にうねった。

このクリーム色の髪も、鬼子とか言われる要因の一つだったな。勿論、そう言って私を苛めてきた奴はコテンパに叩きのめしたが。

両親の髪は黒々としていたらしいのに、なんの突然変異か、純日本人の私がこんな髪の色をしている。

(いま、何月だっけー)

あまりにも風が冷たかったので、そんな呑気なことを考えていた。

確か、日本を出てきたときは秋だったような気がするけど。

身を切るようなこの風の冷たさは、標高のせいだ。

普通の人間ならダウンジャケットを着込んで寒がる気温だったけど、私にとっては丁度良いくらいの冷たさだった。

昔から、自分は寒さという寒さを感じたことがなかった。血も涙も凍っている、とよく言われたものだ。

遠景には高い山々の峰が連なっており、近景には喬木が見事な景観を作っているが、私の目に風光明媚な景色は映っていない。いま、背後に聞こえた微かな物音に全神経を集中した。

「……今日はシラフかい？」

そんな声がした。

またか、と思い、同時に愕然とした。近づく敵の気配に気付かなかったことに

「よお、随分、縮んじまったな」

「……？」

慎重に振り向くと、知らない男が立っている。どう見ても、休暇で山登りに来たサラリーマンじゃない。Gパンに革ジャンというラフな格好だ。

肩にかけているアサルトライフルが、まず目に入った。あれは、威力がありそうだ。

しかし、このならず者風中年は、完全にリラックスしていて、その銃を肩にしていることなど忘れていたかのようだ。

「九雷の肩持つわけじゃねえが、緑麗はもつと色気があったぜ」

こいつも神なのか——？

秀光を握りしめてみた。そして、自分が動けることに少なからずホツとした。

「貴方は、誰……？」

「陽輝。これでも一応天界軍の大將やってる。お前さんは？　いまの名前はなんていうんだ？」

「甲斐馨——。沙龍とも呼ばれてる。好きな方で呼んでくれ。だが、緑麗はゴメ

んだ。いい加減、うんざりしている」

「そりやそうだろう。ここいらの奴はみな、緑麗サマサマだからなあ」

その男の物言いに、握り締めていた拳の力を一旦抜いた。

九雷元帥に感じたような恐怖は、ない。

「聞くところによると、随分お強い神様だったようだけど」

「その上、叛乱起こした人気者さ。酒乱の上、ひでえ音痴だがな」

まるで旅人同士が出会って世間話でもしている雰囲気に、騙されてしまいたくなる。

「だけど、忘れちゃならねえ、男意気、じゃなくて。……えーと、あのアーマライトから目を離さないようにしないと。」

「陽輝大将、貴方は緑麗さんの何？」

「いいねえ、その他人事。そうだなあ、俺は、元上官で、元同僚で、呑み友達つていったところか」

「……は？」

「緑麗はな、俺が大将の地位を貰った頃に入軍してきたんだ。それが、あつとい

う間に大将の俺を抜いて将神になっちまった。凄かったぜえ。異例の出世を遂げたのが、これまた目の眩むような美女だったんで、天界は大騒ぎよ。あの酒乱さえなけりやなあ」

「九雷元帥の恋人だったって、ホント？」

「なんだ。知ってるのか。まあ、それも事実だ」

「フーン……」

「緑麗がキヤーキヤーうるさいのなんのって。それまで男なんか目もくれない硬派だったのが、九雷の剣さばきに惚れちまったんだと。ま、緑麗らしいがな」

「三人とも、仲良かったんだね」

「そりやまー、数多の戦場で生き死にを共にした仲だからな」

「なるほど、なんとなく分かった」

「緑麗の人となりを知ってどうすんだ？　いまのアンタには興味ねえ話だと思うが」

「私に分かったって言ったのは、貴方達の関係」

「……？」

「心を許せる仲間が居て、楽しくやってたのに、緑麗さんは、なぜ勝ち目のない叛乱なんか起こしたの？」

「ま、色々あんだよ、この話にやな」

「それは、緑麗さんが黄龍の力を最初に取り込んだことに関係がある？」

「んー？ なくはないが……。おっと、誘導尋問上手いな、アンタ。話してやりたいが、時間切れだ。こっちも仕事でね。悪く思うなよ」

「……」

場の空気が攻撃的な気配に切り替わったので、思わず身構えた。

「個人的にアンタは嫌いじゃねえんだがな、『沙龍』」

「私も、嫌いじゃないよ、陽輝大将」

言葉を裏切って、私は秀光を抜き放った。

「アンタの獲物はソレか。じゃあ、コイツでお相手するのはちよいと卑怯かな」

陽輝大将は、肩に担いでいたアーマライトを、気軽に投げ捨てた。

木佐が水筒に水を汲む傍らで、松木はしげしげと水面を眺めていた。

「ここの泉は、随分浄化されてるなあ。さすがは仙界といったところかな……。…?!?」

急にガクンと膝を折って座り込んだので、木佐が駆け寄った。

「松木さん？」

「これは——ちよつと——マズイ」

息を乱す松木の様子はただごとではない。

心臓を押さえている。なにか致命傷を食らったかのようだ。

「どうしたんですッ？」

「僕の召喚獣が、破れた——」

「え……?」

「木佐君、早く、馨君の所へ！」

しかし、松木ゴローのその判断は少し遅かったのだ。

途端に、辺りが火の海となつて、木佐は抜刀と同時にいま汲んだばかりの水を自分に浴びせるハメになった。

「天界に仇なす者よ。ここで成敗してくれる——」

軍服のような装束をまとった者達が数人、木々の間に現れた。

「神様が殺生すんの？」

松木は揶揄するように言っているが、余裕はない。

「気をつけて、松木さん！ 只者じゃない！」

(な、何!? いまの……?)

いましがた起きたことが信じられなかった。

いくら仕掛けてもかわされる秀光が、陽輝大将の放った銃弾を弾いたとき、その刃から光り輝くオーラが立ち昇り、龍の形をした炎が、敵を襲ったのである。

(火龍……!?)

通常、中国での龍は大地と水の属性しか持たない。火とは無縁の存在である。

だから、『火龍』というのはよほどの特殊な存在か、または、矛盾するという意味で不吉な符牒にしかならないのだ。

「召喚獣を仕込んでるとは、随分、洒落た真似をしてくれる……」

不敵に笑う陽輝大将は、それでもいまの一撃で少々ダメージを食らったらしく、片頬が煤けていた。

(わ、私じゃないってば……)

しかし、その召喚獣も、陽輝大将の返り討ちにあって嘘のように消滅してしまった。

「人の身体とはいえ、さすが鬨いの申し子。油断ならねえな」

ここからは、正真正銘、肉弾戦か。

そう覚悟したとき、上空から、雨のような砲弾が派手な爆音と共に降ってきた。

あれ？ これは見たことがある——、と空を見上げると、ロケットランチャーを構えた飛龍が居る。

「飛龍……!?!」

「緑麗、下がっている！ ソイツは俺が殺す！」

「……敖開かッ！」

「その名で俺を呼ぶな！」

「チツ、そういや忘れてたぜ。アイツあ、緑麗の子飼いだっただな」

たまらず後退する陽輝大将は、それでも自分に直撃しそうな砲弾を、手にしたハンドガンで撃ち抜いていた。その狙いが恐ろしく正確だ。

武器を持ち替えた飛龍が、今度は退路をも断つ勢いで火の槍を降らす。彼の居た場所は、大地が抉れて、見るも無残だ。

しかし、多分、敵はもうそこには居ないはずだ。

「おめーのお遊びに付き合ってやるほど、暇じゃねえんだよ。敖開」

私のお遊びには付き合ってくれるのにな？

「その名で俺を呼ぶなって言ってるだろう！」

飛龍は接近戦は苦手なのか、陽輝大将に近付こうとしないが、火槍を撃ち放つた方の武器を捨て、ロケットランチャー一本に絞ったらしく、何やら大層な弾丸を装填していた。

（ああ、そういうことか……）

派手に繰り広げられている戦闘シーンの前で思うことでもないが、さっきから

飛龍がなぜその言葉を叫んでいるのか分かって、微笑んでしまった。

『飛龍』は子供だった私が、あの暴れ馬に付けた名前だ。

飛ぶ龍の如し——。まさにその名の通りだったわけだけど。

その名が大切だから、別の名前で呼ばれるのを嫌がるのか。

泣かせるね、全く。

飛龍が必殺技として放ったスペシャル弾が、いままでの十倍くらいの規模で爆発し、辺りの地形は完全に小山からクレーターへと変化した。

陽輝大将は……、それでも無事なんだろうな。

「おっと、危ねえ、危ねえ」

ホラね。

といつても、今回はさすがに全身煤だらけだ。

「馨！ 無事だな！」

遅れて駆けつけたキサさんは、半分、ブラック・キサ・ハイパーモードになっていた。

やばい……。背景は紫色になりかかっているし、わけの分かんないトグロを巻い

た黒いオーラまで立ち上ってる。

これについて説明するのは恐ろしすぎるので、『この世で一番怖いもの』としておこう。

「は、はあ……、まあ色々あって、無事です」

「勘弁してくれ。暗黒大魔王までお出ましかよ……」

そう言った陽輝大将は、ハンドガンを懐にしまって、店じまいといったところか。

「今度は何者だ！ ロリコンの中年変質者か!？」

（いや、それ、私に対しても微妙に失礼なんだけど……。でも、ハイパーモードだから怖いから言わない）

「よお、真武君。変質者呼ばわりとはご挨拶だな。元麻雀仲間に対して」

「僕の名は木佐小次郎。初対面だと思うが？」

「ま、いいさ」

と、陽輝大将が肩をすくめる。

そして、上空を見て、飛龍がもう弾切れであることも確認した。

「おい、沙龍、今日は引き上げるぜ。……またな！」

「ちよつとー！ 忘れ物ー！」

放置されたままのアーマライトを引っ搦んで投げると、陽輝大将は見事に空中キヤツチした。

「謝々！」

いいんだろうか。ま、深く考えるまい。

きつと、あの人は敵じゃない。

マツキーの屍（嘘です。死んでません）を越えて私のもとへ来てくれたキサさんに感謝をし（ハイパーモードの残り火があつて怖かったけど）、瀕死のマツキーには秀光に何か細工をしたのか、と問いただした。

「ゴメン、余計だったね。どうも、馨君は物理的な力技が多いからさ、ああいうのも必要かと思つて」

「いや、助かったよ、ありがとう」

あの火龍は、やはりマツキーが事前に仕込んでいたものだったようだ。

彼の駆使する十二天将のひとつ、騰蛇（※火神で蛇の姿をしている）である。「でも、あれはもう使えないね。同じ技が通じる相手じゃないだろうし。次に襲ってきたとき、どうするかな」

「それなんだけど、あの人は敵じゃないと思う」

「そうなの？ でも……」

心配顔を向けるマツキーは、やはり私の病状にも薄々気付いてるんだろう。

「緑麗！ 敵だ！」

飛龍が叫んだ。

またかよ！ 少しは休ませてくれ！

11 戦力外通告

飛龍が指した先には、鳥のように飛翔する物体があった。

「追撃!? さっきの奴らなの？」

「違う。あれは崑崙の迎撃システムだ」

「天界の次は仙界か……、随分、人気者だね、馨君は」

腕を吊った包帯を投げ捨て、マツキーが戦闘モードの目をする。

「馨、下がっている」

「え……？」

秀光を手の前に出ようとしたときに聞こえたその言葉に、耳を疑った。

「松木さんも、飛龍君も、馨を頭数に入れないでくれ」

「うん、分かった」

「俺は先に行く！」

飛龍は風火輪を作動させて、垂直上昇した。あの飛翔集団を迎え討つつもり

だ。

一人、呆然としている私に、キサさんが苦笑気味に言った。

「そう落ち込むなよ」

「わ、私……、戦力外通告受けて、ファーム落ち？」

冗談っぽく言ってみるけど、実はものすごいショックを受けていた。

私は「下がってる（足手まといめ）」と言うことはあっても、言われたことはない。

言われる方の悲哀というものを、いままで考えたことはなかった。

悲哀？

いや、いままで私がそう言い放った相手は、大抵、ホツとしたような顔をしていた気がするんだが。「あ、なんだ。見てていいの？ ラッキー」とか「よろしくお願いします」とか？ そんな感じ。

でも、いま、私が感じたのは、そういうものじゃない。自分でも信じられないようなショックだ。

ボキヤ貧な言葉で言えば「置いていかないで」とか、「私から戦場を取ったら

何が残るんだ？」とか、そういう類のもの。

「来るぞッ！ いいな!? 下がってるよ——」

キサさんはそう言っつて、斬り込み隊長のように、走って行ってしまった。迫り来る鳥のような飛翔物体たち。

なんだ、あのファニーなロボットは。あれが崑崙の攻撃部隊なのか。

鳥——と思ったのは、機械じかけのロボット、通称『黄巾小力士』で、これが飛龍が言っていた「崑崙山に許可なく侵入する者に対して、自動的に発動される迎撃システム」の尖兵だろう。

数にして、二十は下らない。

華麗に決まるマツキーの大技や、飛龍の炸裂する金磚（※寶貝のひとつ）の軌跡を見ながら、私は自分の身の置き所がなくて、途方に暮れていたのだ。

一行の山登りは、続く。パーティーは一人増えて現在四人。

杏源郷を出てから、一体何日が経ったのか、実は一日も経っていないのか、時

間の感覚もなくなっていた。

天界軍の襲撃は最初の一回しかなかったが、その後も黄巾小力士達は何度か飛んできた。

それを時にはやり過ぎし、時には三人の戦士達が撃退し、何とか先へ進んだ。段々と道らしき道はなくなっていったが、少し開けた草地に妙な立て札を見つけて、暫し立ち尽くした。

『崑崙山そっち↓』

『↑下界あっち』

どうも、仙道達というのはこういうおふざけが好きらしい。

「この立て札、信用していいんだろうか……？ どう思う？」

隣のキサさんを見上げた。

この人は特別背が高いわけじゃないんだけど、私が特別背が低い方なので、いつもこういう図になる。

もうこれが百八十センチのマツキーになると、重力下の場所で二十四時間付き合うわけにはいかない。私は絶対むち打ちになる。

「馨……、言いたかないが、なんでそんな弱気になってんだ」

弱気にさせた張本人がそんなことを言う!?　と思ったけど、反論する元気もなかった。

「そ、そうかな……」

「僕に意見聞くことなんてあんまりないじゃないか」

そんなことはないんだけどな。

どうも、キサさんと私の間には認識のズレがあるようだ。

「馨君はさー、負けることに慣れてないんでしょ」

おめーに言われるとなんか腹立つんだよ、このクソ陰陽師。

「まあ、打たれ弱いのもチャンプの条件の一つではあるんだけどね」

悪かったな、打たれ弱くて。

「黄龍の保持者のくせに、黄龍の力が使えない私が、足手まといなのは分かってる。私を戦力外にしたキサさんの判断は正しいと思うよ。……だけどね!」

「なに？ 緑麗、黄龍の力が使えないのか？」

飛龍少年が急に話に割り込んできた。

「うん。いまの私の体力と気力ではね」

「なぜだ？ 黄龍と緑麗は一つだ。黄龍が消えることはない」
妙なことを言う。

「どういうこと？ 緑麗と黄龍は一心同体ってこと？ 飛龍は知ってるの？ な

ぜ緑麗が黄龍の力を使えるようになったのか。ううん、そもそも黄龍って何？」

矢継早に質問する私に、何から答えてよいか迷いながらも、飛龍が言った。

「黄龍は天界の神獣だ。俺が最初に緑麗に会ったとき、緑麗は既に黄龍と一緒に
だったから、それ以前のこと俺は知らない」

「そうなのか……」

「何も覚えていないのか？ 俺が力試しに緑麗に挑んで負けたことも、玉帝に謀
反の罪を着せられたことも。記憶がないとはそういうことなのか？」

アーモンド形の瞳がまっすぐに訴えてくる。

なんだかとても後ろめたい。

「ねえ、飛龍。私は緑麗じゃないかもしれないよ」

「なぜそんなことを言う。お前は緑麗だ」

「私は生まれたときからただの人間として生きてきた。緑麗の話が聞かされても何も思い出せない。何かの間違いじゃ——」

「そんなことはない！」

飛龍が語気を強めた。なんだかこの顔は誰かみたいだな、と思った。

あ、ユエか。ユエが泣き出しそうなときにする顔だ。

「いまは忘れているだけだ！ きつと思ひ出す！ 現にお前はここに現れた！」

「……」

「緑麗は約束したんだ！ 再びここに戻ってくると！」

「飛龍、私は……」

いまにも泣き出しそうな飛龍と、困ってる私に、マツキーが助け舟を出してくれた。

「待って、飛龍君。馨君と緑麗さんが君にとって同じ存在だとしても、二人は全く同じじゃないんだ」

「……？ 同じだろうか？」

「そうかな？ なら、なぜ君は本名で呼ばれたくないんだい？」

「それはッ……」

そこに気付くとは、鋭いね、マツキー。

答えに詰まった飛龍は、苦し紛れに言葉を続ける。

「緑麗は……、戦いにきたのではないのか？ 玉帝に復讐するために戻ってきたのではないのか？ 俺との約束を果たすために……」

「……」

何も言わない、いや、言えない私に、飛龍は今度こそ泣き顔で走り去った。

「あ、飛龍……」

うーん、ガラスの十代か。

しかし、そのとき、マツキーが気色ばんで叫んだ。

「待って！ 飛龍君、そっちに近付いちゃ……！」

「……!？」

飛龍が走っていった方向、つまり、あのふざけた立て札の方に何があるってい

うんだ？ と思ったときには、視界が暗転した。

【ケース1 沙龍】

気付けばそこは、電飾輝く何かの会場だった。

異空間の暗闇に放り出されたのは覚えているが、どうやってこんな場違いな会場に辿り着いたのかは覚えていない。

ふと視界が明るくなって、『なんとかコンテスト』という文字が見えたときは嫌な予感がした。

「さあさあさあ、皆さん、御馴染み、『クツキング・バトル』の時間がやってきました」

声のした方を見れば、蝶ネクタイにスパンコールの衣装を着た男と、アシスタントらしきバニー・ガールが居る。

このバニーちゃんは、絶対誰か別の奴の雑念が入り込んだに違いない。

「そのアナタ！ はい、これ着て、はい、これ持つて〜」

「いまから勝ち抜きで勝負してもらいます。見事五人勝ち抜いたら、無事、地上に戻れます」

「えっと、あの……？」

「ちなみに、負けるとスタート地点まで戻されますので、気を付けて下さ〜い。はい、では頑張つて下さいね〜」

「ウソ……」

いつの間にか、エプロン姿で台所に立たされていることに気付いた。

「ちよつと待て……。で、何を作ればいいわけ？」

「なんでもいいんですよ。あなたの、これぞ！ という自慢料理でどうぞ！」

「……」

自慢料理だと？

電子ジャーの使い方もよく知らない私に、何を作れと？

「……」

すいません、もう徹底的に勘弁して下さい。

【ケース2 木佐小次郎】

気付けばそこは、電飾輝くいかがわしい場所だった。

誰かが何かへまをしたのは分かったが、どうしていつも自分がとばっちりを食うのだろうか。

「なんだ、ここは歌舞伎町じゃないか……」

木佐が見渡すその風景は、馴染みの繁華街である。

が、その風景は、無残にも原型を留めていない。

ジジッと音を立てて転がっている電飾の看板（ただし、これも半分以上破壊されている）で、辛うじて、そこが歌舞伎町だと分かるくらいだ。

建物でまともに形を残しているものはないし、どこの廃墟だ、とツツコミ入れなくなるような風景である。

ホストクラブの店主やら、レンタルビデオ店の従業員などが、鬼の形相で木佐

を取り囲んだ。

「アンタんとこの事務員ねー、ウチの店ぶっ壊してくれちゃって、大した被害な
んだけどー？」

「新装開店だったのに、どうしてくれるんだ！」

「弁償してもらいますよ、アンタ！ 雇用主なんでしょ！」

「計算すると……、そうだねえ、ン千万くらいにはなるねえ……」

木佐は、途端に青くなった。

「な、なんですって!? ちよ、ちよっと待って下さいよ！」

【ケース3 飛龍】

飛龍は、問答無用でボンヤリと見えた人影に金磚を放った。

相手が誰か分かっているからこそその攻撃だ。

こういう場面で出てくるのは、飛龍が一方的に宿敵としている父親、敖閏しか

居ない。

「死ね！ このクサレ外道！」

しかし、飛龍の放った攻撃は、全て暗闇に吸収されてしまった。手応えはない。

全弾発射という必殺技も試みたが、それは全部自分に跳ね返ってきた。

「クツ……、卑怯だぞ、親父！ 姿を現せ！」

飛龍に見えているそれは幻影なのである。

しかし、飛龍自身はそうと気付かず、永遠に幻影の父親に攻撃し続けるだろう。アーメン。

【ケース4 偃月】

なぜ、別行動を取っていた偃月がここに居るのか、それは密かに連絡を取っていた松木しか知らない。

杏源郷で、張桂に一芝居打って、偃月の連絡先を聞き出し、松木自身が説得したのである。

更に、松木ゴローには他にも計画していることがあるのだが、それは後で判明する。

「……」

偃月は顔をしかめた。

目の前に広がる故郷の村の風景は、偃月にとって、いい思い出ばかりではない。

特に、川原で髪を洗っている沙龍を見るのは、いつも憂鬱だった。

目立つクリーム色の髪に返り血を浴びると、それを嫌って、沙龍は川原で髪を洗うのだ。

偃月の記憶を再現した風景の中でも、やはり沙龍は川原に居て髪を洗っていた。

(どうして……)

偃月はいつも思う。いや、十九年間、それだけを思ってきた。

(どうして、俺が『保持者』にならなかつたんだろう……)

あの小さな身体に脅威の力を抱え込んで、悪鬼にならざるを得なかつたただ一人の肉親が、気の毒でしようがないのだ。

しかし、沙龍は偃月には決して弱いところを見せなかつたし、実際には、弱い部分などないのではないかと思うときもある。

悪鬼そのもののように、沙龍はいつも冷酷な顔で、その手を血に染めてきた。

(哥々は、普通の人間じゃないんじゃないか——)

そう思う一方で、誰よりも肉親を愛する偃月にとって、沙龍は一番大切な家族だった。

いつの間にか、偃月の隣に風林が居た。小柄な老人である。

「爺々、教えて欲しい事があるんだ……」

偃月は、風林が答えてくれないことを承知で問い掛けた。

「どうして、哥々なんだ？ どうして、黄龍は哥々を選んだ？ どうして……」

「フム。お前はまだ真実に辿り着いてないんじゃないか」

「『真実』？ 真実って、なんだ」

「それは、緑麗しか知らん。いや、恐らく、もう一人居るな……」

【ケース5 松木ゴロー】

「あーあ」

松木ゴローは真っ白い部屋に居た。

本来のトラップのデフォルトの空間、といったところだろう。

「全く、こんなコモノの罠にかかっちゃって、馨君も木佐君もしょうがないなあ……」

しかし、あの二人にはいま気掛かりが山ほどあるので、仕方が無いのかもしれない。

そこに付け込んできたのは、戦略としては悪くない。

「でも、こんな所で時間食ってるわけにもいかないんだよね」

と、松木は一枚の札を取り出して、その白い部屋の片隅に投げつけた。

バチっという静電気が走るような音と共に、間の抜けた声がした。

「わっ！ うそ！ 見つかった！」

見れば、まだ若い道士である。沙龍や木佐よりも若く見えた。

高校に通ってそんな普通の男の子である。

「あー、君？ この『弱みつけこみ型トラップ』敷いたのは」

「そ、そうですけど。えーと、あなたはなぜ平気なんです？ 煩惱とかないんですか？」

「いや、あり過ぎるくらいある。ただ、こういうのを無効にする方法を知ってるだけ。さて、それはいいとして。とつとつこのシヨンボーイ罠を解除してくれないかな？」

「シヨ、シヨボーイ!? 失礼な！ 解除するつもりなんてありませんよ！ 僕だつて仕事でやってんですからね！」

しかし、そのとき、松木のそれまでにこやかだった表情が一変した。

「馨君に残された時間はあまり無いんだよ。僕を怒らせるのは、賄賂を要求してくる三流政治家くらいにして欲しいね」

「ウツキイー！ 茶碗蒸しなんて高等テク、できるわけないっての！ キサさん、助けてええええ〜ッ！」

と、おたまや鍋を放り投げたところで、我に返った。

あら？ ここはどこデスカ。

「ま、待って下さい！ ホントに無いものは無いんです！ 家を抵当に入れられると、あとはもう、首吊るしか——！」

あら？ キサさんが珍しく腰の低いこと言ってる。

飛龍は突っ伏してるし……。

で、なぜかユエまで居る。どうなってんだ？

「哥々……、ヒサシブリー」

なんで棒読みなんだよ、お前は。

えーと、それから……、

「お帰り、馨君。そこに転がしてるのが犯人だから、何か思うところがあれば、

ボコっていいよ」

マツキーはやけに冷静だな。

縄で縛り上げられて、もがいている蓑虫君が、この悪質な精神攻撃をしてきたってことか。

「うん、まあ、ボコるのは後でいいとして」

「……やるんかい」

「なんでユエがここに？」

「うん、偃月君には、飛龍君と一緒に、色々暗躍してもらおうと思って」

「フーン……？」

なるほど、雇われ軍師殿も、そろそろ本腰をあげてくれるのか。

なら、そこら辺は、全てマツキーに任せよう。

それから、マツキーは蓑虫君に道案内をさせ、私達は『崑崙防衛庁』に乗り込んだ。

外観は要塞のような堅牢な建物だったが、内装はごく普通の中国様式である。ここで出てきた責任者というのは、目元涼しい、典型的チャイニーズ・ビューティー。マツキーが即行口説きに入ったのは言うまでもない。

だが、さすがは仙女様。

軽くそれをいなすと、淡々と事務口調で自己紹介をした。

「私は九天玄女。西王母様の命により崑崙の防衛を任されている」

艶々とした長い黒髪に、抜けるような白い肌。そして、切れ長の黒い双眸――

「……」

あまりの美女ぶりに、言葉が出てこない。これを口説けるマツキーはある意味

凄い。

「……？」

ふと、その仙女様が私を見て微笑んだ——ような気がする。

「初めましてというべきか、久しぶりというべきか。記憶がないのだったかな？
なんと呼べばよい？」

「沙龍——。あだ名だが、ここではそう頼みます」

「崑崙へようこそ、沙龍。そして——、真武君」

またか、と私とキサさんは思った。

しかし、それを追求する前に、九玄娘々の口上が続けられた。

「いままで、度々貴君らを襲っていた『黄巾小力士隊』を差し向けたのは私ではない。アレを管理・管轄しているのは边境駐屯部隊で、彼等もあの自動迎撃システムを勝手な判断の下に切ることは禁じられている。大目に見てやってくれとは言わないが、彼等も仕事なのだ。それは分かってくれ」

「いや、仙界の領域に勝手に踏み込んだのは私達の方なので、あれくらいは覚悟

の上だ。遠慮なく撃退させてもらった」

撃退したのは私じゃないけどさ。」

「そうか。ところで、飛龍は？ 一緒じゃないのか？」

「あ、いや、さっきまで一緒だったんだけど……、遊びに行っちゃいました。」

えーと、娘々は飛龍とどういう……？」

「私は飛龍の保護者もしている。これも色々、縁でな——」

と、娘々はまた意味深に間を置いた。

「まあ、あれはあれで、やることがあるのだろう」

その言い方には、仄かに漂う優しい空気のようなものがある。イメージとしては限りなくクールなキャリアウーマンなんだけどな。

「で、あなたがたは何をしに崑崙に來られたのだ？ 沙龍」

「調べ物をしに、というのが正解かな」

「その言葉を信じたとしても、貴女は仙界にとっても天界にとっても起爆剤にしかならぬことをお分かりか？」

「まあ、道中薄々は気付いたが」

「幸いなことに、貴女がここに来たことはまだ帝都には知られていない。だが、貴女がたがこのまま珍道中を続けければ、すぐにでも玉帝の耳に入るだろう。そうならば、かなり厄介なことになる」

「つまり、このまま大人しく帰れ、と？」

「いや、それを言う権利は私にはない。が、勝手に行動されても困るのでな。暫くここに留まって貰うというのではどうだ？」

キサさんと顔を見合わせたら、娘々が苦笑して言った。

「私はこう言っているのだ。揉め事を起こしたくないのならば、貴君らは隠密に行動するしかない。そして、それは我々の望む所でもある、と」

「……」

つまり、一応は協力してくれる、ちゅーことかな……？

「それに、マヌケな部下が世話になった借りもある」

「ふ、ふみまへん、九天玄女はま……」

いや、この場合の『借りを返す』は、ちよつと意味が違くないか……？

でも、まあ、久々のふかふかベッドも恋しいし、ここはお言葉に甘えてしまお

う。

九天玄女の私邸——。防衛庁の隣にそびえる屋敷である。

「私の立場は色々微妙でな」

九玄娘々は、夕食を振舞った後に、そう切り出した。

「表立った協力はできぬ。できれば、早々に下界へ帰って貰いたいのが本心だ」

「招かれざる客であることは分かっている。迷惑をかけるつもりはない。調べ物さえ終わればすぐに帰るよ」

「その調べ物というのは、黄龍のことか」

「分かっているなら話は早い。知っていることがあつたら教えてください」

「私が知っているのは、せいぜい崑崙での通説だ。既に貴女の耳に入っているだろう」

「いや、聞かせて欲しい。特に、緑麗と仙界の関係が知りたい」

私が身を乗り出してそう言うと、九玄娘々は頷いて、少し長い話になる、と前

置きをして話し始めた。

数千年前から続く、天界による仙界の統治と、それに反発する一部の仙道達。それは、偃月から聞いた話とほぼ同じだ。

「玉皇大帝は暴君ではないが、野心がないわけでもない。仙界の気性の荒い連中にとつて、玉帝の一方的な政策は受け入れ難かったのだらう。天界内でも、色々反発があつたと聞く。だが、実際には玉帝に逆らえる者は居なかつたし、崑崙の連中も特に自分達から行動を起こすようなことはなかつた。三千年前の、あの事件が起きるまではな」

「その事件というのが、『緑麗の叛乱』？」

「そうだ。天界の軍部で何があつたのかは知らぬが、緑麗が叛旗を翻したこと、俄かに仙界側も活気づいた。崑崙の一部の鷹派がこれに乗じて決起し、緑麗に近付いて、共同戦線を張つた——というわけだ」

「勝算は、あつたのかな？」

天界における力関係の実態は分からないが、天帝に反旗を翻すなんてことは、とてつもなく無謀に思える。

少なくとも一般的な中国国民たちの知る『玉皇大帝』は、無敵の人なのだ。

「みな、緑麗の持つ神獣の力があれば、なんとかなると思ったのだろう。実際、叛乱軍は途中までは善戦していた」

「でも、負けたんだよね？」

「そうだ。そして、叛乱軍が敗れ、緑麗が捕らわれたとき、黄龍の力を恐れた玉帝は、その力を緑麗の魂から切り離し、消滅させようとした。だが、完全に消滅させることはできなかつたらしい。だから、黄龍は、緑麗を追って地上を彷徨うことになった。以来、黄龍は地上界の護り神のような存在になった——、というのが崑崙では誰もが知っている話だ」

そこまで話して、九玄娘々は一息入れた。

キサさんとマツキーは黙って話を聞いている。

とりあえず、私はいままでの疑問を全てぶつけてみる。

「緑麗と黄龍って、どういう関係なの？ 飛龍は一心同体のようなことを言っていたが」

長年の友に話しかけるように言った。

九玄娘々が礼儀にうるさい人じゃなければいいんだけど。それについては、大丈夫なんじゃないかという気がする。

クール・ビューティーな仙女様も、イタイタな沙龍ちゃんにとっては、結構親しくなれる人かもしれない、となんとなく思うのだ。

「緑麗が黄龍の力を得た経緯は、私も知らないのだ。緑麗はそれについては語ろうとしなかったからな。緑麗がそう望んだのか、黄龍が望んだのか、それとも他の事情があったのかもしれない」

「神獣の力が使えるという利点を考えれば、緑麗が黄龍と何らかの取引をしたのは分かるとしても、黄龍の方には何の得があると思う？」

「黄龍も麒麟も、原初の頃より天界に居た神獣ではなく、異世界の存在だという話は聞いたことがある。一説によれば、天界で彼等が存続するためには、天界の者と融合する必要があったのかもしれないということだが……、それも全て推測だ」

「『麒麟』……？」

初めて出てきたその単語は、キーワードの一つだろうと思った。

「現在、玉帝が手にしている力は、その麒麟の力だ」

「なるほど……。段々分かってきた。だからこそ、天帝は黄龍を恐れたのか」

「そうだ。黄龍は、唯一、麒麟と対等の力を持つ存在だ。緑麗が天界を追われることになったのも、恐らく黄龍の力を手にしたためだろうと言われている」

「ちよつと待てよ？ 天帝に睨まれるのが分かってて、黄龍の力を手にするか？ 緑麗に元々叛意があるなら別としても、私ならそんなメンドーなことはしない。娘々は緑麗を知っているんでしょ？ どんな人だったの？」

「そう親密だったわけでもないが……。権力に無頓着だったことは確かだな」
九玄娘々の苦笑には、緑麗に対しての好意すら感じられた。

『親密ではない』と言った娘々の言葉の方が嘘だろう、と思った。

「緑麗は黄龍の力を自ら求めたわけじゃない、というのが、娘々の考えか」
ズバリと言ってしまったら、娘々は、更に苦笑した。

「しかし、真実は緑麗にしか分からぬ。玉帝との間に何があつたのかも、本人達でなければ分からぬものよ」

「ご尤も」

その会話に、マツキーが口を挟んだ。

「九玄さん、僕は叛乱以前より、叛乱後の方が気になりますね。僕が天帝なら、緑麗と黄龍を地上で再会させないようになると思うんですけど？」

「その通り。玉帝は用意周到な男だ。人間として転生した緑麗に、黄龍の力が及ばぬように、あらゆる事前策を打った。黄龍が地上を彷徨う限り、人間の中に、その力の影響を受ける者が出てきてしまう。お前達はそれを『保持者』と呼ぶよ。うだが、玉帝はその『保持者』として覚醒できる者を男子に限定した。そうすれば、女性にしか転生しない緑麗の魂と、黄龍が再び出会うことはないからだ」

「……！」

それでか、と思った。長年の疑問の一つは解けた。

それで代々の『黄龍の保持者』が男性だったのだ——。私の父然り。

「じゃあ、なぜ、馨君は緑麗さんの生まれかわりとして、黄龍の保持者に成り得たんだろう？」

「それは、私には分からぬ。玉帝の神通力をも超える黄龍の意志か、単なる偶然かもしれない。いずれにしても、玉帝にしてみれば誤算であっただろう。天界側に

は『黄龍の保持者抹殺計画』までであったようだからな」

暫く、みな黙っていた。

元々、キサさんはだんまりを決め込んでいるが、マツキーですら難しい顔をしたら、たまたま、黙った。

その静寂を破って、私は口を開いた。

「娘々、一つ聞いていいか？ 天帝は黄龍の力を、緑麗から切り離した——と言ったな？」

「そうだ。それも、玉帝のみが行える神業だ」

「いまの私から黄龍を切り離すことも可能だと思うか？」

「できるだろう。だが、それは『保持者』の死も意味する」

「……」

「魂から黄龍を切り離すことはできる。だが、そのためには、まず肉体から魂を取り出さねばならない。言っている意味が分かるか？」

「ああ……」

「話が長くなったな。今夜はゆっくり休むといい」

久々のふかふかベッドの虜になったのは、私ではなく同行者の方だったらしい。

二人ともお疲れのようで、夕飯が終わった後は部屋から出てこない。

私はここのところの食欲不振に加えて、不眠症も仲間入りしたのか、娘々の侍女が用意してくれた部屋でしばらく横になっていたが、どうせ眠れないのならどこかで寝酒をくすねてこようと、部屋を出た。

広い屋敷だが、中国様式ならなんとなく何がどこにあるのか分かる。

さっきの夕飯をご馳走になったダイニングではなく、応接室のような部屋を探した。そこなら、客用の酒くらい置いてあるだろうと思ったのだ。

果たして、そこには酒もあったが、オプシオンで美女もついていた。

「眠れないのか。沙龍——」

九玄娘々が、ソファに足を投げ出して、酒かっくらった。

なんか、ますます親しみを感じるな、この人。

「あまりにも豪華な部屋なんで、緊張しちやって……」

「フ……、お前らしくない」

そうか、この人も昔の緑麗を知る一人なんだな、と改めて思った。

「さっきの娘々の話を聞いてて、もう一つ疑問を思い出したんだが——」

娘々が勧めてくれたソファに座り、グラスを受け取ってから、切り出した。

「なんだ……？」

九玄娘々は、さっきのビジネスライクな話しぶりとは違って、かなりくだけている。

まあ、お酒も入ってるようだし、私もこっちの方が話しやすい。

娘々が注いでくれたお酒は……、うひー、アルコール度数高そうなバーボンなんですけど……。

とても私はストレートでは飲めなかったので、氷をもらって、それがじんわりと溶けるのを待った。

「人界では、黄龍はなぜか崑崙で誕生したと言われてるんだ。それは、龍脈の始まりがここ崑崙にあるからだという噂に拠るんだが——、それって、やっぱり単

なる噂なのか？」

「そうだな……、仙界の領土に龍脈の起点があるのは確かだ。だから、いつの間にか地上ではそういう話になったんだろう」

「フーン……」

「そこは、温泉になってる。いわゆる、秘湯ってやつだ」

「へー、いつか行きたいなー」

照明の落とされた部屋で、娘々の表情はよく分からなかったが、綺麗に微笑んだのが分かった。

制服姿で笑いながら日々を過ごしていたときは、私もキサさんも自分の前世のことなんて知らなかったし、あの頃にそんな話を聞こうもんなら笑い飛ばしていただろう。また、それだけのパワーもあった。

しかし、ガタつく身体を何とか精神力でもたせているいま、私にそんな気力はない。

『前世のことを覚えてないのは、その必要がないから』

そう言ったのは私自身だ。

それに、大半の人が輪廻転生を真面目に信じていないのは、現実を生きていく上で、そんな人外のシステムがあろうがなかろうがあまり関係ないからだ。そんな風にも思う。

しかし、覚えてもない前世の話がされて、そこに『黄龍の保持者』の短命説の原因があるのだとしたら、『私には関係ない話』と斬り捨てるわけにはいかな

い。

といっても、九玄娘々はことの真相を知っているわけではないし、張桂が言っていた生き延びる方法とやらは天界にしかない、という話も宙ぶらりんのままだ。

早いところ天界に行かなければならないのだが、マツキーがもう少し様子を見る、と言うので、私達は娘々の屋敷で数日を過ごしている。

ユエと飛龍はあれからずっと音信不通のままだが、その件について私は関知しないことにしている。もとより、心配はしていない。

マツキーは、いつもの如くたまに居なくなるけど、夕飯時にはちやつかり戻ったりする。

一番、鬱陶しい空気を撒き散らしているのはキサさんだった。

しかし、段々無口になってきたキサさんの苦悩を、あれこれ心配できる余裕は私にもなかったのだ。

「馨、入るぞ。……ッ!」

と、キサさんが部屋に入ってきたときは、我ながらどうやってコレを誤魔化そ

うかと考えてしまった。

もう誤魔化しようがないほど、床もシーツも赤く染まってる。

咳き込んでいる私に駆け寄ったキサさんは声も出ないようだった。

「キサさん、お願い、ドアを、閉めて……」

「そんなの後でいいだろ！」

「いや……、ダメ。ドア、閉めて」

怒った顔のままに、それでもキサさんは言う通りにしてくれた。

「閉めたよ。次はどうするんだ？」

うわ。トゲトゲしてる……。

「このシーツ取り替えて。血の跡を全部消したい」

「そんなのは後でいい。薬をもらってくる。いまは安静に……」

部屋を出て行こうとするのを、必死で袖を掴んで止めた。

「ダメ！」

「……!？」

「早く。お願い……、こんな所、誰にも見られたくない！」

私はこの人の前では何度か泣いたことがある。

これは何回目なんだろう、と思ったが、数えるのも億劫だった。

日常生活を共にしていた私達には、お互いに、奇妙な錯覚がある。擬似家族とでも言えはいいのだろうか。

恋人の前では着替えることすら抵抗があるというのに、キサさんとなら私は一緒に風呂だって入れるのだ。

私は寝間着に着替えながら、しぶしぶといった感じで真新しいシーツをベッドに掛けてくれているキサさんの主夫ぶりを涙を飲み込みながら眺めていた。

「うげ、マズイ〜」

苦い薬湯を飲み切って、恐る恐る顔を上げると、ようやくキサさんの怖い顔が幾分和らいだ。

「昨日、麻雀なんかするんじゃないよ」

「麻雀のせいじゃないよ」

微笑んでみせたが、表情を作るのも身体に負担がかかってそうだった。

「なんか、キサさん、ずっと難しい顔してるよ？」

「だろろうな」

「……」

「夕飯、食べられるのか？」

「いない。適当に誤魔化しておいて」

「馨——」

と、また怒られる。

「分かってるよ。いつまでも続けられないってことくらい」

「また、様子を見に来る。大人しく寝ててくれ」

キサさんはそのまま、暗い顔で部屋を出て行った。

「真武君」

部屋から出たところで、木佐は九天玄女に呼び止められた。

明らかに、待っていたようだ。

「一つ、方法がある。あまり薦められないが」

「馨を救う方法ですか？」

九天玄女は頷いた。

「正確には、私はその方法を知っているわけではない。沙龍を救えるであろう人物を知っているだけだ」

「それは……？」

「天界軍総司令、九雷元帥——。恐らく、鍵は全てあの男が握っている」

「しかし……」

九雷という男は、緑麗を裏切って天帝についたのではなかったのか？

少なくとも、張桂から聞いた話ではそうだったはずだ。

「私はあの男を信用しているわけではない。腹の知れぬ男だ。だが、もし私の直感が正しければ、あの男は玉帝の意図とは別の所に居る。その証拠に奴が動いたのに、玉帝はまだ緑麗がここに居ることを知らぬ」

「……」

「西王母様の張った崑崙の結界は、さすがの玉帝も見通すことはできぬ。ここで養生している分には、沙龍も細々と生き長らえることもできよう。だが、本人は

それを望んではいいまい」

「しかし、九雷元帥の所へ行くことも望んではいけないと思います」

「ああ、私もそう思う。だから、薦められないと言った」

「後は馨次第、ということですか……。では、なぜ僕にその話を？」

九天玄女は黙った。その表情は硬い。

「九玄さん……？」

「私は、宮仕えなのだ。主君の命に背くことはできない。しかし……。いや、私の意図を汲んでくれれば有難い」

九天玄女はそれ以上何も言わなかった。

黒帝玄武佑君——。

それが、かつて、天界においての四神玄武の正式名称であったということとは、数日前に九天玄女から聞いた。

真武君というのは通称である。

「貴方は、玄武の力が使えるというだけの人間ではない。貴方こそが四方将神の一人、黒帝玄武佑君その人なのだ」

「つまり、馨と同じで、輪廻転生……、ってことですか？」

「俄かには信じられないだろう。……だが、かつての真武君を知る者には分かる。かつての緑麗を知る者が、沙龍がそうだと分かるのと同じようにな」

「九雷元帥も、陽輝大将も、僕のことをそう呼んだのは、やはりそういうことなんです……」

「あの二人に会ったのか」

「つまり、僕も馨も、前世では軍属だった、ということですか？」

「いや、将神というのは、正確には天界軍に属してはいない。組織体系が違うのだ。天界には、玉帝の命で動く近衛府と、元帥の命で動く天界軍があるが、その命令系統の外に、独自の判断での戦闘を許されている『将神』が五人居る。つまり、四方将神と、その四方将神達を統括するための将神長とも言うべき者だ。それが緑麗だった」

木佐は、事務的に語る九天玄女の話になかなか追いつけず、ところどころ考え

込んだ。

しかし、九天玄女は特に先を急ぐこともなく、言葉をつむぐ。

これが、仙道というものなのか、と木佐は漠然と思った。

張桂にしても、何ものにも動じない冷静さというものがあつた。

「なぜ、前世の僕は地上に落とされ、転生することになったんです？ 四方将神

達は緑麗さんの叛乱に協力したんですか？」

「いや、あの叛乱に協力したのは敖広……、青帝青龍広君のみで、白虎聖君も、

朱雀星君も、そして貴方も、結局、緑麗とは袂を別つた」

「では、なぜ……？」

「貴方は落とされたのではなく、自ら黄龍を追いかけたのだ」

「黄龍を護るために？」

「違う。貴方の役目の一つは、黄龍を監視することだ」

「“監視”ですって……？」

「地上を彷徨うことになった黄龍を監視し、必要とあらば、これを滅すること」

「“滅する”？ そんな、バカな!？」

第一、そんなこと、できるはずないではないか。

「大体、四神は黄龍を護る存在で……」

「それは、人間にとって都合よく解釈されているものに過ぎない。天界ではこう言われている。青龍は制御するもの、朱雀は再生を促すもの、白虎は中立を守るもの、玄武は執行するもの——、とな。尤も、天界の理解が真だとも限らぬ。神にとって都合よく解釈されていないとは言い切れまい。ただ、四神は、今も昔も、その四方の中央に頂く『力』を調整するために存在している。それだけは確かだ。決して守護のためではない」

「“調整”……？」

木佐にとって、九天玄女の言葉は何もかもが衝撃だった。

黒帝玄武佑君という名の四方将神。それが、転生前の自分であるということ——。

更に、四神とは黄龍を守護する存在ではなく、むしろその反対の意味を持つということ——。

「そんな、バカな……」

ナンセンスだと笑うことはできる。

だが、それを否定できるだけの情報を、木佐はなに一つ持っていない。

「白虎聖君と朱雀星君は行方不明だそうだ。緑麗の叛乱以降、所在は知れない」
九天玄女はそう言った。

そこで、木佐はふと思いつく。

（では、董天さんはなぜ『青龍』の力を持っているんだ……？ 彼もまた、青龍
広君の生まれ変わりなのか……？）

そんな疑問を抱いたのが数日前である。

しかし、木佐は自分の前世のことは取りあえず脇へ押しやった。広い屋敷の中
を、探さないと見つからない松木のこととも放っておいて、木佐は過保護と言われ
るのを承知で沙龍の世話を焼くことにした。

沙龍は普段通りに振舞いたいようだったが、体力的には明らかに無理があつ
た。

九天玄女に台所を借りて、沙龍の好物を作ってみたりもしたが、食欲は全くな
いらなかった。

そして、今日、とうとうあんな大量の血を吐いている沙龍に出くわしてしまつたのだ。

自室に戻った木佐は、先程の九天玄女の言葉の意味を考えていた。彼女には立場上、言えないことがあるのだろう。

それをなんとか自分に伝えようとしたのは分かる。

（鍵を握っているという九雷元帥を、九玄さん自身は信用していないし、むしろ、嫌ってるようにも見えた。……にも限らず、馨を救うにはそれしか方法がない、と言う……。おかしいじゃないか。まるで——）

そこで、木佐はハッと気付いた。

（もしかして——!?)

15 残された秀光

冴え渡る月光に、目の前に掲げた秀光の白刃が鈍く光る。

いましがた放り投げた鞘を見て、思った。

小次郎、敗れたり——といっても、鞘を差したまま動いてちや邪魔でしょうがないのに、なんで佐々木小次郎は動揺したんだろう。

少なくとも私は勝つために投げ捨てただけだな。それぐらい分かってくれ、武蔵。

(まあ、あっちの小次郎さんは私と同じことを言いそうだけど)

そんなことを考えて、イカンイカン、と集中しなおした。

寝入りっぱなの襲撃なので、私は薄い単の着物一枚で、秀光の他に武装はしていない。

対して、九玄娘々は、軽鎧ながら、完全武装である。

これだけでも、圧倒的に私が不利だが、どうもそう思えない。

絵的にも、私は欄干まで追い詰められているけど、九玄娘々は、さつきからちつとも殺気がない。

「すまぬ、沙龍。騙したわけではないが、私にも立場がある」

「これも生きてきた長さの違いかな？」

苦し紛れと時間稼ぎにそんなことを言ってみたが、もし、私が追い詰められているとしたら、それは九玄娘々に、ではない。

「今も昔も、私はお前に災いしかもたらすことができぬ。……許せ」

「娘々に指示を出した黒幕は別に居るんだろう。それに、生憎と『昔』は覚えていないんでね。負い目を持たれても困る」

「そうだな……」

九玄娘々は溜息ついて、姿勢を崩した。

この殺意のない状態では闘うことなどできない、と覚ったのかもしれない。

娘々は、自身の武器である大刀をパチンと鞘に納めた。

「……？」

娘々は、最初から私を敵だと思っていないし、私もそう思っていない。

なら、なぜ私が緊張感漂わせて秀光を構えたままかというと――、

「将神に対するせめてもの義だ。私は手出しはせぬ。それでよいか、九雷元帥」
欄干に座る九雷元帥に、九玄娘々はキツパリと言い渡した。

「構わないさ。いまの緑麗ならば、俺一人で充分だ」

私は、突然のこの事態を正しく理解しているつもりだ。

職業軍人である九玄娘々は、上からの圧力により、仕方なく九雷元帥に自分を売った。彼女を責める気はない。

問題は、この男の方なのだ。

「さて、どうする？ 緑麗。大人しく攫われるか？ それとも――」

「勿論、抵抗させて貰う」

この前会ったとき、身動き一つできなかった自分が、この天界軍元帥とまともにやり合って勝てるとは思えない。

何か考えなければ――。

私がいま持っているのは、この秀光と、たった二十年の知識だけ。その中に勝機があるとは思えないが、あると思わなければ、私はいま、ここには居ない。

「勘違いするな。俺はお前を助けにきただけだ」

「深夜のアポなし訪問で言うセリフか？　まだ夜這いに来たと言った方が説得力がある」

彼は静かに笑ったようだった。

「お前を救えるのは俺だけだ、と言ってもか？」

「その言葉をどう信用しろと？」

この際、勝率の悪さを無視して、撃ち込むことだけを考えるしかない。

自信などないが、一太刀でもお見舞いできれば、そこから勝機も生まれる。

「沙龍、九雷元帥の言っていることは、ある意味真実だ」

身構える私に、横から娘々が言った。

ある意味？　ある意味って、なんだよ。

いや、それは後で考えよう。

「私には事情も状況も何も分かってないんでね。教えて欲しいことは山ほどある」

「そうか。では、俺に指一本でも触れることができたら、全てを教えてやろう」

「ふぎけんなよ、このセクハラ野郎」

私は、ちゃんと不敵に笑えているんだろうか。

そういう顔を作っているつもりだが、この男の迫力に圧されて、萎縮してるように見えていないだろうか。

「緑麗——。お前は俺には勝てない。やめておけ」

「……」

「大人しく、俺と共に来い」

まただ、と思った。

この高圧的な態度と有無を言わせぬ物言い。

だけど、声だけが、それを裏切っているかのように、優しく響く。

だから、混乱してしまおう。

しかし、私はいま、なぜ自分がここに居るのか、見失うわけにはいかない。

雑念を振り払うように、秀光の切っ先を、まっすぐに九雷元帥に向けた。

「死に損ないの私に一体何の用があるって言うんだ。黄龍の方に用があるなら、私を殺して持って行くがいい」

「フ……、それでこそ緑麗だな」

九雷元帥が、欄干からスツと降りた。

来る――。

秀光の一閃が、空を凧いだ。

その渾身の一撃は確かにこの男の胴体を捕らえたはずだったが、秀光は残像を斬り裂いただけである。

(なぜ……ッ!?)

この速さは尋常じゃない。

愕然とした。スピードだけは誰にも負けない自信があつたのに。

その、恐らくは人としての最速を以ってしても、やはり『神』には敵わないのか――。

更に、二撃、三撃と、仕掛けたが、簡単に回避された。

(速過ぎる二)

俗に言う瞬間移動なのか、それとも実体がないのか、あらゆる可能性を考えた。

しかし、仮に答えを与えられたとしても、対応策があるはずがない。

「掠りもしないようだな」

息が上がってきた所で、挑発するように言われた。

「これでも人間相手じゃイイ線いくんだが、上には上がいるもんだな。さすがはカミサマ」

「気が済んだか？」

「……そうだな。力も速さも技も敵わないなら、降伏するしかない」

諦めたかのように構えを解いて、秀光を投げ捨てた。

鞘を投げ捨て、本体を投げ捨て、これでは本当に勝つつもりがないんじゃないか、と思うのが普通だ。

歌舞伎町のチンピラ君には通用するこんな芝居も、カミサマに通用するかどうかは分からないが、どっちみち、もう、私には背中中の切り札しか残っていない。

髪を緩く縛っていた房付きの紐を解いた。乱れた髪を直すように、その手つき

を完全にリラックスさせて――。

「……ッ!？」

そのとき、九玄娘々が息を飲んだのが聞こえた。

ということは、少なくとも娘々はこの展開を予想していなかった、ということだ。

これ以上ないというくらいの瞬間技で、私はその紐を九雷元帥に向かって投げつけ、小手先の力加減で手首に巻きつけ、更に欄干に縫い付けた。

間髪入れずに、背中の帯に差し込んでいた小柄を抜き取り、そのまま相手の懐深くに潜り込んで、心臓の上に小柄を突きつけた。

突きつけるだけで、突き刺さなかったのは、彼が丸腰で殺意がなかったからだ。

「さて、私の勝ちだな。九雷元帥。教えて貰おうか、貴方の知っていることを全て」

元帥は感嘆の表情のまま、微笑みすら浮かべている。

ム。何だよ、そのムカつく顔は。

「大したものだ」

もう片方の手は自由に動くだろう。

でも、その前に私が心臓を一突きする方が早い。その自信があつたからこそ、彼の左手は無視した。

「しかし、お前は一番のミスを犯したな」

元帥が何をしたのか分からなかった。いや、何もしなかったのかもしれない。

私は、彼の声に呪縛されたかのように、身体が一瞬硬直して、瞬きすらできなくなった。

「俺に触れることは、お前にとっては致命傷だ——」

「ッ……!?!」

意識が遠のいた——。

木佐がそこに現れたときは、全てが終わっていた。

「遅かったな、真武君。緑麗はもらっていくぞ」

欄干の上に立つ九雷は、その腕に小さな沙龍の身体を抱いていた。

「馨をどうする気だッ！」

蒼白い月光の下で、その光景は幻想のような一枚の絵になっていた。

「焦らずとも『甲斐馨』はいずれ返してやる。だが緑麗の魂は果たしてどこに帰りたがっているかな？」

「わけの分からないことを！ 貴方の目的はなんなんだ、九雷元帥！」

「お前はそれを知ってるんじゃないのか、真武君。黄龍を追いかけたお前には、それが分かるんじゃないのか？」

「何を……!?!」

まるで、馴染みの同僚にでも対するような言い方だ。

その口ぶりに、木佐も、沙龍と同様に混乱した。

「続きはまたの機会にしよう。あまり長居もできないのでね。邪魔をしたな、九玄殿」

九雷は、欄干からゆっくりと飛び退って、宙に消えた。

暫しの重い沈黙の後、木佐は備前長船秀光を拾い上げる。

沙龍が岡山にこれを貰いに行ったとき、木佐も一緒についていったのを思い出した。

本来、武器など無くても人を殺せるはずの沙龍が、自分のハンデを補うためにこの秀光を帯刀することにしたのだ。

沙龍にしてみれば、屈辱だったかもしれない。

しかし、そんな屈辱を「生きる手段」と言い切れるのもまた沙龍だったはずなのだ。

「真武君……、すまぬ」

月下に佇む木佐に、九天玄女が鞘を渡した。

木佐はそれを無言で受け取って、秀光を納める。

「私を、責めないのか？」

「貴女の行為は許しがたい。が、恐らく貴女の判断ではないのでしよう」

「沙龍と同じことを言うのだな」

しかし、木佐の激昂は鎮まったわけではない。一旦納めたはずの秀光を、抜刀術でもって欄干を全て斬り落とすのに使った。

それぐらいしか、このやり場のない怒りを発散させる術がないのだろう。

「あの、九天玄女様……。この欄干の請求書は……」

九天玄女の傍らの侍女が、コッソリと聞く。

「真武君の名前で切っておけ」

「ナニナニ？ 何の騒ぎ？」

そこに顔を出したのは、寝ぼけ眼の松木ゴローだった。

(眩しい……。キサさん、カーテン閉めてよ……)

瞼に当たる陽が鬱陶しくて、うつすらと目を開けた。

そして、すぐに理解した。

「……！」

ここは東京でもないし、九玄娘々の屋敷でもない。一瞬あれば状況判断はできるつもりだ。

同時に、枕元の秀光を探した。が、当然、何も掴めはしない。

「……フツ」

思わず嗤った。

捕まった自分の傍に武器があるはずはない。それ以前に、いつの間にか武器に頼っている自分に、苦笑せずにはいられなかった。

「……」

周囲に人の気配はしない。

そこで、やっと落ち着いて上下左右を見渡すと、なかなか洒落た一室であることが分かった。

いままで自分が寝ていたのも、豪勢な天蓋付きのベッドである。

「……」

手足に枷もないし、少なくとも牢獄——というわけではなさそうだ。

自分が着ている物も昨夜のままだった。

天蓋をめくって、起き出した。心地よい風が部屋の中を流れている。それもそのはずで、部屋を囲う壁などほとんどなく、二方向の壁は床から天井まで開放たれていた。

高い建物の一室ということには分かった。

「ここは……?」

なんだろう。どこかで見た気がする。

でも、これは既視感といったものじゃない。

なにかの映画で見たシーンとか、多分、そういうオチだ。

「水雲宮——。貴女のお住まいだった場所です」

「……!?!」

独り言に返事があつた、ということに心底驚いた。

「まったく次々に新しい登場人物が出てくるな。しかも揃いも揃って気配を殺すのが巧すぎる。どうなってるんだ。これでも、小さい頃から修業を積んできたはずなのに」

声のした方向を確認しながら、用心深く言った。

「我々は気配を消しているわけではありません。そもそも、人が感じる『気配』というのは、人体特有の電磁波を感知しているに過ぎませんが、我々の身体はその波を発していないというだけのこと。貴女の腕が鈍ったわけではありませんよ」

長い脚を組んでゆったりと座っているその男は、信じられないような真っ白の長いコートを羽織っていた。

これまでに見た天仙界の人達とは全く違う雰囲気醸し出している。

「……学者か？」

なんとなく、そんな風に見えたので言ってみた。

「広義では、そうですね」

「九雷元帥の部下かなんかか？」

「いえ。私も貴女と同様、九雷に無理矢理連れてこられたクチでして」

「……？」

「捕らわれの身ってことです」

いや、あんまりそうは見えないんだけど。この人、優雅にお茶飲んでるだけだし。

「まあ、そのようなことはどうでもよいのです。この気だるい午後のひととき、莊嚴にして優美なる宮殿で、天界一と謳われた将神の魂と再び合い見えることのできたこの幸運を歎びとしましうか」

「……」

あれ、ちよつとアブナイ人かな……。

自己陶醉型つーの？

一つ一つの挙動がなんだか妙に芝居じみていて、しかも、それをわざとやって

る感じ。

「さて。私は貴女をなんとお呼びすればよろしいでしょう？」

「好きに呼んでくれ。私も貴方の名を覚える気はない。ここんとこ色んな人に会いすぎて、名前と顔がそろそろ一致しなくなってる」

「それも結構。記憶を自分の意思で管理できれば、確かに便利でしょう。辛い記憶も悲しい記憶も忘れることができればね。ですが、果たしてそれを幸せといふべきか。積み重ねてきた記憶は、すなわち魂そのもの。そうは思いませんか？」

「なんの話だ……」

またこの手の話か、とうんざりしたのが、顔に出てしまったようだ。

「あまりお好みの話題ではないようですね。では、公主、お茶をいかがですか？
それとも、診察を先にしましょうか」

「診察？ ああ、ドクターなのか」

このときになって、やっと彼の冗談のような白いコートが白衣を兼ねているのだと気付いた。

我ながら、鈍ってる。

「ええ。強制連行とはいえ、とりあえず医者としての責務は果たしましょう。だ
いぶ衰弱されておられるようだ」

「得体の知れないドクターに、大人しく診察されるほど、世間知らずの公主じゃ
ないんだが」

「うーん、参りましたね。それでは私が九雷に殺されます」

「いや、全然参った顔じゃないよ、それ」

「一応これでも、天界一の名医なんて言われて、向こう三ヶ月診察の予約でいっ
ぱいなんですけどね」

「予約って、アンタ、レストランじゃないんだから……」

「それに、私の診察も治療も短いですよ。他のお医者さん達のように道具も使い
ませんしね。『早い・簡単・完璧』というのが私のモットーです」

「牛井屋かい」

「なんか、この人、いでたちといい、言動といい、限りなく怪しくて胡散臭さ爆
発なんだけど——」。

「だけど——」。

「ご安心なさい。私は貴女の敵じゃない」

「だろうな……」

その眼鏡の奥に光る瞳が、至極まともだ。

そう思ったので、大人しく診てもらおうことにした。

「貴女の『氣』の収束点はここですね」

私の額に手をかざして、ドクターは暫く動かなかった。

なぜ、分かるんだろう。

そういえば、董天に最初に拘束されたときもここを押さえられた。私の急所つてことなんだろうか。

ドクターはそのまま優雅な手つきで私を抱き寄せて、額に唇を当てた。

「ドクター、こういうのは私の居る世界ではセクハラ診療と呼ばれているんだが」

「じつとして……」

私が抵抗しなかったのは、それがこのドクターの治療なのだ和本能的に分かったからだ。

勿論、このドクターが清潔そうな美形だったから、というのものもある。もし、これがぬらりひよんだったら、猛烈に抵抗したかもしれない。

「大丈夫。もう終わりましたよ。……いかがです？」

「ああ……、そういえば……、すごく楽になった。……謝々」

「それはよかった」

そう言って、今度は幼稚園の保父さんのような微笑みを浮かべる。

「ところで、ドクター、聞きたいことがあるんだが」

「はい？」

「男の患者にもこうゆう治療法を？」

「まさか。女性限定です」

「あ、そ……」

これまでの会話で分かったこと。

このドクターはノーマルのフェミニストであるということ。

見た目年齢十五歳（キサさん談）の私も、一応、このドクターの中では『女性』に入ること。

フム、結構、普通の人かもしれない。

「私ができるのはここまでです。痛みを緩和することはできても、病状を止めることはできません」

「いや、充分だ」

「治療費は九雷から貰いますのでご心配なく。以上で私の仕事は終わりですが、何かご質問はありますか？」

「地上の医者は、助からない患者には時と場合によって嘘を教えてもいいことになっている。だが、私はそういうのが嫌いだね。自分の稼動時間は正確に知りたい。教えてくれ。私はあとどれくらい動ける？」

「ここでの時間の流れは、地上での感覚とだいぶ違いますよ？」

「それでもいい」

ドクターは暫く黙っていたが、教えてくれた。

「貴女の感覚で言えば、三ヶ月でしょう。ですが、それも、安静にしていれば、の話です。無茶をすれば確実に命を縮めることになりますよ」

「分かってる」

余命宣告、三ヶ月か。思ったよりはあるな。

一仕事するには十分な時間だ。

「それじゃ、公主。治療も終わったことですし、私のお茶会に呼ばれてみませんか？ 歓迎いたしますよ。あ、今日のお茶は、ローズマリーです」

「いいですね。頂きます」

素直に返事すると、ドクターがニツコリと笑った。

診察は確かに短かった。

が、その後が長かった。

「それで、最近では誰も私のお茶会に付き合ってくれなくなつて。職場の看護婦さん達なんか、みんな冷たいし。あ、そうそう、それでね、もう、聞いて下さいよ。この前なんか……」

お茶の席に呼ばれたことを、軽く後悔した。

私は職場の看護婦さん達の気持ちがよく分かるぞ。

このドクター、見かけはナルちゃん気味の美形なのに、中身はオバチャンじゃん……。

たまらず、ドクターのダラダラ話を遮った。

「ドクター、さっき言ってた話だが」

「ハイ？ あ、刃傷沙汰になりかけた話？ いや、だって、あれはカノジョが独身だって言うから、それを信じただけで……」

「聞いているだけだと、それ、ドクターも悪いヨ……。じゃなくて、チガウ！ その話じゃない！」

「え？ じゃあ、友人のペットの賢い龍が投げたボールを取ってくるっていう話？」

「いや、それは別に賢くもなんともないと思うけど……。犬だってするんだし……。じゃなくて！ 人の感じる気配を、カミサマ達は持っていないという話だ」

「ああ、その話ですか」

「電磁波でなければ、何を感じ取ればいい？ 神は無敵か？ 気配を感じ取れないければ、私に勝機はない」

「呆れた人ですね。闘う気なんですか？」

「恐らくそうなるだろうな」

「誰と、です？」

「……？」

「貴女の敵は、誰なんですか？」

「それは……、見極めている最中だ」

「そうですか。願わくばその中に、九雷が入っていないことを祈りますよ」

「……？　ドクターは元帥に捕まったんじゃないのか？」

「ええ。そうですよ？　長年の友人でもありますけどね。もう、ヒドインです

よ、彼は。私が最も楽しみにしているティータイム中に無理矢理連れて来るんですから」

「だからテーブルごと運んでやっただろう」

その声に、私は緊張感を漲らせて振り向いた。

御大登場……。

昨夜のラフな格好とは違って、濃紺の軍服をキツチリ着込んだ九雷元帥が、い

つの間にかそこに居た。

なんだ、やっぱこの人、軍人なのか。

疑ってたわけじゃないけど、改めてその姿を見ると、なんか違和感がある。

「彼女の治療費の請求書は司令部に回しておきますからね。それと、貴方の行動によって引き起こされた損失分は損害賠償代として当然上乗せしますから。これには、今日の予約患者のキャンセル代と、私の医者としての信用度下落分が含まれます。いいですね？」

ドクターは、遠慮なく捲くし立てた。

「分かっている。ご苦労だったな」

「あ、そのデータタイムセットはそのままにしておいて下さって結構です。しばらく使うことになるのでしょうか？」

(……ナニ？ ナンですと?)

「ああ、そうだな」

「相変わらず人使いの荒い男ですね。まあ、これも腐れ縁ですからしょうがありません。では、私はこれで失礼致しましょう。お大事に、公主」

なんとなく、ドクターに帰って欲しくなかった。

だけど、そうも言えず、代わりに、

「ドクター、お名前は？」

と、聞いてみた。

「おや、覚える気になって下さったんですね。嬉しいです。では、アンソニー・マクスウェル・ラインバッハ・ウインストンフィールドと呼んで下さい」

「……やっぱ覚えるのヤメ」

と、私が言ったそばから、元帥がズバリ言った。

「天真」

「一行でバラさないで下さいよ。ホントにノリの悪い男ですね」

「どうだったんだ？」

「彼女を見れば分かるでしょう。やはり私では無理です。忘れているだけと、消されたのではわけが違うんですよ、九雷」

「……」

元帥は、ドクターの言葉を聞きながら、ずっと私を見ている。

なんで、この人はこうも無遠慮なんだろう。
だったら、私も同じように眼を飛ばすしかない。

沙龍が九雷に連れ去られた直後に登場した松木ゴローが、一言。

「あ、九雷元帥、来たのか」

しかし、木佐がハイパーモードになるには、それだけで充分だった。

ガシッ

と松木の胸倉を掴んだ木佐は、この世のものとは思えぬ形相で迫った。

「どういふことか……説明してもらいましょーか……松木さん……ッ」

「ヤ、ヤダなあ、木佐君ったら。そんなコワイ顔しちや、イイ男が台無しよッ？」

「し、真武君、落ち着け。とりあえず、コーヒーでも——」

「九玄さん、もしかして、貴女もこの男とグルですか……？」

「い、いや、私は知らないぞ？ ……ホントだってば！」

それから、松木の弁解と釈明が始まり、木佐の憤怒が静まるのに有に二時間か

かった。

「だからあ、敵を欺くにはまず味方からってね。基本中の基本でしょお？」
顔は笑ってても、その実、松木は木佐のバツクを彩る『ドス黒くてわけの分からないもの』が怖い。

が、このハイパーモードを食らえば作り笑いすらできないのが普通なので、松木も大したものである。

「飛龍は関わってるのか？」

成り行きでこの場に同席している九天玄女が聞いた。

「飛龍君は、偃月君と一緒に、連絡係をしてもらったんですよ」

「なるほど。偃月のいまのパトロンと、飛龍の背景があれば、西王母様への面会も出来る、ということか……」

偃月のことを気に入って、自分の庵に滞在させているのが西王母の末娘、吉羅公主である。

そして、飛龍は自称家出中だが、れっきとした西海龍王家の一子であり、龍王家の威信というのは仙界でも通用する。

西王母も、その二人に直談判されれば『是』と言わざるを得ないのである。

その上で松木ゴローは西王母にとんでもない提案をした。天界側と密約を結んで、甲斐馨を天界側に売り渡せ、という内容だ。

その内容もさることながら、一般人が国家元首に『敵国と同盟して下さい』などと言うのは、正気の沙汰ではない。

が、実際には、西王母はその密談を承諾したし、結果として天界側は何の障害もなく『黄龍の保持者』を手中にすることができた。

「なぜ僕達を欺く必要があったんだ。事前に言っておいてくれれば……」
言いかけたが、木佐は気付いた。

そんな相談をされたところで、自分は協力できようはずがない。

松木にとっての一番の障害は、どこまでも抵抗する沙龍自身の性格と、沙龍を常に護ろうとする木佐だったのだ。

「しかし、なぜその取引を表ではなく裏でする必要があったんですか」

木佐はそうも聞いた。

「緑麗さんは人気はどうあれ、公的には追放中のお尋ね者だよ。公職に就いている九雷元帥にしてみれば、おおっぴらに匿うわけにはいかないでしょ？」

木佐が渋々の肯定で黙る。

結果を見れば確かに、沙龍は最短で、最も存命率の高い場所に到着できたということになる。

しかし、本当に事前に説得することはできなかったのか。そのことについて、松木は弁解するように言った。

「僕の見たところ、木佐君には腹芸は出来ても、馨君はできないね。いや、断固拒否しそうな気もする。馨君があの方法を知れば尚更ね」

「あの方法って？」

「前に、杏源郷の張桂さんが言った『秘密の方法』さ。九雷元帥も『それ』を知っていた」

「どういふものなんです？」

「それは後で説明するよ」

「九雷元帥は、『それ』を実行しようとしてるんですか？」

「うーん、それが微妙というか、よく分からないんだけど。馨君の寿命に関しては、本人の意思を尊重すると言ってくれたし」

「あの人が？」

木佐は二度会ったことのある男の顔を思い浮かべた。

何を考えているのか分からない、というのが第一印象で、必要なこと以外、いや、必要なことですら口にしないような、そんな人物に見えた。

「彼は元々馨君に害をなす人じゃないんだよ。むしろ、逆だね」

「しかし、九雷元帥は、緑麗さんを裏切った人でしよう？」

「それもどうなんだろうね。何が真実なのか、僕には分からないけど、そこら辺は九玄さんの方が詳しいんじゃないの？」

と、お茶の用意をしている九玄に顔を向ける。

「私にも、真相は分からない。だが、緑麗は……、訣別したはずの情人を憎んだり、嫌ったりはしていなかった。恐らく、先方も、な」

九玄は、崑崙で緑麗と過ごした日々を思い出しながらそう言った。

緑麗のことについては、激しい後悔も深い哀しみもあるが、共に過ごした日々だけは、いまの彼女にとっては暖かな思い出なのだ。

「つまり、松木さんは、九雷元帥は馨の敵ではないと思うんですね？」
木佐が念を押す。

「うん、そう。彼には馨君を殺す機会があつた。なのに、それをしなかつた。この際、彼に『黄龍の保持者』を生かしたまま利用したいという腹があつたとしても、いいんだ。馨君さえ生きていけばね」

納得顔をしていない木佐に、松木は笑顔で言った。

「木佐君、僕が間違っていたら、そのときは、遠慮なく僕を殺してくれていいよ」

そう言われては、引き下がるしかない。

「……馨は、自分にないものを補う意味で貴方を連れてきたわけでしょう。松木さんの今回の判断が、馨自身の信念とか、性格に反するものだったとしても、彼女はこの結果を受け入れるでしょうね。それは、つまり、馨自身の判断ということにもなりますから」

「で、その沙龍を救える方法とは、どういうものなんだ？」

九玄が思い出したように聞いた。

「天界には、緑麗さんの身体が凍結されて、安置されてるんですよ」

もったいぶった言葉だが、九天玄女も木佐も、一瞬で理解した。

「……まさか？」

「そのままさか、です。馨君の魂をその身体に移し変えるという荒業ですね」

「そんなことができるのか？」

「可能か、と言われれば可能だと思う。緑麗さんは処刑されたわけじゃなくて、一万年の刑に服しているんだそう。そして、それが終われば、彼女の魂は元の身体に戻るのだ、とね。そのための『凍結』なんだ」

九玄は、背もたれに完全に身体を預けて、「なんてこった」という顔をする。

「なるほど、大体読めた。それを早めて、緑麗を生き返らせるといのが、あの男の企みだな」

「しかし、それじゃ、馨は……」

木佐は絶望的な顔をしている。

「でね、ここからが重要なんだ。よく聞いて、木佐君。九雷元帥はこうも言った。『甲斐馨』を助けたければ、彼女が生きている間にこの方法を実行しろ——と」

「死んでからだと、どうなるんです？」

「馨君の記憶を持っていない、緑麗さんが目覚めるだろうな」

「なんでそうなる？」

「転生のシステムってそういうもんでしょ？」

「しかし？ 向こうさんは、馨でなく緑麗さんを生き返らせたいんじゃないのか？」

「いや——」

と、松木と九玄が同時に否定した。

松木が、どうぞ、という風に九天玄女に発言を譲る。

「我々は——、恐らく、天界の神々にとつてもそうだろうが、その魂魄の意識が誰なのか、ということとはあまり関係ないんだ。魂魄単体こそが重要、というわけだ」

「つまり、見方が根本的に違う、と？」

「そうだと思うよ。木佐君にとっては、馨君でなきや意味がないだろうけど、天仙界の住人にとっては、それは小さなことなんじゃないかな。だからこそ、彼等には、転生後の姿でもその人だと『分かる』のさ。その人を見るのに目は使っていないんだよ。その上、同じ魂を持つ人には、同じ想いを抱いてさえいる——」

と、松木は意味深に九玄を見たが、彼女はその視線を無視した。

「なるほど。まあ、それはそれで、カルチャーショックだけど、そういうものと理解しておこう。しかし、松木さんが言ったその方法では、馨は納得しないとちゃうんですが」

「だろうね。だから、僕は馨君には内緒でこの計画を進めたんだよ。でも、木佐君、君はどう思う？ それしか方法がないとしたら」

「背に腹は変えられない、か」

「そういうことだね」

「で、我々はこれからどうするんです？」

「僕らも天界へ行こう」

「え……？」

「もし、馨君がその方法を選ばないなら……、九雷元帥は馨君の身体は返してくれると言った。木佐君だって、手ぶらで帰るわけにはいかないでしょ？」

「もし、選んだら？」

「『絶世の金髪美女』と名高い将神の身体で生きることになるだろうね。その際に『どこで』ってのは馨君が選ぶことだろうけど」

冗談のように言う。

「全く……、笑えるのか、笑えないのか、分からない話だな」

木佐も自棄になってそんなことを言っていたが、沙龍がひとまず無事であることと、今後の方針が決まったことで、少しは落ち着いたようだった。

「ところで」

と、バーボンを飲み始めたらしい九天玄女が最後に開いてきた。

「沙龍はどういうタイプが好きなんだ？」

「男ですか？ 僕が見てきた限りでは、不良を卒業したような豪快なタイプが好きみたいですね。育ててくれたお父さんがそうだったみたいで……」

「真武君、陽輝大将には会ったと言ったな？ あのタイプか？」

「ああ、そういえば、日本を出る直前まで付き合ってた男は、まさにあんな感じでしたね。昼間っから繁華街をウロウロしてるような」

「フム、なら大丈夫だろう」

「なにが？」

「いや。こっちの話だ」

九玄は、なぜか笑いを堪えていた。

水雲宮——、とは、よく名付けたものだ。

この宮殿は湖の畔に建っており、私が監禁されている最上階では、たまに雲が足元を流れる。

(ナントカと煙は高い所が好きだというけど、私は特に高い所は好きじゃないぞ)

息が詰まるようなこの空気をなんとかしたくて、そんなことを考えていた。

怪しさ爆発のドクター天真が去って、一見までも冗談なんか絶対言わないような九雷元帥と二人きりにされたわけだが、この人こそ怪しさ全開だ。その性質はドクターとはまるっきり違うが、かつてこれほど自分の警鐘が鳴りっぱなしになつたことはない。

「九雷元帥、昨夜の約束は有効なの？」

「……いいだろう。答えられることには答えるさ」

「貴方の目的は何？」

そう聞くと、間があつた。

頭悪そうには見えないのに、チャキチャキ答えるよ。

「――相期して雲漢はるかなり」（注1）

「……え？」

「――と、詠んだ詩人にすら、俺の心境を斟酌することはできまい」

イチオー、私も中国生まれなんでね、その漢詩と意味くらいは分かるけど…

…。

この人がなんでいまそれを言ったのかが分からない。

謎掛けだとしたら分かるはずもないし、言葉通りの意味だとしたらあまりに配役と場面が違い過ぎる。

力づくで自分を拉致した誘拐犯のセリフじゃない。

（なぜ……？）

ここは、理性的に考えるなら、そういうシーンじゃないはずだ。

「それは、答えになってないのでは？」

「だが、俺はそれ以外の答えは持っていない」

「五言古詩なんか引つ張り出してきて、煙に巻くつもりか。軍人というより、政治家じゃないか」

「フ……、俺は、お前が思ってるほど複雑な男じゃない——」

「それも、答えになってない」

「知りたければ、思い出せばいい。記憶がなくとも、緑麗と同じ魂で感じることはできるはずだ」

「簡単に言ってくれますね……」

なんだろう、この緊張感。

最初に逢ったとき、負けポーズを取ってしまったことが確実に響いてる。

事実、二回目に逢ったときは、完璧に敗北した。

私のことを『打たれ弱い』と言っていたのはマッキーだったけど、確かにそうなのかも。

でも、せめていまは、態度だけでも偉そうにしておこう。

「貴方が、私に何をさせたいのかは知らない。だけど、知っての通り私の命はあ

と僅かだ。次に転生する人に頼めばいい。私である必要はないはずだ」

「そうはいかない。お前でなくては、意味がない。いくら神が不老で永遠の時間があるといっても、三千年という時間は決して短いわけではないからな」

「どういうこと？」

「誰も教えてくれなかったか？ 玉帝は、黄龍が地上に逃れたとき、緑麗と出逢うことのないよう、あらゆる策を講じた。再び、自分に刃向かうことのないようにな」

「それは、九玄娘々から聞いた」

「そうか。では、なぜお前がその呪縛から逃れて、黄龍と出会ったのか、知っているか？」

「いや……」

「お前達が呼ぶ『保持者』とは、それ自体が既に玉帝によってかけられた呪いだ。黄龍の影響力を受ける人間が代々短命なのは、玉帝がそういう遺伝子をヒトに組み込んだからだ」

「なぜ、そんなことを」

「『力』を持つ者の出現を望まないのが、為政者の常だからな」

「……」

「しかし、玉帝は見落としていた。天の調整者として存在する四神をな——。いや、見落としたわけではないのだろう。真武君には逃げられたが、青龍を殺し、朱雀と白虎は飼い殺しにしたくらいだからな。真武君を放っておいたのは、奴の能力が玉帝にとってはむしろ都合が良かったからだ」

「真武君……？ キサさんのことだね。都合がいつてどうということ？」

「知らないのか？ 玄武は執行者だ。黄龍が暴走したときのな」

「『執行者』……？」

私はその言葉こそ知らなかったが、四神の本当の役割というものを本能的に知っていた。だから、驚きはしない。

それに、かつて、董天が言ったことがある。

『これから、貴女は他の四神達に出逢うでしょう。ですが、一つ忠告をしておきます。彼等は黄龍を生かす者であると同時に、殺す者でもある、と——』

「九雷元帥。貴方はいま、青龍は殺されたと言ったけど、それは嘘だ。どんな状態であれ、青龍は生きて、どこかに存在しているはず」

でなければ、董天が青龍の力の一端を行使できるはずがない。

「そうだ。玉帝は気付いていない。青龍が細々と生きていて、黄龍の保持者の遺伝子を書き換えたということにな」

「書き変えたって？ 何を……」

「玉帝が施した『男子限定』というリミッターを外す作業さ。しかし、それは時間にかかる地道な作業だった。ヒトの自然の進化も利用しなければならなかった。だから、三千年という長い時間が必要になった。それに、それだけの時間があれば、誰もが突然変異と考えるだろうという読みもあった」

「……」

「そして、長い時を経て、天帝にとっての誤算が起きた。すなわち、緑麗が『黄龍の保持者』として転生したというわけだ」

「つまり、私は、青龍によって任意に作られた存在？」

「ある意味においてはそうだな」

「……」

もう、飽和気味だったが、まだ疑問は尽きていない。

「黄龍と緑麗が出会うことに、なんの意味がある？」

「黄龍にとっては、緑麗こそがその力を最大限に発揮できる器だ。緑麗の魂魄と身体でなければ、本来の力の一割も引き出せないだろう」

「それは、緑麗が一番最初に黄龍と出会ったから？ インプリンティングみたいなもん？」

「そうだ」

「では、もう一つ聞く。なぜ、青龍は黄龍を助けるような真似をしたんだ？ 四神にしてみれば、中央に居るのが麒麟だろうが黄龍だろうが、どちらでもいいはずだ」

「いい物の見方をするな。確かに、理屈ではそうだ。しかし、実際には、青龍の力を持った者が望んだ通りになった、ということだ」

「青龍の力を持った者……？」

私の知る限り、それは董天しか居ない。しかし——、と、混乱しかけた。

「勿体ぶらずに教えて差し上げればよろしいでしょう」

不意に、背後から男の声が聞こえ、振り向いた私は、天を仰ぐしかなかった。

「董天、貴様——！」

見慣れた細身の男が立っている。

「ご機嫌麗しゅう、沙龍様」

「う、麗しいワケないだろうツニ 知っていたな？ 全て知っていたんだな!？」

お前は——」

これは、一体どういうこと？

いきなり水雲宮最上階に現れた、元教官にして元部下。

「だから言ったじゃないですか、九雷様。私がどつかれるだけだと」

「さすがに衝撃だったか。では、もう一つ教えてやろう。董天は俺の部下だ。三

千年前からな。青龍の力の一部を預けて、地上に送り込んだ。有能な男だ」

「お誉めいただき、光栄です」

「……」

私は、董天を信用していたわけではない。

だけど、八年という歳月を共に過ごして、少しは彼を理解しているつもりだった。

組織の中にあっても常に一匹狼で、表面上は誰よりも従順な忠臣だったが、その実、忠義心などは微塵も無いはずの男である。

なにものにも執着しない、どこまでも乾ききった男。そして、彼には、そんな心の乾きを癒すつもりもないのだ、と。

では、なぜ、彼がいままで『生きて』きたのか。それが、いま、分かった気がする。

「なるほど……。そういうことか、董天……」

（この男の存在か。お前を『生かしている』のは――）

だとすれば、恐るべきは、この董天を操縦している方だ。

（少なくとも、私にはできなかつた）

そして、ふと、董天の襟首を掴んでいた手を離した。

「青龍の力を……。『預けた』……。？」

そして、ゆつくりと、九雷元帥を見た。

(注1) 『月下独酌』李白。やがてはるか遠い天の川で会う約束をしましょう——と
いう意味。

「それですわね、終いには、診察室で掴み合いの喧嘩が始まっちゃいました。私も困ってるんですよ。こういうの、どうにかありませんかね」

日参してくるドクター天真の、日課であるお茶会に付き合い、恋愛相談を受けているのは、勿論、疲れ切った沙龍ちゃんである。

「ドクター……。私もそうゆうドロドロした恋愛に長けているワケではないんですが……」

「おや？ 真っ只中におられると思いましたが」

「なんでやねん」

「九雷をどう思います？」

「どうしてそこに元帥が出てくるんだ」

「いえ、なんとなく」

「……」

「私はね、公主。彼が不憫でなりません」

「なぜ？ 美人過ぎる恋人を失い、その魂抱えて戻ってきたのが貧相で偉そうなガキだったから？」

「いいえ、違います」

と、ドクターは微笑して、伊達だと言っていた眼鏡を取った。

ここからは、真面目な話だ。多分。

「最愛の女性を、その手にかけてなければならなかったからですよ」

「緑麗を殺したのは、元帥なの？」

「ええ。そして、そのことに、三千年間、苦しみ続けている。彼の心の傷は、医者には治せません」

「どうして？ 三千年前に、何があったの……？」

「それは、いずれ分かるでしょう」

「ドクターも元帥も、肝心なことは何も教えてくれないんだね……」
「そうなのだ。」

元帥から一通りの話は聞いたし、あの後も、何度か話の核心をつくような言葉

も聞いたが、三千年前の事件については、不思議と全容が見えてこない。

私にとって、過去のドロドロ事件簿はどうでもいいが、私の死にかけのこの身体をどうにかするヒントは、やはり、その事件の中にあるような気がしてならない。

元帥もドクターも、私が生き延びる方法はあるともないとも言わない。ただ、二人とも、何かを隠していることだけは分かる。

「お茶のお代りはいかがですか？ 今度は、このロイヤル・コペンハーゲンのアー・ル・グレイとフォションのダージリン、七対三の、私お薦めのブレンドで……」

「ドクター、紅茶もいいけど、私、コーヒーが飲みたいよう」

「アレは、野蛮民族の飲み物です！」

「あう……」

しかし、いいんだろうか、私、ここで呑気にお茶してて。

ま、深く考えるまい。

拉致監禁というより、これでもかかってくらいのお姫様暮らしで、特に不自由はないし、あの根暗な九雷元帥さえ来なければ、どこまでも優しいドクターと男気

溢れる陽輝大将がそれなりに楽しい会話を提供してくれてリラックスできるの
で、私はすっかり水雲宮の住人になってしまった。

「よ、沙龍、元気か？」

一度、戦場で見えたこの大将は、フラリとやって来ては、暫くお茶会に参加し
て帰っていく。

尤も、彼が飲むのはロイヤル・コペンハーゲンではなくて、持参してくるアル
コールなのだ。

この人も、色々事情を知っているんだろうけど、私には何も話してくれない。

「開業医のドクターはいいとしても、軍大将ってこんなにしょっちゅう自由行動
していいもん？」

陽輝大将にそう聞くと、豪快な答えが返ってきた。

「俺くらいになると、有事以外、何してもいいんだ」

「そすか……」

天界への道のりは——、険しい。

「我々は陽輝大将麾下、西方軍部隊。侵入者を排除する！」

この軍人達に襲われたのは、何度目だろう。

崑崙の防衛部隊『黄巾小力士』も厄介だったが、所詮ロボットである。それに、崑崙側は本気で排除する気はなかったもので、なんとか撃退できたのである。

しかし、こちらは、恐れ多くもエリート精鋭の天界軍である。たかが四名の侵入者に、大部隊を次々と差し向けてくる。

やっとの思いで撃退——はしていない。野営地に逃げ帰ってきただけだ。

「ちよつと甘くみてたかもね」

疲労困憊といった感じの松木ゴローが呟く傍らで、木佐は『一文字助宗』を納めながら言った。

「それでも、奴等は本気じゃない。どういふことだ……？」

その質問には、偃月が答えた。

「建前上、神は不殺生だから、消耗戦を狙ってるんだろう」

「何度やっても無駄だから、帰れってことか……」

崑崙の九天玄女の屋敷を出てから、数日経っている。

しかし、木佐達は、仙界と天界の境界線すら超えられないでいた。

結果、境界近くに野営地を設置して、天界潜入の試行錯誤をしているというわけである。

途中で偃月と飛龍が合流したが、圧倒的な物量を誇る部隊の前で、二名が四名になろうと、結果に変わりはなかった。

その夜――。

偃月も飛龍もへトへトに疲れ果ててテントで寝ている。

木佐が見回りから戻ると、松木がコーヒーを淹れてくれた。

「悪いね、インスタントだけど」

「いえ、充分です」

木佐は、しばらくコーヒーの湯気を前に何かを考え込んでいたが、ポツポツと口を開いた。

「松木さん、この前はああ言いましたけど、馨が天界で治療を受けているのなら、僕達の所に残るより良かったかもしれない」

「……」

「そして、貴方の手腕は見事だった。先日は、失礼なことを言っすみませんでした」

「いや、木佐君の怒りも心配も当然でしょ。本当言うと、無傷で済むとは思ってなかった。一発くらいは食らう覚悟だったからね」

松木が自分の頬を指差した。

思わず口角が上がる。

そして、しばらくの沈黙ののち、

「……おかしいと思います？」

木佐が言った。

「なにを？」

「僕は女性を女性として愛せる男じゃないし、馨も僕を完全に男としては見ていない。なのに、僕達は一緒に暮らしてきて、いまではこの関係をなんと言ってい

いのかも分からないくらい、お互い、一番近い存在になってる——。それが黄龍と四神の関係だと言われれば、僕は否定したい」

「じっくりこないかもしれないけど、親愛の情、でいいんじゃないの？」

「そうですね……」

「そして、多分、それは、ここの人達も変わらないよ。金も富も必要のない世界で、不老のオプション付きときたら、次に望む物はなんだと思う？ 権力と名声？ しかし、それは飽きるほどの時間があれば、なんとかなるだろう。いつの時代、いつの世も、簡単に手に入らないのは人心——じゃないかな」

「……」

「だから、神や仙道が何によって動くのかと言えば、各々の情しかない。ここ天仙界に渦巻いているのは、そういうものだと思おう。ある意味、僕等の世界よりもウェットだよ」

「前にも、同じこと言っていましたね」

それが恐らく、松木の持論なのだろう、と木佐は思った。

翌日、山道にひよっこり現れたのは、アサルトライフルを担いだ陽輝だった。「よオ、だいぶ手こずってるようだが、大丈夫か？　まだ道のりは長いぜ？」木佐は、先ほどまで馴染みの天界軍の部隊と死闘を繰り広げており、息も上がっている。

「陽輝大将、貴方が指揮しているんでしょうが」

「ん？　バカ言えよ、俺が指揮してたら、一回目で終わってるさ。まあ、テキトーに足止めしとけと、けしかけちやいるがな」

「なにしに来たんです。僕達の疲弊ぶりを見に来たんですか？　それともトドメを刺しに？」

「まさか。仕事してるフリして、サボりに来ただけさ」

「馨は無事なんだろうな？」

「さあ？　いまごろ天真に胃下垂にされてんじやねえの？」

「……？」

「あんだだけ毎日お茶会やってりやなあ……。ああ、それと、その沙龍から伝言

だ。『骨は拾ってやる』だとき。頑張れよ、じゃあな」

そこに、ほぼ同時に駆けつけた偃月と飛龍、そして松木も、陽輝のわけの分からぬ言動に、戦場に居ることを忘れた。

「……」

「……」

「……」

「いまの、どういう意味なんだい？」

「いや、言葉通りの意味だろう。哥々の場合」

「偃月君に一票」

木佐は、脱力して座り込んだ。

「つまり、陽輝大将は敵じゃないってことか」

そう言った松木に、木佐はさつき陽輝から渡されたものを放った。

「そのIDカードで、天界西側の街の一つに潜入できるらしい。毘だとは思わな
いが——」

「ま、行ってみるだけ、行ってみようか。僕の記憶が確かなら、その街は、飛龍

君のお父さんの管轄だし」

私はあまり夢を見ない。

お気楽だと言われようが、夜はぐっすり眠るほうだし、夢の中でしか叶えられないような願望も特になかったんだろう。

だけど、この世界に来てからやけに夢を見る。

色のない夢。

出てくる物も人も完全にモノクロで、時としてそれは形すら持ってない。

だけど、一度だけ、水雲宮に来てから見た夢は、普通の夢のように色も形も明確にあった。

やけに悲しい夢で、そこには深い嘆きと耐え難い苦痛しかないような、人生初にして、夢から醒めたときに自分が泣いてるのを知った。

その夢を見たのは――、いつの夜だったのか。

ああ、そうか。

初めてドクターに会ったとき、あのフェミニストなドクターが心配そうな顔をしていたのは、私の目が赤かったからなのか。

水雲宮でのお姫様暮らしにも、許されていないことが一つある。

それは、この部屋から出ることである。

それ以外なら、たとえどんな我侘だろうが贅沢だろうが許される。

階下に、お手伝いさんというか、秘書のような綺麗なお姉さんが居て、頼んでもいないのに豪華な食事は出てくるし、頼んでもいないのに煌びやかな服が用意されるし、頼んでもいないのに風呂の用意とか、はたまた入浴の手伝い（勿論断った）までしてくれる。

しかし、私には食欲も物欲もないので、そういった贅沢は意味がない。

広い部屋なので、ダンスくらいは余裕でできるが、やはり缶詰状態だと散歩くらいしたくもなるわけで、ドクターにそれを言ったらニコニコと微笑まれ、陽輝大将に言ったらスルーされたので、これはもう、諸悪の根源に直談判するしかない

い、と思った。

あの人はちよつと苦……いや、怖……いや、ノリが悪すぎるから、あんまり話しかけたくないんだけど……。

いや、この苦手意識を克服してこそその沙龍ちゃんだ！

「元帥！」

勝手に人の（？）部屋で寛いで新聞読んでる天界軍総司令官に、気合入れて呼びかけた。

「……なんだ？」

なんでこの人はこうやってへんな間を置くなー。

これが、会話のノリとか流れを思いっきり中断させるもんだから、苦手意識倍増。

しかし、新聞をちゃんと置くところは褒めてやろう。

「外に出たい！」

相変わらず、表情の変わらない九雷元帥は、私がそう叫ぶと、一ミリだけ口の端を上げた。

しかし、彼の言う言葉は決まってる。

「ダメだ」

「……」

身も蓋もないってこういうことなのね。

しかし、ここでめげていては、『蒼血の沙龍』と呼ばれていた私の名がする。

「つまり、私はこの部屋から一步も出られないわけですね？」

「そうだ」

「つまり、一步じゃないなら、いいんですね？」

「……？」

「歩くわけじゃないなら、いいんですね？」

「……？」

こんなしょうもない屁理屈が通用するかどうか分からんが、とりあえず言ってみよう。

「現在、私が自由に動くことを認められているこの部屋は、仮とはいえ、私のテ

リトリ、すなわち、領土ということになる。ここでなら何をしても許される、いわば私の王国だ。しかし、私はこの領土からは一歩も出られない。つまり、それは、この部屋の外が別の人の領土だからだ」

妙な顔した元帥が何か言いかけたので、言わせまいと、続けた。

「元帥、知ってるか？ カミサマ達の住むこの世界じゃどうか知らんが、地上では土地の場合、その境界というのはキツチリ決められる。なぜなら、二次元の上で誰の目にも明らかな線引きができるからな。こっからここまで私んち。こっからここまであなたんち。……しかし、三次元の空は、その定義が難しい。各国の領空や、制空権というものも、国際法による定義を無視して、勝手に決めてる国家も——」

「……」

私が滔々と語るそばで、元帥は笑っていた。勿論、声を立てるようなことはしなかったが。

でも、なんだ。この人も普通に笑えるのか。

「つまり、空の散歩にでも連れて行け、ということか」

うわー、トラが喋った！　トラが喋った！　と心の中ではしやぎながらも、さすがに、元帥がその大トラに乗り込むときには、宙に浮く一瞬が怖くて、彼にしがみついた。

「これで、お前は一步も動かず、散歩ができるということだ」

「……」

なんか、返す言葉がないじゃないか。

ここって、もしかして、感動するシーン？

まあ、この人ったら、いつもは仏頂面してるのに、結構心憎いことしてくれるのね、って、シーン？

「監視付きで散歩したって……」

こんなカワイクネーこと言うつもりはなかったのに、出てしまった。

しかも、語尾がごによごによになってしまったって、なんとも居心地が悪い。

「お前が一人で居たいのなら、俺は降りてもいい。黒焰は賢い霊獣だ。お前の言うことはちゃんときく」

え、いや、それは、なんか、やだな。

「……」

しかし、こういうのって、どう言えばいいんだろう。

(そばに居て)

って？ ストレートに？

いや、そうじゃなくて、なんで？ 拉致犯に？

ストックホルム・シンドローム？

「一緒に……」

その後、言葉が続かなかったが、元帥は大トラから降りるのをやめて、しばらく空中散歩に付き合ってくれた。

空のお散歩が終わって、テラスに戻ってきたとき、なぜか視界が一瞬赤く染まった。

(……!?)

悲痛な叫び声と、色鮮やかな『赤』。これは――、血だ。

しかし、そのイメージは元帥が私をテラスに降ろしたときに、消えた。

(あれ……?)

あの悲しい夢の延長のような、そのワンシーンに心を囚われて、私は思いつきり目の前の柱にぶつかった。

「痛ッ……!!」

のけぞってバランスを崩した身体を、二の腕掴んで支えられたとき、また見え
た。

(あ、まただ——)

映画のワンシーンを、切り取ったような風景。

赤——。

警告の色。

苦痛の色。

それは、いまの私にとっても同じだ。

(誰……?)

真っ赤に染まった風景の中に、『誰か』が居る。

誰なんだろう、と目を凝らして見ようとしたとき、私のその白昼夢は、唐突に終わった。

元帥に呼ばれたからだ。

「……どうしたんだ。大丈夫か？」

「……？」

ああ、なるほど、この人が触れると、あの風景が見えるのか。でも、いまだって、腕は掴まれたままだけど、何も見えない。なにか条件があるのかもしれないな。

「……大丈夫、です。多分」

あれ？ この人、いま、私のこと、なんて呼んだ……？

「緑麗」とは呼ばなかったような気がする。

まあ、どうでもいいんだけど。

上海を発った辺りから、毎日のように血を吐いていたのも、嘘のように治まっていた。

それもこれもドクター天真のおかげで、さすが天界一の名医と自分で言うだけある。

未だに黄龍の氣を感じることはできないが、つい錯覚してしまう。あと三ヶ月の命というのは冗談じゃないか、と。

だけど、ドクターが言うように、恐らくこれは一時の小康状態のようなものだ。だからこそ、動けるうちに動かなければ。

昨日やって来た陽輝大将が教えてくれた話では、ドクター天真は医学会に出席するとかで、本日は休診。

なんとなく、寂しいやらホツとするやら。ここに連れて来こられて以来、毎日ベツタリだったもんで。

ドクターに悪意がないのは分かってるけど、彼は監視役も兼ねているわけだし……。

ということ、これはチャンスなのでは!?

いつまでも、ここでお茶を飲んでいるわけにはいかないのだよ。

……と思ったのに。

テラスから下を覗けば、雲雲雲……。遙か彼方にあるはずの湖面なんか、見えやしない。

一体、何メートルあるんだ、この宮殿は。東京タワーより高そうだ。

しかし、そもそも、この部屋自体に結界らしきものが張られていて、ドアはあ
るのに力技では開けられないんだから、多分、テラスから降りることもできない
んだらうけど……。

「うーん。降りるべきかやめるべきか……」

「やめた方がいいぞ」

その声に、思わず身体が竦んだ。当たり前のように突然背後にかかる声。

気配を持たないというのは、本当に厄介だ。

でも、それだけじゃない。この独特の響きを持つ声に過剰に反応してしまうのは、なぜ……？

ゆっくり振り向くと、背景に溶け込んだかのような九雷元帥が居る。この人は、どこまでも静かな佇まいなのに、なぜこんなに威圧感があるのだろうか。

「元帥……、貴方も暇ですね。仕事、ちゃんとしてんですか？」

「生憎と、ここは飽きるほど平和でね。軍人の仕事がないのはいいことだろう？」

「否定しませんが」

「ここを抜け出したとして、何か計画でもあるのか？」

「いえ、特にはございませんが」

「では、大人しくしていた方がいいな。特に今日は」
「なんで強調するんだ？」

「……」

「……」

ち、沈黙が怖い……。

「元帥。教えて欲しいことがある」

「なんだ？ この前の約束なら、有効期限を過ぎたぞ」

「そう言われても気にせず続ける。」

「ずっと、引っ掛かっていることがある。杏林会の連中も、貴方も、私がここに
来ることを予想していた。それはなぜ？」

「そう。苦勞して遺伝子を書き換えたいがいいが、当の本人が日本で楽隠居したま
まって可能性だって充分あったはずだ。私の性格と、崑崙の实在を信じる背景が
あって、初めて私はここに来る選択をしたはずなのに。」

「それに、なぜ、黄龍と私を出逢わせる必要があった？ なぜいま、なぜ私、な
んだ」

「……」

この人は、私の言葉は聞いてるが、答える気はないようだ。

「貴方は一体、何を考えてるの？」

沈黙に耐え切れず、そんなことを言った。

「結局、聞きたいのは俺の目的か？ 最初の質問と同じだな」

「……」

「言ったはずだ。俺はそんなに複雑な男じゃない」

「貴方は、私でなければ意味がないと言いながら、特に何もさせずに私をここでドクターと遊ばせている。私をここに連れてきたのはなぜ？」

「お前は『なぜ』が多すぎるな……。では、俺も聞こう。なぜそんなに知りたがる？ お前をここに連れてきた理由や目的を知ったとして、どうする？」

どうするって？ そりゃ、勿論……。勿論……？

どうするんだ？

私の目的は最初から一つで、誰かが横から口挟んだとしても、邪魔したとしても、変わらないはずだ。

『邪魔をする気なら叩きのめしたいから』なんて、答えにならない。

「本当は、何を知りたい？」

私が本当に知りたいこと……？ それは、なんだろう。

(う……。結局、何も答えられない……)

やっぱり、ここでも敗北、だ。

結局、私はこの人の掌の上か。

もう、諦めて、テラスに背を預けた。

「元帥殿、私はいつになったら解放される？」

「別に力づくで監禁しているつもりはないが？」

嘘つけよ。最初はどう見たって力づくだっただろうが。

「これでも、余命幾ばくで、やり残したことも少々あるんですが」

「それは俺が叶えてやる。これでも神だ。一つずつ言ってみろ」

「……」

ム。ヤな感じ。

「……何もないのか？」

「願いつてのは、自分で叶えることに意味があるんだ。カミサマにやってもらっちゃ、誰の人生か分からん」

「緑麗、お前は変わらないな。違う身体になって、違う世界に生きているというのに、ここに居たときと、同じことを言う……」

そんな憂いに満ちた表情で言われても……。

「……」

なんだか、これはやばい。意味もなく、やばい。いつの間にか手首を掴まれてるのも、限りなくやばい。

「私は……、緑麗じゃない」

「そんなに認めるのが嫌か？」

「そうじゃなくて。記憶がないって、そういうことだよ、九雷元帥……」

「何をそんなに怖れている？」

「怖れる？ 私が……？」

「俺が怖いのか？」

「……」

そう——。私はこの人が怖い。

初めて会ったときから、鳴りつ放しの警戒音。なのに、目が離せない。

「真武君のところに、帰りたいか？」

「……」

「帰りたいなら——、好きにしろ」

「……」

もう何がなんだか分からない。この人の意図がまるで読めない。

勝手に連れて来ておいて、なぜそんなことを言うの？

なぜ、そんな切ない目で私を見るの？ 私は、貴方の緑麗じゃないのに。

「だが、無理だろう」

「……？」

なぜ、と言おうとして、急に全身に痛みが走った。久しぶりの感覚だ。

そして、咽が熱くなって、咳き込んだ。口を押さえた手の平を見ると、赤く染まっている。

「天真がいなければ、こうなるからだ」

そうか、そういうことか……。

笑おうとしたのに、笑えなかった。

こんな身体で、一体私に何ができるのだらう。何をするつもりだったんだらう。何もできはしないのに。

身体中の痛みが遠くなりそうになって、涙が出た。

自分のあまりの無力さに泣いているのか、咳き込む度に走る痛みで泣いているのか、それとも、どうしたって避けられそうにない死が恐くて泣いているのか、もう分からなくなっていた。

その場にうずくまるように座り込んで、元帥の手が背中を撫でるのを感じながら、必死に痛みを耐えた。

「少し我慢しろ」

元帥は、ドクターと同じように、私の額に手を当てた。

「……俺にも少しだけ出来る」

「……？」

ゆっくりと、でも確実に細胞の一つ一つが癒されていくのが、分かった。

激痛がただの痛みになり、そして、最後には完全に消えた。

(なんだろう……これ……)

妙にふわふわした心地よさに包まれていた。

それは、体内の氣の巡りが整えられたせいなのか、この人の腕に抱かれているせいなのか。

青龍は制御するもの——と、教えてくれた娘々の言葉は本当かもしれない。

これは力づくの支配ではなく、優しいコントロールだ。

治療行為と信じて、というのは、半分嘘かもしれない。

額にキスを受けながら、この人と共有していたはずの前世の記憶を、思い出せるのなら思い出したいと、初めてそう思った。

「俺が何を考えているのか、知りたいんだろう？」

「……」

「ここに居れば、いずれ、分かる」

「……違う」

「……？」

やっと分かった。

私が本当に知りたかったもの。

この怖さと居心地の悪さの正体なんて、とっくに分かっている。

「いずれでは困る。私に残された時間はあまりない」

だからなのか、こんなことをしてしまうのも。

ズツとする程冷たい、この人の頬に触れてみた。

「いま、知りたい」

「……」

「私が知りたいのは、貴方自身——。貴方の全てを、いま、知りたい」

私には、記憶も実感もないけど、分かる。感じる。

この人に恋をしていた女性が、確かに、私の中に居る。

だったら、それを、私、甲斐馨は、ぶち壊すしかない。

夢——？

違う。

これは、誰かの記憶？

消されたはずの緑麗の記憶……？

風がよく通るテラス。

よく知っている場所。

ここは、いま、私が居る場所。水雲宮、最上階。

「緑麗！」

九雷元帥の声がして、振り向いたその女性は、私じゃない。流れるような金髪で、私よりもずっと背が高い。

「九雷！　ここだ！」

す、すげー美人……！

な、なんだけど、ちよつと待て。その手にしてるの、酒瓶か？

しかも、酔っ払ってるのに、テラスに片足抱えて座っていて、もう片足は宙にブラブラさせてるよ、この人。

この下、ン百メートルってあるんですけど……。

「なにやってるんだ、この酔っ払い。落ちるぞ」

「地上をな……、『視て』いた。なかなか楽しそうだ」

ここからじゃ、見えないけど？

「百年も生きられない人間が、か？　それを憂いて、みな、仙道になりたがるというのに」

「そう。なのに、仙道達ときたら、ちつとも楽しそうに見えないんだよなく、コレが。何が悲しくて毎日毎日辛い修行を積んでるんだ、奴らは。Mってヤツか？」

お気楽にそんな会話をしているけど、九雷元帥は気付いている。

緑麗の手にした酒瓶は、水雲宮に別れを告げるものなのだ、と。

「緑麗、もう決めてしまったのか」

「貴方に遺すものは何もないが、この水雲宮は貰ってくれ。他の奴に使わせたくはない」

「ああ……」

痛い……。

これは、誰の痛み……？

別の時、別の場所――。

「妖怪討伐はつまらんからな。しかも、将神になってからこっち、単独行動で気は楽だが、陽輝と遊べないから余計つまらん。出世なんてするもんじゃないな」

さつきよりもちよつと若い緑麗がボヤいている。

この人、ホントに快樂主義者というか、個人主義者みたいだ。

「誰もが羨む頂点をつまらないと斬り捨てるのは、お前くらいのものだな」

九雷元帥は呆れてはいるものの、いつものことだ、と思ってるらしい。

「地上視察部隊なんてのを作りたいと言ったんだが、色々政治的問題があるらしく、却下された」

「地上にこだわるんだな。何がそんなに面白い？」

「西海龍王のところの末っ子を知っているか？ 暴れん坊の問題児だが」

「敖開か。この前、お前に喧嘩を売ってきたそうだな」

「あいつはちよくちよく地上に遊びに行っているらしい。何が面白いと聞いたら、知らないものがいっぱいあると目を輝かせていた。あいつが暴れるのは、狭い天界に居るせいじゃないのか？」

「お前も、そうじゃないのか、緑麗」

「うーん、私は別につまらないとは思ってないけどな。床上手な情人と酒を酌み交わせる戦友が居れば、どこだってパラダイスだ」

別の時、別の場所――。

いきなり、ヴィジョンがブラック・アウト。

「おやめ下さい！ 陛下二 近寄ってはなりません二」
戦装束の緑麗が叫ぶ先には、黒い空。

あの影は……、何？

闘っているのは、黄龍と麒麟？

漆黒とも言える暗闇の中で、姿ははっきり分からないけど、輪郭が朧気に見える。

「両者がまともに衝突すれば、天界そのものがなくなるのだぞ！ お前も見たであらう、緑麗！ 奴らは神獣などではない！ 厄災をもたらす魔獣よ！ あの闘いは止めなければならぬ！」

「ですが、私は陛下を死なすわけには参りません！」

陛下って、もしかして、天帝陛下のこと？

「バカな！ 何のための将神よ！ 朕を守るのは後にせよ！」

「……チツ、分かったよ。九雷ッ、陛下を頼む！」

「よせッ、緑麗！ 無理だ！」

「勝機はある！ 奴らが疲弊したところを狙って倒す！」

「よく言った、緑麗。お前一人を闘わせはせぬ。一方は、朕が暫し取り押さえ
る！」

「ひっこんでろ、青二才！」

「なに抜かす、このアル中が！」

えーつと……。状況がよく分からない……。

誰かの途方に暮れた感情だけ、流れ込んでくる。

ここは……。病院？

「よ、緑麗、死にかけたんだってな。どんな気分だい？」

「御覧の通り、ファンには見せられない姿だ」

ボロボロの緑麗と、これまたちよつと若い陽輝大将……。かな。

「しっかし、久しぶりにシラフのお前を見たなあ。なんだ、九雷、お前は無傷
か」

「お前は見舞いに来たのか、冷やかしにきたのか。とつとと帰れ」

元帥は本気で言っていないよ。

だって、久しぶりに三人が揃って嬉しそうだもん。

「帰るのは貴方もですよ、九雷。これ以上、重症の怪我人の病室で騒がないで下さい」

あ、ドクターだ。

昔は芝居がかった感じがまったくない普通のお医者さんだったんだね。

また、別の場所――。

「麒麟も黄龍も、お互い殺し合うという本能しかない。それは、生存本能という意味においては正しい。どちらかが天を制するようになっていくのだ」

御簾の中の天帝らしき人が言った。

薄暗くって顔がよく見えないけど。この声は、確かにそうだ。

「今はいい。この身体の中に取り込んだ力を抑えていられるうちはな。だが、い

ずれ、朕も緑麗も、麒麟と黄龍に喰い殺されるであろうな」

喰い殺される……？

「陛下、四方将神達はどうかされるおつもりです？」

九雷元帥は居るのに、緑麗は居ない。

ということは、これは、緑麗の記憶じゃない……？

「彼らは、元は黄龍の一部。朕にとっても、麒麟にとっても、あまり歓迎すべき存在ではないかもしれぬが、しばらくは様子を見るしかないな」

「御意」

一転して、鮮やかな水色と黄色の風景。

青空と、足元に広がる黄色い花だ。

その風景の中で、九雷元帥が陽輝大将と話している。

黄色い花の絨毯が、この二人にはあまりにも似合わない。

「陛下は、緑麗を追放したいらしいな。一体、あの二人に何があつたんだ。俺に

は信じられねえよ。喧嘩しつつも、仲良かったじゃねえか」

「あの二人を悩ます忌まわしい力のせいだろう」

「麒麟と黄龍か。とんでもねえもん抱えちまったもんだぜ。だが、緑麗が本気の喧嘩をするつもりなら、俺は当然、緑麗につくぜ。九雷、お前はどうすんだ」

「陽輝。困ったことに、緑麗はそれを許してくれないだろう」

「なにを言ってるんだ？ お前は……」

「苦しい——、と言っているのは、誰？」

心は決まっているのに、迷ってる。苦しんでる。

『彼』の願いはたった一つなのに。

「再び、あの闘いを起こすことだけは断じて避けなければならない。そのために、朕は緑麗を討つ。九雷、お前は好きにしろ」

「陛下、私は天界軍元帥です。その仕事を致しましょう」

緑麗も、苦しんでる。

でも、この人に迷いはない。

「九雷、災いとしてでなく、この力を生かせるときは必ずくる。ただ、それには長い年月がかかるんだ。分かってくれ」

「緑麗、俺は、お前を失うつもりはない」

「心配するな。私はいずれ貴方のところに戻ってくる」

「……」

「そんな顔をするな。私が地上に行ってみたかっただのを知っているだろう？」

「緑麗、俺がお前を止める、と言ったら——、どうする？」

「そうだな。それも、いいだろう。貴方の立場からすれば、当然だ」

「……」

「だが、私は黄龍と共に天界を去る。麒麟とぶつかるわけにはいかないんだ。それは、分かってくれ、九雷」

「……」

苦しいよ。

もう、見たくない。

「許せとは言わない。だが、他の者に、手をかけさせるわけにはいかないからな」

「お前に殺されるのは本望だ。……また会おう、九雷」

そして、きつと、あのシーンになる。

緑麗の血で真っ赤に染まった視界。

もうやめて。

この記憶は辛すぎる。

分かったよ。もう、分かった。

九雷元帥、そんなに悲しまないで。

これは、緑麗の記憶じゃない。貴方の記憶なんだね――。

明け方、去り際に元帥が言った。

「逃げようなどと考えるな。大人しくここに居ろ」

「私はどうせ貴方からは逃げられない。逃げる気もない」

「そんな分かりやすい嘘をつくな」

「嘘？　嘘じゃない……」

「なら、お前は全てを捨てて、俺のところに来るのか？」

「……」

「俺を選べ、沙龍。それしかお前の生き延びる道はない」

その命令が、本当は懇願の意だということが分かるのに。

「それは脅迫……？」

そう聞いたら、彼は怒って出て行ってしまった。

あれじゃ、単なる駄々っ子じゃないか。

なのに、ストックホルムを通り越して北極点まで行ってしまったような私は、
そんな九雷元帥を可愛いと思ってしまうた。

……重症だ、私。

「すみませんね、昨日は休診にしちゃって。お体、大丈夫でした？」

「まあ、なんとか……」

いつものように脳天気に登場したドクターとは対照的に、いつになく意気消沈した私。

「ちよつと辛そうですね。では、早速、……？」

「どしたの？ 変な顔して」

ドクターはしばらく黙ってから、声を落として聞いてきた。

「……ちやんと、合意なんですか？」

「な、何ッ？ な、ナンのハナシッ？」

思いつきりキョドってしまった。しかも、声、裏返ってるし……。

「隠してもムダですよ。だって私、医者だもん」

「ナント!？」

触れるだけで分かるのか、天界の名医は!?

「まあ、でも守秘義務というモノがありますので、ご安心を。プロの誇りにかけても、患者さんのプライバシーについて他言するようなことは致しません」

「……」

「ええ、間違っても、『ちよつとおく、あの二人、とうとうデキちやったわよ』、なんて、陽輝にチクったりしませんので」

「ドクタ~~~~」

「というのは勿論、冗談です」

「……あう」

「むしろ——」

う……。これは真面目バージョンのドクターだ。

「貴女には感謝してます。彼を暗闇から救えるのは貴女だけですから」

「救えないよ。私には。だって……」

だって、あの人は——、私を愛しているわけじゃない。そう言い掛けて、飲み込んだ。

だけど、ドクターには、いま私が言いかけた言葉が伝わってしまった気がした。

「ほほうー？ 数日前の貴女からは考えられないような展開ですねえ。一体何があつたんです？ というか、あの九雷がどうやって口説き落としたんでしょう？ 後学のためにも、是非聞かせて頂きたいものですね」

「あ、あのー、ドクター、お茶にしません？」
苦し紛れにそう提案した。

本日のアフタヌーン・ティーは、カモミールを浮かせた、ハーブ茶。
心を落ち着かせる効果があるとかいう話だけど、ちっとも効かないじゃないか。

ドクターは、さつき以上のことは詳しく聞かなかつたけど、なぜか嬉しそうだった。

なんでやねん。

私はそれどころじゃないってのに。

「変わった味だなあ、カモミールって……」

えーと、私は、ここに何しに来たんだっけ？

お茶会？

一夜の情事？

まあ、それでもいいんだけど。

「公主、辛いんですね……」

「……？」

ドクターの言葉で、自分が泣いてることに気付いた。

ああ、とうとう涙腺までイカれたか。

こんなボロボロの身体では、大人しくここで余生を終えるしかない。

「辛くはないよ……。身体の痛みも、誰かの身代わりにされることも、それぐ

らいは大丈夫なはず」

「いいえ」

ドクターは、やけにキツパリ言った。

「辛くないはずないんですよ。私が思っている通りなら、貴女がいま苦しんでいるのは、呪縛のせいですから」

「呪縛……？」

ドクターが差し出ししてくれた真つ白なハンカチを鼻水でベタベタにしながら、聞いた。

「元帥が言っていた、黄龍の保持者達に科された『短命』という呪縛？」

「それもありますが、貴女には緑麗に科された罪の二重苦がある」

「緑麗の……罪？」

「緑麗は、謀反の罪を着せられ、地上に落とされた。短い人の生を、気の遠くなるような時間、繰り返し返さなければならぬのが、彼女に科せられた罪——」

「それが、罪になるの？」

「まあ、人の感覚では、そう思うかもしれませんがね。しかしね、公主。私には、緑麗がそんな大罪を犯したとはとても思えないんですよ。謀反は確かに大罪ですが、あの人には何か他の思惑があったような気がしてならないんです」

「他の思惑？」

「ええ。私が勝手にそう思うだけなんですけどね」
「そういえば、誰かも同じようなことを言ってた。」

あ、九玄娘々か。

「ところで、公主は、九雷の生い立ちをご存知ですか？」
と、ドクターが急にそんなことを聞く。

「ううん？」

「彼はね、先々代の天帝の私生児です。天界での身分はとても微妙なんですよ」
「じゃあ、いまの天帝とは親戚？」

「遠縁ですが、血は繋がっていません。ですが、今上帝は、九雷を兄のように慕ってしましてね。そのご執着ぶりは、一部の側近達の憂慮の対象になってます」

「え？　つまり、そうゆうーコト……？」

そうか。あれは男に惚れられるタイプか。

そういえば、どっちかつつーと、キサさん系だよな。

「九雷が今上帝をどう思っているのかは知りませんが、昔の緑麗と昊……、今上

帝は、九雷を巡っての恋敵だったわけです。これがまた凄いのなんのって。子供のような喧嘩するんですよねー、あの二人は」

「ホ、ホウ……」

「酷いときは物投げちやったりしてね。今日は二人がどんな喧嘩をしたのか、つてのが給湯室のメインの話題でしたから」

「会社のOLさんかい……」

そんで、きつと、ドクターは話に参加しがてら、そのOLさん達を口説いてたんだな。分かります、分かります。

「でも、私が見るに、二人とも、心の底ではどこか信頼し合っていたんですよ。九雷を出汁に喧嘩するのを楽しみにしている、そんな風にも見えませんでしたね」

ああ、その一部が、夢で見たシーンなのか。

確か、九雷元帥の記憶の中で、陽輝大将もそう言っていた。

「だけど、緑麗は叛乱を起こした。野心などこれっぽっちもない、自分さえ楽しければ後はどうでもいい、唯我独尊のあの緑麗が——」

「うん……」

「そして、叛乱は鎮圧され、昊は緑麗に極刑を言い渡した。口さがない連中は、嫉妬に狂った天帝が緑麗を毘にはめて、流刑にしたと言っています……。真相は分かりません」

「私も……分からない。緑麗がなぜ、芝居を打ってまで、叛乱を起こし、わざと地上に落とされるようなことをしたのか——」

「貴女はもう、そこまで確信を持ってるんですね」

「うん……」

だって、九雷元帥の記憶の中で、緑麗は言っていた。

『だが、私は黄龍と共に天界を去る。麒麟とぶつかるわけにはいかないんだ』

「知りたいですか？ 三千年前に何が起こったのか。その真相を」

「そりゃ、勿論……」

「それは、昔の、つまり緑麗としての記憶を取り戻したいということと同義語ですか？」

「……？」

「とても大事なことです。よく考えて下さい」

「緑麗の記憶を思い出したら、いまの私の記憶はなくなっちゃう、ってこと？」

「いえ、それはないでしょう。記憶が増えるだけだと思います。ただ、貴女の緑麗としての記憶は、今上帝によって消されてしまったんです。だから、もし取り戻したいのなら、それは消した本人に戻してもらおうしかないということになります」

「知りたいだけなら、誰か、真相を知ってる人に聞けばいいだけ——ってことか。でも、緑麗が何を考えていたのかは、本人でなければ分からないよね？」

「そうですね」

「うん……。難しいね」

「普通、転生した魂は前世を覚えていないわけですから、わざわざ完全消去しなくてもいいのに、敢えて昊はそれをやった。そこにも、何か意味があるような気がしますね」

「うん、そうだね……。それ、元帥の考えだね？」

「え？」

「ドクターが初日に言ってた、消されているのと忘れているのとは違うって話は、そういうことでしょ？」

「お見通しでしたか。そうです」

「そんなに会いたいのかな、やっぱり、昔の恋人に……」

「そういう意味じゃないんですよ」

「……？」

「恐らく、九雷も知らない事実があるんでしょう。緑麗は結構、スタンドプレイが好きでしたから。九雷は、それを知りたがっているだけだと思いますね」

「なんか、色々滅入ってきたなあ。」

「私は、やっぱり、昔の恋人の身代わりってことか。まあ、いいけどね。」

「ダメですよ」

「……？」

「ドクターは、もしや読心もできるのか？」

「最初に会った日に、言いましたよね？ 私は貴女の敵じゃない。貴女がもし苦

しんでいるなら、それを救いたいと思っている、ただの医者です」

「ドクター……」

につこり笑うドクターにつられて、私も笑ってみた。だけど、すぐに、それは落涙になった。

「公主……」

そのまま、ハラハラと涙が落ちた。

「ドクター、私はいままで誰かを怖いと思ったことはなかった。だけど、あの人だけは違った……。その意味がやっと分かった。こうなると分かってたからだよ。あの人を愛してしまおうって——」

「九雷が聞いたら泣いて喜びそうですね……」

「どうして？ 私はそんな弱い人間だった？ こうなることを怖れて、なのに、結局流されてしまうほど弱い人間だった？ 前世の自分なんか覚えてもないのに、どうして……？ あの人の人に触れたって、私には何もできないのに。ううん、そもそも、これは私の想いなの？ それとも、緑麗の想いに引きずられてるだけ？ 分かんないよ。もう、分かんないよ、ドクター……」

「貴女の心は、引き裂かれたままなのです。あのときから……」

「え……?」

「いえ。こういうのは、基本に立ち返りましょ。公主、落ち着いて。なにか食べたいものはありますか？ 最近、ちっとも食事してないでしょう?」

「だって、食欲が……」

「なら、少し前のことを思い出して下さい。美味しいと思ってたものは?」

「ああ、それなら、キサさんが作る茶碗蒸し……」

「真武君のことですね。分かりました。私が、彼をここに連れてきてあげましたよ」
う

「え……?」

「貴女が泣くのを見るのは、この上なく辛いですからね。その心を引き裂いてしまった一人として——」

24 偉大なるキサさん

怪しげな白衣の男と陽輝大将に拉致され、いきなり連れてこられた先には、泣き腫らした目をした親友がポツンと、座っていた。

ドクターが「ちよつと待ってて下さいね」と言うので、なぜか馬鹿正直にその場を動かずブーツとしていた。

泣き疲れた感もあつて、ちよつと動きたくなかったというのもある。

一人取り残された水雲宮は、当たり前前と言えば当たり前前だけど、やけに静かだった。

「……えーと？」

そして、すぐに騒がしい声が聞こえたな、と思つたら、ドクターと陽輝大将を両脇にして、我が相棒が姿を現した。

捕らわれた宇宙人、というよりも「お願いして同道してもらいました」って雰
囲気があるのは、気のせい？

いや、気のせいじゃないな。

なぜか、私を見て顔色変えたキサさんが、詰問体勢で二人に事情を問い質して
いる。

その問答が終えた場合に、
「なるほど。よく分かった」

キサさんが淡々と言うので、ドクターと陽輝大将はホツとしたようだった。
が、それは単なる前触れに過ぎなかった。

「……で？ 馨を泣かしたのは結局どいつだ？」

いつのまにかキサさんの背後には、紫色のドス黒いオーラが立ち昇っている。
あー……。やばい。

「ちつとも分かってねえじゃねえか！ ホントに俺の話、聞いてたのかッ？」

「か、変わってないんですね、真武君……。とすると、この後に来るのは……」

「だから言っただろ!? コイツだけはやめようぜ、って！」

「に、逃げますか……」

二人が蒼白になって踵を返そうとしたので、咄嗟に言った。

「キ、キサさん、それより、私、いますごく食べたい物があるんだけど……」

その言葉で、キサさんの超邪悪オーラが一瞬で消えてくれた。

「茶碗蒸しか？」

「うん」

「陽輝大将、台所を借りる」

「ああ、もう勝手にしてくれ。つつーか、ここは俺の家じゃねえんだがな……」

そうして、キサさんが完全にドアの向こうに姿を消した途端、陽輝大将とドク

ターはその場に沈み込んだ。

「はあ……、無傷で済んだか。全く、あいつは敖開より性質悪いぜ……」

「こッ、殺されるかと思った……」

カミサマにこんな思いをさせちゃう、我が相棒に乾杯……。

「助かったぜ、沙龍」

「どういたしまして。ところで、キサさんって、前世もああゆう人だったの？」

「まあな。ちなみに、俺達は今のを『暗黒大魔王』と呼んでいた」

「……プ」

と、思わず笑った。

「良かった。少し笑えるようになりましたね」

「……うん」

やっぱり、心療医としてもこのドクターは優秀だ、と思った。

「ドクター、でも、勝手なこととして大丈夫？ 元帥は怒るんじゃないかな……」

「大丈夫ですよ」

と、微笑む。

「沙龍？ ……何かあったのか？」

少し驚いた口調の陽輝大将。

まあ、確かに、二日前の私だったら、いまのセリフで元帥を主語にはしなかつただろうからな。

陽輝大将のこの反応は無理もない。

「うーんと……」

ちよつと誤魔化しておこう。

「ところで、陽輝。貴方はここ数日、境界線で真武君達と遊んでいたから知らないでしょうけど、こちらは色々ありましたね」

ドクターが助け舟を出してくれる。

「敖閨殿が晶都を開放したのは、どういうわけなんです？」

「クソ面白くねえ地味な地方自治体が何しようよと、俺の知ったこつちやないが？」

「確かに地味で見落としがちですが、あそこは私も若き日を過ごした学園都市ですからね。ちよつと気になってるんですよ。今回のことで、仙界からの留学生がなだれ込むんじゃないかって、噂ですし」

「西王母の差し金じゃねえのか？ 九玄姐さんとあのオッサンはデキてるって話だし」

「さあ、どうでしょう。あの日和見のオバ……ご婦人が噛んでくるとは思えませんが」

「……で、結局何が言いたい？」

「別に何も。貴方の所には、何か変わったことでもあったかな」と

「お茶会の招待状は届いてねえぞ？」

「ならよろしいのです」

「おいおい、面白えことになってるなら、俺も参加させるよ？」

陽輝大将はドクターに言ったのだが、ドクターは促すように私に視線を向けた。

「……？」

陽輝大将は不審顔だが、実は、私もドクターの真意が分からない。

もしかして、と思い、少し慎重にドクターの表情を覗いた。

すると、ドクターは、にっこり笑って言うてくれた。

「私は貴女の味方ですよ」

「……うん」

ということは、私が何かするしたら協力してくれる——ってことか。

この人は、九玄娘々と同じで、緑麗に何かしらの負い目があるんだな。

さつき聞き流した言葉にも、はつきりとそれがあった。

なら、ここは有り難くそれを利用させてもらおう。

「陽輝大将、退屈なの？」

わけの分からない顔をしている陽輝大将を見上げて聞いた。

「基本的に、天界は退屈なところだぜ？」

「そっか……。もし、私と九雷元帥が同時にパーティーに誘ったら、どっちに来る？」

それは、少し意地悪な質問だったかもしれない。

だけど、陽輝大将はあっさりと返した。

「三人一緒するのはダメかい？」

「うん。そうしたいね……」

思わず溜息をついた。

だって、それが出来なかったから、三千年前に悲劇が起きたんじゃないの？

「なんの話だ？」

そこに、キサさんが大きな鍋をさげて戻ってきた。

「え！ もうできたの!？」

鍋からは、ひどく懐かしい、あのホカホカのいい匂いがしている。

お腹が空いていたのを思い出した。

そういえばここのところ、薬湯以外口にしていなかったような気がする。

「食器が見当たらなかったんで、鍋で作った。全部食っていいぞ」

「いや、さすがに、それは」

といっても、恐らく、あの鍋の中身の半分以上は私の胃に収まる運命にあるだろう。

「さっきの話だけだね」

と、さんざん飲み食いした後で、思い出したように陽輝大将に言った。

勿論、あの量の茶碗蒸しを全部一人で食べたわけではない。四人で仲良く分けただのだ。

「どの話だ？」

爪楊枝くわえて気軽に話してるけど、このオッサンだって、まだ腹は分らない

い。

いまのところ「俺は仕事以外じゃ、単なる暇を持て余した中年」という自称のおかげで、最初に私と会ったときのことなんかスッパリ忘れてるようだ。

この人が水雲宮によく来るのも、あの秘書のような綺麗なお姉さんを口説いてる最中だから、という建前なんだか本音なんだか分からない理由がある。

だけど、私はいつも自分の直感を信じることにしている。

「退屈なら、退屈じゃなくしましょう、という話」

「ほー……」

と、陽輝大将の目がいい感じに笑った。

「どっちにしろ、センチメンタル・ジャーニーに来たんじゃないって、思い出したわ」

「つまり、どっかに喧嘩売りに行くんだな？」

「そうだね、まさにソレ」

そんな話をしているそばで、一番この展開を止めそうなドクターは、微笑んでいる。

やっぱりドクターは、最後まで私の味方だ。よし。

「多分、陽輝大将もドクターも、立場が危うくなると思うから、私に協力しろとは言わないけど、邪魔はしないでくれると有り難い」

「……小龍」

「……？」

一瞬、自分が呼ばれたのかと思った。

しかし、陽輝大将が呼んだのは、鳥——ではなく、小さな龍で、それは開け放ったテラスから飛び込むようにして部屋に入ってきた。

うわー、うわー、ホンモノの龍だ！

鳩サイズだけど、間違いなく本物だ！

「こいつはな、『小龍』ってんだ」

陽輝大将が、ムニューっとその仔龍の口を両手で思いっきり引っ張ると、その仔龍は怒って攻撃をした。

殺意はないのだろうか、ジャレてるようにも見えない。

「痛ッ、痛えッて、お前、いつになったら懐くんだよ！」

いや、そういう扱いしてたら、懐かんでしょう……普通……。

彼（彼女？）は頭突きや蹴りで攻撃しているが、あれじゃ、キサさんのハリセ
ンの方がまだ威力あるわ。

小龍の首をムンズと掴んだ陽輝大将は、

「こいつはな、まだ幼龍で、飛ぶしか能のねえ赤ん坊なんだが、緑麗のペットで
な。アイツが去って以来、ずっと俺が預かってた。ホレ、ご主人だ、行ってこ
い」

と、気軽に放り投げてくる。

……って、ちよつと！

しかし、放り投げられた小龍は、自ら私の懐に飛び込んできたようだった。

「きゅーん！」

「お前には懐くだろ？ やっぱ分かるんだな」

ぬいぐるみのようなつぶらな瞳で擦り寄ってくるもんだから、思わず抱きとめ
てしまった。

「一応、ここに居る間は、お前さんに返しておくぜ。だがな、預かってた間のそのいつの餌代たるや、大した額だ。なにせ三千年分だからな」

「も、もしや、払えと？」

「いや、そんな野暮は言わないが、ギヴ・アンド・テイクで行こうぜ」
「……？」

「沙龍、お前が何か面白い催しをするってんなら、俺もご招待してもらおう。だが、俺は“三人で一緒のテーブルで食事”ができねえなら、パーティーには行かねえ。俺の言ってること、分かるか？」

「うん」

分かるとも。

「じゃあ決まりだ。時間と場所が決まったら、教えてくれや。そいつを連絡係によこしてくれ。一応、半分くらいなら言葉も分かるみてえだからな」

あ、そのためにこの子を呼んだのか。

「頼める義理じゃねえが、お前しかできねえんだ。こればかりはな」

その苦しげな言葉の裏にある背景を、私は具体的には何も知らない。

だけど、陽輝大将の想いは分かる。

この人にとっては、緑麗も九雷元帥も同じくらい大事だということだ。

「分かってる。頑張るよ」

よし。陽輝大将、ゲット。

キサさんが、最後に聞いた。

「で？ ……どこに殴りこみに行くんだ？」

「火雲宮。玉座の間——」

真剣な顔をしたドクターが、いままでにないくらい真剣に言った。

「公主、お分かりかと思いますが、貴女にあまり時間はありません。お友達と合流して、それから火雲宮へ行くというなら、三日が限度です」

「分かった」

「九雷はどーすんだ？ 絶対、やすやすと逃がしちやくないぜ？」

陽輝大将がそう言うところを見ると、あの人は敵じゃないけど、まだ味方でもないってことか。

「さて、どうしましょう……。ちよつと難しいですが、司令本部に詰めざるを得ない状況でも作りますか」

ドクターがあっさりと言う。

「コネを使つて、か」

「気は進みませんけどね。そんなこと言つてられる状況でもなさそうですし」

まあ、そこら辺はうまくやっってください。

「あ、忘れてた」

今度はキサさんが、自分の刀袋から私の『備前長船秀光』を取り出して渡してくれた。

長さ二尺三寸の名刀。岡山のかつ飛んだ祖父ちゃんがくれぐれも折るなど念を押し持たせてくれたものだ。

「あ、持ってきてくれたんだね、ありがとう」

「それと、これも」

差し出されたのは、鞘に洒落た細工が施された小柄である。

私がいつも背中のベルトや帯に仕込んである小刀だが、これにはちよつとした思ひ出がある。

この小柄は、キサさん自身がくれたものなのだ。

お互い、そのときのことを思い出したのか、黙ってしまった。

普段ならそんなこと絶対言いそうにないシャイなキサさんが、これをくれたときは、澀みなく言った。

『これを使う機会は無いに越したことはないが、もしあったとき、馨を守ってくれることを祈って』

——と。

我ながら、泣かせる話だ。

それ以来ずっと、私はこれを常に携帯していたが、使ったことは一度もなかった。

そう、あの夜までは。

あの夜、私はこれを、九雷元帥に突き刺そうとして、失敗した——。

小柄を使ったのも初めてなら、誰かを殺せる状態で殺さなかったのは初めてだった。

多分、あのとき、私はどこかイカれたんだ。

「あまり役には立たなかったみたいだけどね……」

キサさんが寂しそうな顔をするので、

「一回でお役ご免は可哀想でしょ。いつかは役に立って」

そう言って、背中の帯に仕込みなおした。

「とりあえず、早いところマツキーと合流しよう」

そうだ。

私にはあまり時間がない。

天真が、陽輝に「真武君を拉致しに行こう」と持ちかけに行ったとき、二人の間にはこんな会話があった。

「ついでに、そろそろ教えてくれませんか。貴方がたの目的を」

「予想はついてんだろ？ 九雷の目的は最初から変わっちゃいない。緑麗を復活させることさ。だから、いまの沙龍はなんとしても確保しておくつもりだろ」

「でも、公主は記憶を失って、心が分かれたまま、苦しんでるんですよ？ 見るに忍びません。九雷はそれを放っておくつもりなんですかね？」

「いや、どうだろうな。アイツも……、迷ってんじやねえかな」

「そうですか」

「まったく。だから、あんまり深くは関わるなと言ったのによ」

「理屈だけで動けたら、誰も苦勞しませんよ」

「ま、そりやそうだが」

「貴方はどうなんですか？ 陽輝。貴方がた、と聞いたのに、上手く逃げましたね」

「俺は……。さて、どうするかねえ……」

水雲宮最上階にギツチギチに張られた結界を、ドクターに解除してもらって（つうか、出来るんなら早く教えてよ！）、久しぶりに「外」に出た。

かくして、そこで待っていたのは、予想通りの人物だった。

「董天、私は結構お前には感謝している。お前が有能な教官だったおかげで、私はそこそこ強くなれた。そして、有能な部下だったおかげで、日本で好き勝手にきた」

「沙龍様に仕えることは、仮初とはいえ、私にとっても歡びでしたよ」
イケダシヤアシヤアと抜かしやがる。

まったく、どうやったらかんな思ってもいないことをスラスラと営業スマイルで言えるんだ。

数千年生きてりや嫌でも身につく処世術かい。

「そうか。だが、お前はどこまでも九雷元帥の部下なんだろう？」

「悲しいことを仰る。貴女に対する忠誠は変わっておりませんよ、沙龍様」

「なら、私の邪魔をするな」

最後通牒をつきつける気で言った。

「お前は私の命令に背いたことは一度もなかった。それは、私の力を恐れていたからと同時に、私の判断を信頼していたからだというのは、私の自惚れか？」

「いいえ。仰る通りです。沙龍様はいつだって物事を正しく理解していた。的確な命令を下し、当然の結果を得てきた。ですが、今回ばかりは、貴女の命令に背かせて頂きます」

「それは、九雷元帥の命令の方が正しいと判断したからか」

「そうです。沙龍様には情報が足りていない。それは命取りだとお教えしたはずです」

「だが、私には時間がない。その場合は、最も困難と思われる方法を選べ、と教わった」

キサさんがいつもの表情で私達を見守っている。

ドクターは、結構呑気な顔してるな。

「董天、私はお前を倒して前に進むつもりはないし、お前に倒されるつもりもないぞ。なぜなら、お前を味方に引きずり込むつもりだからだ」

「貴女は、そうやって、敢えて腹の内を見せて、敵ですら手中に収めてきた。それができる自信と根拠があつた頃の貴女になら、喜んで従つたでしょう。ですが、もう遅いのです」

董天が槍を構えた。避けられないのか――。

私は秀光を抜いた。

「公主、無理はダメですよ」

そのとき、突風と共に、凜とした声が響き渡つた。

「その勝負、私が預かる！」

「……!?!」

見上げると、大きな龍に乗った九玄娘々が、まっすぐに視線をおろしている。

「沙龍、こんなことで貴女に借りが返せるとは思っていないが、この場は私に任せられよ」

「娘々……」

カツコよすぎだろう。

長剣を携え、鮮やかな装束に身を包んだ八頭身の九玄娘々は、女の私が見たつて見惚れてしまう。

「私にも時間稼ぎくらいはできる。行ってくれ」

「う、うん——」

私が水雲宮でだらだらとお姫様生活をしている間に、この人にも何か心境の変化とか、環境の変化が色々あったのかもしれない。

苦しい顔をして私に剣を向けていた九玄娘々は、もうどこにもいない。

いまの娘々は、迷いを全て断ち切ったような、無敵の目をしている。

「崑崙防衛軍隊長、九天玄女殿——」

董天もこの展開は予想していなかったのか、忌々しそうに呟く。

「もはやその肩書きは私のものではない。いまの私はただの散人（※派閥に属さず、徒弟制度にも従わない仙人や道士のこと）。義によって、沙龍に助太刀致すまで」

「ああ、彼女が噂の九玄殿ですか。いや、さすがに崑崙一の美女と称されるだけありますね」

ドクター、ハンター・モード、オン。

しかし、九玄娘々はドクターを見もせず、キサさんに言った。

「真武君、沙龍を頼む。そやつを使ってくれ」

「……？」

キサさんが、なにを、と聞こうとしたとき、九玄娘々が乗ってきた大きな龍がその鼻面を私に押し付けた。

「飛龍!？」

すぐに分かった。

馬になっても、少年になっても、本来の姿に戻っても、アーモンド型の瞳だけは変わらない。

三人を乗せて再び空へ舞い上がる飛龍には目もくれず、董天は軽く溜息をついただけだった。

「さて、始めようか。清源妙道真君」

九天玄女は、身の丈ほどもある大刀を、その重さを感じさせない動作で構えた。

「よく覚えておいでで……。もう、その名で私を呼ぶ方はどこにもいらっしやいませんよ」

対して、董天は姿勢を崩して、武器を納める。

「かつてお前が崑崙で仙人に身をやつして、何をしていたのかは問うまい。全て九雷元帥の命なのだろう」

「所詮、宮仕えですから」

「構えぬのか？ ならこちらから行くぞ」

「沙龍様を取り逃がしたとあれば、九雷様は私を許してはくれないでしょう。こ

ここで貴女と闘っても私に利はありません。それよりも、九雷様から逃げる算段をしなければなりませんのでね」

「なんの冗談だ。私にはあの男の高笑いが聞こえてならないぞ。沙龍を泳がせておくのも、また九雷元帥の一計ではないのか？」

「九天玄女殿。貴女は緑麗様の叛乱から端を發した、この事態の行き着く先を見たいとは思いませんか？」

「……何が言いたい？」

「私は非常に興味がありますよ。この三千年間の結晶ともいえる沙龍様が、ヒトの身で何をやり遂げるのかということにね」

「そのために動いているというのか？ 元帥のためでなく、緑麗のためだと？」

九玄がそう言うと、董天はフフツと笑った。

「緑麗様は雲の上の方。当時、私はその御高名ぐらいしか知りませんでしたよ。

私にとっては、手塩にかけてお育てした沙龍様を贖戻してしまうのが、人情というもの」

「人情か、笑わせる」

「これでも長いこと人間の振りをして、人間として生きていますからね。自分が天界の住人であることも時として忘れてしまうくらいに——」

董天は、袖に仕込ませた何かの小型装置を作動させた。

すると、董天の足元に円陣が浮き上がり、彼の身体を宙に吸い込んだ。

どこかの空間へ転位したのだろう。

「逃げられたか……。まあ、いい」

董天の話が単なる時間稼ぎであったのか、本音であったのか、九玄には分からなかった。

飛龍の背中から見たその都市の外観は、ちよつとした要塞にも見える。

「天界で自治が許されている唯一の都市です。学園都市というのは、結構政治的には自由でしてね」

ドクターがそう説明してくれた。

「ここの権限を握っているのが文官長で、いまは、西海龍王殿がその任に着いてます」

「ああ、飛龍のお父さんか」

その話をした途端、不機嫌になった飛龍は、要するに反抗期なんだな。プ。可愛いじゃないか。

「今回のことに、親父は関係ないぞ」

「でも、陽輝が真武君にこの街に入るためのIDカードを渡したのは、多分、そういうことだと思えますよ」

「そういうことって？」

と、ドクターに聞くと、苦笑されただけだった。

「飛龍のお父さんなら間接的に匿ってくれるだろうから」と、ズバリ言っ
てはいけないってことね。

晶都の木賃宿では、ユエとマツキーが私達の帰りを待っていた。

いまじや半分仙界の一員になってるユエはいいとしても、マツキーはつわもの
だな。ちつとも動じてない。

それも、当然といえれば当然で、マツキー自身が私の『水雲宮拉致事件』に絡ん
でいるであろうことは、拉致されてから二日目くらいに気付いた。

私はそれを責める気はちつともない。どころか、感謝さえしてる。なぜなら、
マツキーの一番の功績は「天界一の名医」を私の専属医にしたことなのだから。

私はもうドクターが居なければ動くことすらできないはずだ。だから、このポ
ンコツの身体がかりうじて動くうちに、全てを知らなければならぬ。

が、その夜、マツキーの口からとんでもない真実を聞かされたときは、呆れ返って叫んだものだ。

「待て待て待て〜イ！　すると、なにか？　この中古で動きの鈍くなった身体のバックアップとって、グレードアップしたヴァージョンの身体にインストールし直っすってか！　なんぢや、そりやあああ!?!」

「ホラね、こういう反応でしょ？」

「ホラね、じゃない！　そんな阿呆な話あるか！　そんなの、キサさんだって嫌に決まってる！」

と、当人を見る。

いままで、キサさんが女である私を同居人として認めてくれていたのは、私に「成人女性としてのフェロモン」がなかったからなのだ。

自分で言っていてちよつと悲しいが、まあ、結局、そういうことなのだ。

それが、いきなり八頭身の金髪美人になったら、キサさんは絶対嫌だろうと思っただのに。

「別に僕は構わないよ」

「ホラ見ろ。……え？　いま、なんつった？」

「容れ物が変わるだけだろ？」

「ず、随分とアツサリ言ってくれますね……」

「ちよつと見た目が変わるくらい、別にどうってことないだろ？」

「オイ……。 “ちよつと” か!?　あの、とても普通の日本人やっっていくには大変

そうな、金髪のウルトラ・ダイナマイツ・フェロモン・ボンバーな身体になっ

ちやうのが、 “ちよつと” なのかつ!?”

「落ち着けよ、馨。……って、お前、緑麗さんに会ったことあるのか？」

「あ、いや……。そ、そう言われてるらしいよ？」

九雷元帥の記憶にダイブして見てきました、なんて、とても言えない……。

困ってテーブルを見渡すが、ユエは酒が入って半分寝てるし、飛龍は一心不乱に夕飯を食い続けてる。もうこの二人は放っておこう。

ドクターは、というと、特に口を挟む気はないようだし……。

「二者択一だよ、馨君。このまま、その身体であとわずかの余命を生きるか、緑麗さんの身体で生き続けるか、君に選べる方法はその二つだけだ」

「私の感情は無視？」

我ながら、子供みたいなことを言ってるな、と思う。

そんな選択肢の前には、答えは一つだというのに。

「まあ、二十年慣れ親しんできた顔と身体が変わってしまうことに抵抗があるのは分かるよ。でも、これは文字通り生きるか死ぬかの選択だからね」

いたたまれなくなつて視線を泳がせると、キサさんがヤレヤレという顔をしていた。

そして、なぜか、ドクターまでもが同じ顔をしていた。

「でも、ちよつと、いくらなんでも話が唐突過ぎる……。少し考えさせて」

ここは学園都市といつても、近代的で無機質な建物が整然と並んでいるわけではなく、神様達の住む世界に相応しいような、自然をそのままあちこちに残したような街だった。

宿から出ればすぐ竹林もあるし、道は舗装されてはいるものの、歩きやすい硬

さの石で敷き詰められている。

私は、東屋で一人、夜風に当たっている。

誰が弾いているのか、二胡の弓の音が遠くに聞こえていた。

この月夜に風流だな。

私は音楽に関しては何の無知なので、この曲の名前も知らないし、この二胡が巧いのか下手なのかも分からない。

でも、いい曲だ、と思った。

物悲しくて、綺麗な旋律。

(時間はないんだ。確かに……)

ここに来てからはずっとこうだ。

判断材料が十分に揃っていないのに、早急に決断を迫られる。

自分の思惑の外で物事が淡々と進んでいって、流されまいとしても、なにか目に見えない力に引きずられていってしまう。

私の意思でここに来たはずなのに、数ある選択肢を慎重に選び取って進んできたはずなのに、いま、ここで月を眺めている私は、本当に『甲斐馨』なんだろう

か——。

「典型的な不良患者してますね、貴女は」

と、背後から急に言われて、いま飲んだものを嘔き出しそうになった。心配を持たない人が居たのを忘れてた。

「ド、ドクター……」

寝酒に寝煙草だ。そりやまー、悪いの承知でやってんだけど、こうもバツチリ見つかるよ、補導員に見つかった高校生のようになってしまふ。

「まあ、今日くらい目をつぶりますか」

杯を渡すと、ドクターが少し躊躇したので、

「ドクターはお茶以外飲まない？」

「昔、緑麗と陽輝にさんざん付き合わされて、肝臓を壊しましたとだけ言っておきましょう」

「そ、そうでしたか。医者の不養生まんまですね」

「たしなむ程度ならお付き合い致しましょうか、せっかくの公主のお誘いです」
そうして、暫く、ドクターと静かに酌み交わしていた。

まだ、二胡の音は続いている。

「ドクターはさ、ホントは不本意なんですよ？ 私が水雲宮から逃げて、ここに来てしまったのって……」

「どうですかね……。私にしてみれば、貴女が幸せならいいのですよ。ただ、水雲宮に居た貴女と、いまここに居る貴女と、どちらもあまり幸せそうに見えないのはなぜでしょうね」

「……」

痛いところを突かれた。

「ドクターは、緑麗の身体が氷付けにされてるってことは知ってたの？」

「ええ、まあ……。処刑の場に立ち会ったのは私ですから……」

「そっか。じゃあ、魂を移すという方法以外に、私が助かる方法はないというのも本当？」

「残念ながら、本当です」

「そう……」

「やはり、嫌なんですネ？」

「まあ……」

「貴女にとって、緑麗の身体は他人の身体、ということになってしまおうندیょうね」

「……うん」

「ですが、公主。私には、別の理由もあるんじゃないかと思うのです」

「別の理由？」

「ええ。貴女が、緑麗の身体を拒否する本当の理由——」

「それは……？」

「言っていていいんですか？」

思わず、ドクターから視線を逸らした。これじゃ、まるで、尋問されている容疑者だ。

“本当の理由”？

そんなのは、いつも言っただけじゃないし、言えるようなものでもないんだよ。

「すみません。少し意地悪でしたね」

「そうだね」

二胡の音は止んでいた。

夜空では、糸のように細い月が、雲間に隠れる。

「暫く月と影とを伴いて」 (しばらくの間は、この月と影とを共にして) (注

1)

そう呟くと、ドクターが微笑んで続けてくれた。

「行楽、須らく春に及ぶべし」 (春が過ぎ去ってしまったわなうちに楽しむことにしよう)

「我歌えば、月徘徊し」 (私が歌うと、月は天上をさまよい)

「我舞えば、影凌乱す」 (私が舞えば、影は地上で乱れ動く)

まるで、一定のリズムのように、長すぎず、短すぎない間隔で、ドクターが続けてくれる。

「醒時は同に交歓し」 (こうして醒めている時は、我ら三人はこもごも喜びを分かち合い)

「酔後は各々分散す」 (酔って眠ってしまおうと、それぞれ別れ別れになっ
てしま
う)

「……」

私は言葉に詰まってしまった。といっても、別に、次の詩を忘れてたわけじゃない。

三呼吸くらい置いて、やっと言えた。

「永く無情の遊を結び」 (そこで私は君たち二人といつまでも、しがらみのないこのような交友を結び)

「……」

次はドクターの番なのに、最後の五言を言ってくれない。

「……」

私に言わせる気なのか。

あの五言を。

「相期して雲漢はるかなり」 (やがてはるか遠い天の川で会う約束をしましよ
う)

私の脳内でそれを言ったのは、九雷元帥だった。

そうだね。

あなたは間違っていない。

複雑どころか、とても単純で、情の深い人じゃないか――。

(注1) 『月下独酌』李白 「李白詩選」 (岩波文庫) 他、参照

火雲宮敷地内、天界軍司令本部。

深夜、その部屋に董天が現れて、九天玄女の突然の参戦の報告をしていた。

九雷は、董天の報告を聞きながら淡々と言った。

「彼女はどこまでも誇り高き武人だからな。枷が外れたとなれば、かつての汚名を雪ぐためならなんでもするだろう」

その汚名を着せたのは他ならぬ九雷なのだが、そのことに対する罪悪感を彼は持っていない。

「沙龍様は、真武君と天真大夫（注1）と共に、西に向かいました。恐らく晶都でしょう」

「待て、董天」

九雷は、董天を黙らせた。その数秒後に、乱暴にドアを開けた陽輝大将が入ってくる。

「真面目に詰めてると思っただらやっぱりか。お前もこんな時間ばつかに現れんなよ、董天。どこの秘密工作員だ」

「九雷様の仕事は、秘密工作員より過酷ですよ」

「フン、それを好んでやる辺りが酔狂だろ」

「董天、この男の嫌味を聞くのが嫌なら消えてもいいぞ」

九雷の言葉は、下がれという意味だと董天には分かる。

「御意」

そうして、董天が裏口に消えると、書類を投げ出し、九雷は立ち上がった。

「何の用だ？ 陽輝。これでも、表向きは忙しいんだが。誰かの裏工作のせいだな」

「俺は腹のさぐりあいには好きでも得意でもねえんでな、単刀直入に聞く。九雷、お前、何を考えている？」

「……どういふ答えが聞きたいんだ？」

「決まってる。退屈しないヤツだ」

「その期待には応えよう」

「もう一つリクエストがあるぜ？」

「……なんだ？」

「お前が後悔しない答えだ。俺はもう、お前の自棄酒に付き合うのはゴメンなんだよ」

「フ……、そう心配するな、陽輝」

陽輝は舌打ちして、来客用のソファに座ると、足を投げ出した。

彼にとって九雷は上官になるが、それ以前に長年の旧友でもあるので、遠慮がないのだ。

「お前こそ何を考えている。ここに来て裏切られるのはご免だぞ」

九雷は当然、陽輝がちよくちよく水雲宮に出入りしているのを知っている。

半分は沙龍の監視目的で、半分は水雲宮の庶務全般を担当している女性を口説くため、という陽輝の言い訳を全て信じているわけではない。

「俺の目的は最初から変わってねえよ。お前が迷ってるだけだろ」

「……」

九雷は無表情のまま黙った。

元々口数が多くはないので、九雷の沈黙はほとんどが否定か怒ってるか、のどちらかである。

「沙龍をどうするつもりだ？ 泳がせておけばあいつはいずれ天ちゃんの処にやっけて来るだろう。記憶が無いだけに事の真相を知りたがってるからな。だが、いまのあいつじゃ太刀打ちできないんだぜ？ お前はそれを見守るだけか？ 助けるのか？ それとも見殺しか？ その後で緑麗を復活させる気か？」

「畳み掛けるように言うな」

「元東宮の命だからって、お前ならいくらでも沙龍を水雲宮に閉じ込めておくことは出来たはずだぜ？ それを、なぜ逃がすような真似をした？」

陽輝は、段々厳しい口調になっているのを自覚している。

「わざと逃がしたわけじゃない。九玄殿が現れたのは実際、予想外だった」

「本当にそうか？」

「逃がす手伝いをしたお前が、なぜそんなことを聞く」

「だから、言ってるんだろ！ 俺はお前の本音が聞きたいだけだ！ お前は、沙龍を殺せるのか殺せないのか、どっちなんだよ」

とうとう声を荒げた陽輝に、九雷は冷たい視線を向けた。

「……どちらであろうと、目的が遂げられればいい。それが緑麗の本懐だ」

「じゃあ、お前はどうなんだよ」

「なんだって？」

「緑麗の悲願を叶えてやるのがお前の目的か？ 違うだろ？」

「……」

「俺はな、九雷。麒麟も黄龍もどうでもいいんだよ。あいつらは勝手に殺し合いしてりやいいじゃないか」

「……なら、このまま、俺達は玉帝と共に滅びるか？」

「ああ、滅んじまえよ。緑麗を犠牲にして、その上沙龍を生贄にするしか能のねえこんな世界を、一体誰が望んでるんだ」

「緑麗は、自分が犠牲になったとは思ってないだろう。問題は、残された俺達が何を思い、何をするか、だ」

「それすら迷ってる奴がよく言うぜ。だったら、お前は沙龍に近付かなきゃよかつたんだ。俺は言ったよな？ あんまり関わるなって」

「……」

今度の九雷の沈黙が苦痛を伴っているのが分かったが、陽輝は構わずに喚いた。

「もう一度聞く。お前は沙龍をその手で殺せるのか？ 緑麗を斬ったように。同じことができるのか？」

「……」

「俺は、緑麗はそんなこと望んでねえと思う。沙龍もな」

「……」

九雷がもう口を開く気はないのだと覚って、更に、自分の言いたいことは取りあえず言ったと思ったので、陽輝はソファから立ち上がった。

「まあ、今する話じゃないんだけどよ」

長い間、慎重に進めてきた計画を実行する段階になって、当初の言い争いをしてもしょうがない。

しかし、言わずにはいられなかった。

実際、陽輝も迷っているのだ。

「とにかく、このままじゃ、誰も救われない。俺も、お前も、沙龍もな」
そう言い残して、陽輝は部屋を出て行った。

実際、苦しい選択だった。

寿命の尽きそうな沙龍を、沙龍のまま生かすためには、誰かが沙龍を殺さなくてはならない。

それは木佐や偃月が望んでも、沙龍自身は望んでいないだろう。

しかし、かと言って、寿命が尽きるのを待っていては死ぬだけなのだ。

「目的地は火雲宮、本殿、天帝のおわします玉座の間——。だけど、私は天帝を倒しに行くわけじゃない。会って話をしたいただけだ」

ドクターと月見酒をした翌日、私はこのパーティーの面々にそう言いきった。

「向こうの出方次第では闘うことになるかもしれない。でもって、一撃で殺られ

るかもしれない。だけど、私は行く。行って、事の真相が知りたい。三千年前に何があったのか。そして、無茶かもしれないけど、その上で自分の行動を決めたと思う」

こんなのは作戦でもなんでもない。行き当たりバツタリだ。

無茶を通り越して、無謀と言われてもしょうがない。

「恐らく玉座の間に辿り着くまでに相当数の雑魚を薙ぎ倒さなきゃならんだろう。強制はしないが、みんなには一緒に来てもらう」

「強制しないって……してるだろ」

キサさんが突っ込む。

「誰も巻き込みたくないなんて、死んでも言わない。望んで巻き込まれたい人ばかりここに居るはずだからな。だから、命の保障は各自でしてくれ。私は保障できない。ただ、全てが終わって、もし私が生き残っていて、誰かドジって昇天してるのがいたとしたら、骨は拾ってやる。尤も、そんなドジを連れてきたつもりもないがな。以上、質問は？」

「僕はないよ」

マツキーが一番最初に言った。

「……俺もない」

ユエは溜息まじりだが、納得はしてる顔だ。

「ショウテンって、何だ？」

飛龍、あんたは黙ってなさい。

「……」

次にキサさんを見たら、渋い顔をしていた。

「質問はない。だけど、馨、二つだけ聞かせてくれ。なぜ、天帝が事の真相を一番知ってると思うんだ？」

「それは簡単だ。こんだけ、私達がこの世界に来てワイワイやってるのに、名前だけは頻繁に出てくる『玉皇大帝』だけが私にアクセスしてこない。彼だけが私を避けている。それはなぜか。『麒麟』と『黄龍』が接触しては色々マズイことがあるからだ。玉皇大帝はそのマズイ理由を知ってるから、避けてるんだろう」

「……そうか。じゃあ、二つ目。なぜ、その玉皇大帝を敵とみなした？」

「日本の狭いユニットバスの床に座り込んでいたときに言ったよね。私の寿命を

たった二十年に設定しやがった奴は誰？」

「なるほど……。分かったよ」

最後に、お茶を飲んでるドクターを見ると、静かに頷いてくれた。

(注1) 大夫……中国で使われる本来の意味は、官職の身分呼称の一つだが、この話ではもう一つの意味である「医者」として使用。余談だが、台湾の大学生に聞いた話では、「医者」としての「大夫」というのは昔の言い方だそうで「漢薬の医者」としての意味があるらしい。現在の中国語での「ドクター」は「医生」。

約三千五百年前――。

頑丈な石造りの練兵場に、色々な面子が集まっていた。

下は肩書きのない一般市民から、上は四方軍の大將まで、かなりの人数だ。

「ふわあゝ……」

顎が外れそうな大きな欠伸をしたら、副官の祥倫が俺の袖を引っ張りやがった。

「……大將！ 陽輝大將！」

「んだよ、うるせえな」

「少しは謹んで下さい。四方軍の大將が揃っておいでなのですよ？」

「ンなこと言っても、退屈でしょーがねえ……」

新入隊員の公開選抜テストなんぞ、小隊長クラスに任せておきやいいじゃねえか。大体、なんで他の軍大將たちや、大人しく出席してんだ？

しかも、今日に限って見物客の多いこと。まあ、新参者の俺を見に来たって噂もあるが、みな暇だねえ……。せめて酒でも振舞えつての。

と、そのとき、闘技会場にやけに目立つ女が現れた。まあ、軍属の女も居ないことはないが、どいつも怪物みてえなのばかりで、目立つといえれば目立つんだが、その女の目立ち方は全く意味が違っていた。

思わず、口笛吹いちまったくらいだ。

「ナニモンだ？ 後宮の女官の面接会場と間違えてねえか？」
というか、アレなら女官どころか、すぐ目をつけられて、貴妃にだってなれるだろう。

なんだってあんな女がこんなむさ苦しい場所に居るんだ？ と思った直後、その女が、テスト用に借り出されている士官の一人の前に立った。

「……ッ？」

お、おいおい、一瞬で倒しちゃったぜ……。

どよめく会場の中で、誰があんな女が抜刀するところを見た？

いや、誰も見てないだろう。

なにせ、抜いてないからな。

恐らく、あいつは、あの間抜けな士官の鳩尾（多分、これはフェイクだ）と、眉間、さらに背後に回り込んで、頸椎の急所三箇所、拳をクリーンヒットさせたはずだ。

体術を極めた奴でもあんな華麗には決まらないし、そんな外道な急所を狙う奴もそうそう居ない。

会場のどよめきが感嘆の呻きに変わる。

本来ならそれで終わるところ、その女が何か言ったらしい。いきり立った様子
の士官達が、数人、女の前に立ち塞がった。

まあ、なにを言ったか大体想像はつくが、ついでに、この後の展開も想像がつく。

「……ほらな」

周囲のざわめきを余所に、俺は、六人の男を数秒で戦闘不能にしたその女が、やはり腰の剣には触れてもいないことに注目した。

その表情が、抜くまでもねえ、と言っている。

案の定、険悪な雰囲気となった会場で、今度は小隊長数人も加わった団体がその女に詰め寄った。中には、既に剣を抜いている士官も居るが、女は不敵な笑みを浮かべているだけだ。

今日の試験官達を総括している西海龍王は動かない。

となれば――。

「陽輝大将！ ど、どちらへ――」

俺は、思わず来賓席を立って、柵を飛び越えた。

「面白エことになってるじゃねえの。どいてな。お前らじゃ相手になんねえよ」

俺の登場に、士官達が道を開ける。

その先に立つのは、確かにどこにも隙のない女だった。立ち方からして、目を引く。

「俺は西方軍大将、陽輝。お前さん、名前は？」

「緑麗」

「後宮ならあっちだぜ？ 何をトチ狂ってここに居る？ あんたなら、その顔で

一生楽に暮らせると思うんだがな」

「陽輝大将。人には出来ることと出来ないことがある。私に出来るのはたまたまこれを使うことだった」

と、腰に差した剣を示した。

「いい答えだ。俺が直々にテストしてやるぜ。俺に一太刀でも入れられたら、うちの軍の士官にしてやろう」

「いいのか？」

「ああ。大将にはそれだけの権限がある。だが、俺は、エリート揃いの天界軍じゃ、嫌われモンのはみ出しモンだ。それでもいいってんなら、の話だがな」

「有り難い。退屈しないで済みそうだ」

「ますますイイ答えだ。さて、始めようぜ」

その後のことはあんまり思い出さなくねえ。

審判を買って出た西海龍王が止めてくれたおかげで、俺は肩口を切り裂かれただけで済んだ。

多分、あのままやり合ってたら、俺は無様に緑麗に倒されていただろう――。

それから、あつという間に緑麗は西方軍大将——つまり俺だ——の副官になっていた。

俺と緑麗のコンビは、ちよつとした噂の的でもあった。

性懲りも無く仕掛けてくる截教（※仙人の派閥の一つ）の鎮圧だの、西や北の異民族神魔達との小競り合いだの、色んな戦場に休みなく借り出され、実績を上げているうちに、一目置かれる存在になっていたのだ。

だから、ただでさえ目立つ緑麗が、スケベジジイ……もとい敏帝に目をつけられるのも時間の問題だった。

「緑麗、お前、近衛隊長にスカウトされたってホントか？」

火雲宮の廊下で捕まえて聞いたたら、緑麗はついでのように言いやがる。

「ああ、情報が早いな。いま、断ってきたところだ」

「なんでまた高給取りの近衛職を辞退したんだ？　しかも、隊長だぜ？　実質、天界軍元帥と同等だ」

「近衛兵なんて、陛下の隣で一日中槍持って立ってるだけだろ？　ゴメン蒙る

ね、そんな仕事。私の信念に反する」

「お前の信念ってなんだよ」

「楽しければそれでいい。以上だな」

「それ、信念って言うのか？」

「大事だぞ？ 仕事の後の一杯は」

「……で？ 今日の仕事は終わったのか？」

「御意。付き合っていただけですか？ 上官殿」

と、杯を傾ける御馴染みのポーズ。

「上等だ。今日こそ負けねえぞ」

多分、敏帝はお前を近衛隊長にしたかったわけじゃないだろう。傍において、いずれ愛妾にでもする気だったんだろうが――。

（いつまで断り続けられるかねえ……。緑麗の旗色が悪くならなきやいいんだが）

しかし、そんな俺の杞憂は杞憂で終わった。

俺と緑麗が呑んだくれていた間に、高齢の敏帝が甥に位を譲って引退してし

まったからだ。

玉皇大帝と呼ばれるようになった新帝は、女嫌いだったこともあって、緑麗の後宮入りの可能性はなくなった。

それからしばらくして、年に一度の人事異動があり、このときの組織改革で、緑麗は大將に昇格した。

激戦区ばかり行かされるといふ評判の北方軍だ。

「お前と一緒に現場に出る機会もほとんどなくなるな」

「新しい職場では誰も私の酒に付き合ってくれん。つまらんぞ」

緑麗は口を開けば、酒しか言わない。

まったく、なんだってこんなアルコール漬けが大將になれるんだ（俺も人のこ
と言えないが）。

「ところで、九雷には会ったんだろ？」

士官学校で同期だった九雷は、俺とは全く違うコースで出世街道を昇り詰めて

いて、今回の異動でいきなり元帥になりやがった。

昔から何かやらかす男だとは思っていたが、いいのかね、あんな冗談の通じない野郎に天界軍を指揮させて。

「ああ、お前の旧友というから期待していたんだが……。挨拶以上に会話が続かなかったぞ。なんだ、あの根暗男は」

「ククツ、お前にかかる、あの男前も形無しだねえ」

このとき、全く興味の無さそうだった緑麗が、通天教主率いる金熬軍の鎮圧に遠征したとき、一変したのには正直言って驚いた。

大規模な遠征だったので、直接九雷が指揮を取って、四方軍もほとんどが参戦させられた。

その際、最前線で指揮を取る九雷の剣さばきに、緑麗は一目惚れしちまったらしい。

なんなんだ。緑麗の基準は「強さ」かよ？

いや、そうでもねえか。自他共に天界最強を自負する敖広にはちっとも興味ないようだし。

まあ、とにかく、九雷も、お気楽な緑麗に感化されれば、少しはあの気難しい顔がマシになるだろう。

思い返しても、愉快的日々だったぜ。

緑麗と始末書の更新記録を競って、九雷をからかっていた日々は、俺の人生の中でも最高の一時だったんじゃないかと思う。

俺達に意見を言える奴は居なかった。

そりやそうだろう。闘いの天才と智謀の天才が二人揃えば、無敵だ。しかも、二人共玉帝のお気に入りときている。

俺は、まあ、そのおこぼれに預かってたようなもんだ。

だが、この退屈な天界も、お前達二人が居れば、俺にとつちや、そう悪くない処だと思えたもんだ。

あの事件が起きるまではな。

「陽輝、あるとき、お前に逢えて良かったよ」

そう告げられたときは、来るべきときが来たと思った。

「でなければ、いまの私はないからな」

「まったく、お前は一人で決めちまって、一人で闘うつもりかよ……。薄情な同僚だぜ……」

「それは違う。私達の闘いは、これから始まるんだ。よく聞け、陽輝。黄龍と麒麟の力は、神の領域すら簡単に超えてしまっている。いまの私達の手にも負えるものじゃないんだ。だけど、私は諦めない。この力は、いつかあるべき場所に返す——必ずな。しかし、それには、気の遠くなるような時間が必要なんだ。分かってくれ」

「そのために、敢えて汚名を被るのか？」

「汚名なんて別にどうだっていい。一仕事終わった後の一杯を、お前達と上げられればそれでいいさ」

「緑麗……」

「まあ、今度はさすがに長丁場になるが、その分、さぞかし美味しい酒になるだろうな。朝まで付き合わせるぞ。いまから覚悟をしておけ」

「ああ、分かったよ。仕方ねえ……仕方ねえが……どうにもやるせないぜ」

そして、この火雲宮の大広間で、緑麗は言った。

「九雷を頼む」

俺は、かける言葉も見つからず、あの負け知らずの将神が、たかが歩兵に連行されているのを、信じられない思いで見っていた。

だが、緑麗の目は死んでいなかった。

初めて逢った頃と同じ、不遜で傲慢で享樂的な目が、俺に訴えていた。

——ここからが、本当の闘いだ、と。

「じゃ、またな」

俺が最期に聞いた緑麗の言葉だ。

だが、緑麗、お前は、一つだけミスを犯した。

九雷の苦悩が、お前の予想よりもはるかに大きかったってことだ。

お前は、大人しく一万年の刑に服するつもりだったんだろうが、傷心の九雷にその時間は長すぎた。

俺達の予想に反して、玉帝が保ちそうにねえという事情があったにせよ、九雷は取り憑かれたように、この計画を急いだ。

この三千年は、奴にとっては気が狂うほど長く感じたはずだ。

だから、その誤算を、お前は沙龍に埋めさせるつもりなんだろう？

悪いな、役に立たねえ同僚で。

だから、せめて、沙龍の手伝いはさせてくれ。

あいつは、人の身で健気に約束してくれたぜ。

再び、三人で闘うことを。

緑麗、いや、沙龍――。

俺は、お前を信じてる。

お前が、緑麗の魂を持つのなら、緑麗と同じ結論に達するはずだ。

同じ信念を持つのなら――。

「大将、布陣、完了しました」

祥倫の言葉で、俺の物思いは断ち切られた。

本日は晴天なり。

こんな真昼間に、正面玄関から乗り込んでくる馬鹿も居ないだろうが、あいつならやりそうだな。

「ご苦労さん。お前も死にたくなかったら、給料分の仕事だけして、後は昼寝でもしておけ」

「大将……」

長い付き合いだ。こいつも俺が何をしようとしてるか、薄々気付いてるだろう

し、やる気のない布陣を命じた俺の意図も汲んでくれるだろう。

「まあ、見てな。そのうち、この水色の空が暗雲に取って変わる。明日、生きていられたら、全員特別休暇だからな、祥倫」

「……了解しました」

さあ、始めるか。

飛龍に乗って、空から火雲宮に向かう私の隣には、ドクター天真ただ一人。この方法が、火雲宮の本殿への最短距離だという。

しかし、飛龍は突然、何かにぶつかっただよみのけぞって、滞空した。これ以上は強力な結界があつて、空から近付くことはできないようだ。しかし、そんなことは承知の上。

飛龍はそのまま、垂直に降下する。

「公主！ 無茶は駄目ですよ、無茶は！」

飛龍から飛び降りると、ドクターが叫んだ。

「分かってる、行くぞ、小龍！」

「キュウ！」

役に立つのか立たないのか分からない愛玩動物と共に、数メートル下の地面に着地した。

そして、上を見上げる。

「飛龍はこのまま娘々と合流して、西側を攪乱しろ！」

飛龍が頷くのを確認して、待ち構えていた歩兵達を一瞥した。

えらく旧時代的な槍や刀を持った者達が、ゾロゾロと沸いて出てくる。

自動小銃向けられたら厄介なところだったが、これなら、なんとでもなるな。

恐らく下っ端歩兵達だろうが、曲がりなりにも天界住人。歌舞伎町のチンピラと同じだと思っではこちらが痛い目に遭うだろう。

「曲者をひつとらえろ！」

「己、ここをどこだと思っている！」

まあ、こういうときは多少のハツタリも必要なのよ。

「私は将神緑麗！ 死にたい奴だけかかってこい！」

「しよ、将神ッ!？」

「緑麗様なのかッ!？」

と、怯む雑魚軍団の中から、様々な声上がる。

「騙されるな！ 謀反人緑麗の名を騙る地上人だ！」

「緑麗様ならば黄龍を従えているはず！　なんだ、あの貧相な龍は！」

「ム……！」

小龍がその言葉に怒ったようだった。

「例え黄龍の力がなくとも、例えヨレヨレのこの身体でも……」

秀光を抜いて、全員殺すつもりで走った。

手加減なんかしてられないし、しちやいけない。

怯んで腰抜かしてる奴は放っておこう。

「喧嘩くらいはできるんだよ！　人間様を舐めんなッ！」

「来たか、とうとう」

玉座に座っている青年は、報告を行う近衛兵を無表情に見た。

「次々と建物を破壊し、歩兵達を踏み倒しております」

「放っておけ」

「は……？　しッ、しかし、緑麗さ……いえ、謀反人の名を騙る輩は、本殿に

迫っておりますが？」

「放っておけ、と言ったのだ。侍従長、仕事の続きを始める。こう書類が多くては困るぞ。我が宮殿にも、そろそろLANを導入した方がよいな」

既に、あちこちで爆炎があがり、派手な戦闘が繰り広げられていた。

その野戦場と化した火雲宮の一角では、九天玄女が三本の剣を背負っていた。勿論、そのうちの二本は九玄の剣ではない。

「なぜ西海龍王殿がお前を私に預けたか知っているか？」
背後の飛龍に聞く。

「親父と九玄がデキているからだろう」

「チガウツ！」

ゴツ

と、九玄は自分の大刀の柄で、飛龍の後頭部を殴った。

「井戸端会議の噂話を鵜呑みにするんじゃない」

「……い、痛かったぞ、いまのは死にかけたぞ？」

「お前の力は文句なく天界一であろう。だが、それには、使い方というものがある。……飛龍！ 火尖槍をよこせ！」

迫り来る敵集団を前に、飛龍は迷わず九天玄女に火尖槍を投げた。

九玄は、それを空中で受け取ると、そのまま最大出力で火炎放射器のように使った。

これは、本来使い捨ての火槍を何本か撃ち出すだけの武器である。

いくら最大出力とはいっても立て続けには放てないし、まして、同時に放射させることは不可能に近い。

飛龍にはまるで別の武器のように見えて、暫し絶句した。

「お前の力と速さは認めよう。だが、技とはこういったもの。少しはお前も私から技を盗むといい。それでも崑崙一と謳われているのはこの姿だけではない」

九玄が『教育』をしている傍で、呑気な声が聞こえた。

「へえ、沙龍も大したもんじゃねえの。あのお堅い九玄姐さんを味方につけるなんて、少なくとも俺には無理だったがな」

見ると、陽輝がバイクの上で一服していた。

「陽輝大将——、あなたか」

「九玄、あいつは敵だ！ 以前、緑麗を襲って来た！」

ガシヤンと金磚を向ける飛龍を、般若の如き形相の九天玄女がまたも大刀で小突き倒した。

「だから……、力押しはヤメロと言ったのが、分からんのくわあああああ
あーッ！」

潰れた飛龍は、それでも軽いダメージでのそのそと起き上がった。

「怖いぞ、今日の九玄は。しかも大口開けると皺が目立つ」

すると、嘘のようにピタッと、いつもの凜としたクール・ビューティーに戻った。

「アイコンビだな……」

陽輝が呟く。

「ああ、もうすぐ解散かもしれぬが。……ところで、陽輝大将、あなたはここで何をしておられる」

九玄は、何度かこの男に会ったことがある。

昔は、敵として。

その前には、何度か共同戦線を張った同志として。

「ん？ まあ、建前では、侵入者排除の指揮を取ってるってことになるか」

ここまで無傷で辿り着けたのは、派手に陽動してくれてるマツキーやユエのおかげだけではないだろう。

陽輝大将は「三人で同じテーブルで食事」の確約が取れるまでは動かないはずだが、確約が取れてから動くのでは遅すぎるので、なにかしらのアクションはしてくれているのだろう。

「ドクター、ここらへんでいい？」

秀光の鞆の先で、その壁を突付いた。

「位置は大丈夫だと思いますけど……、物理力だけで破壊する気ですか？」

全盛期ならそれもできただろう。

精神力と肉体の力を極限まで高めて、一点だけを突くという技は、結構どの流派にもあるもので、岡山の祖父ちゃんがやってる居合つてのも、突き詰めればそういうことだ。

「まあ、こういうときのために、非力な少女を助けてくれるアイテムもある」と、私は手榴弾を取り出した。

飛龍が晶都でかっぱらってきたものらしいが、平和なはずの学園都市にこういうものがゴロゴロしてるとは考えられないから、親父さんの所にでもあったのかもしれない。

「んじや、ちよつと離れてて」

ぶち破った壁は、案外と脆く崩れ落ちた。

そして、体当たりするように突っ込んだ体勢を素早く整え、シーンとしている場内に向かって叫んだ。

「お初にお目にかかる、玉皇大帝。私の名は甲斐馨。貴方に話があつてはるばる東の国より来た。ここまで来るのに多少の障害は薙ぎ倒した。それは許されよ」
私にしては、最大限の礼は取ったつもりだ。

この際、壁を破壊したことは棚上げするとしても。

しかし、玉座に座る青年は、チラッとこちらを見ただけだった。

「相変わらずだな、緑麗。なぜ扉から入らない？」

書類に判子を押しながら、また続きを始める。

「仕事中か、すまん」

「ホントに相変わらずだな、緑麗……」

圧倒的な光彩を放つこの人物こそが、玉皇大帝だろう。

私は蛇のような男を想像していたのだが、目の前の青年はキツチリと髪を結い上げていて、清潔感も漂ってる。

どうにかしたら親しみの持てる顔をしている気もするが、その表情は冷たい。見かけは二十歳前後。つまり、私と同年くらいに見えるが、実際は数千年以上の長きに渡って生きている、天界の君臨者だ。

「人の身体でよくぞここまで昇って来れたものよ。それに敬意を表して、暫しの時間はさいてやろう」

「かたじけない」

いきなり連行ってことはないみたいだな。

「じゃ、早速――」

と言いかけると、片手をあげて遮られた。

「お前の言いたいことは分かっている。記憶を戻して欲しいというのだろうか？」
結構せっかちというか、ビジネスライクだな。

鷹揚な天帝様というより、第一線で活躍しているサラリーマンのようだ。

「いや、違う。記憶は、要らない」

「なら、かつて、お前が叛乱を起こした経緯を知りたいといったところか」
全てお見通しって感じだな。

ここらへんは、さすがに神様だ。

「この男が肝心なことを何も教えなかったであろうからな」

と、玉皇大帝は隣に立つ九雷元帥を見上げた。

私はさつきから、意図的に九雷元帥とは視線を合わせていない。

「……」

この事態をまったく予想していなかったわけじゃない。

彼が私と敵対する場所に立っているのは、当然と言えば当然だ。

恐らく、それを見て自分が辛い想いをするようになるだろう、という覚悟もしてきた。

しかし、いままでのことを考え合わせれば、九雷元帥が玉皇大帝に同調して『そこ』に立っているとは思えなかった。

「元帥は、私と同じで、情報が足りていないんだよ」

半分ハツタリだが、そう言ってみた。

「だから『そこ』に留まっているだけ。真実を知るために」

反応を見るべく元帥に視線を移すと、案の定、難しい顔をしていた。

（全く……。こういう顔しか出来ないのかね。この人は）

まるで、出逢った頃のキサさんみたいに、表情がほとんど変わらない。

しかも、何千年と生きている分、能面具合はこちらの方が格段に上だ。

「大人しくしてろ、小龍」

この場の緊張と、私自身の緊張を感じ取ったのか、小龍が肩の上で身じろぎをしたのを小声で宥めた。

「その情報とは？」

玉帝が聞く。

「緑麗の——本音」

「ホウ……」

と、玉皇大帝はあからさまに嘲笑を見せる。私の言うことは信じてないって顔だな。

「で、緑麗。お前は朕に何が聞きたいというのだ？」

「昊。その前に、私から質問があります」

いつのまにかドクターが、私の前に居た。

(そういえば誰かに似てると思ったたら、この天帝様、ドクターに似てる……?)

玉座の玉皇大帝と、ドクターを見比べて、そう思った。

しかし、玉座側では、今度は九雷元帥が一步前に出た。

「天真、よせ」

「いや、聞こう。その悲愴な顔は久しぶりに見る。東宮を辞退したとき以来か。」

いや、お前がその手で緑麗の魂を取り出したとき以来か？」

「……ッ」

ドクターの背中が僅かに揺れた。玉帝の言葉に怒ったのかもしれない。

「兄上、いや、いまはただの大夫だったな、天真。政を嫌って世を儂い、小市民

として暮らしているお前がなぜここに現れた」

(あ、兄……ッ?)

私の驚愕を余所に、ドクターは怒りを抑えた静かな口調で言った。

「私は世を憐んでいるつもりは全くありませんよ。東宮を辞退したのも、自分の能力は争いのためでなく、何かを生かすために使いたいと思ったからです」

「そんな話をしに来たのではなからう。用件はなんだ？」

「貴方が、緑麗に極刑を科した理由はなんですか？ 当時、どう考えても緑麗に叛乱の意思は無かったはずですよ」

「だが、叛旗を翻したのは事実だ」

「その叛乱自体が茶番だとしたら？」

「どこにそんな証拠がある」

「証拠もないし、証言する人も居ません。しかし、そう考えなければおかしい部分がたくさんありますから」

「刑吏府(※法務省のようなお役所のひとつ)の役人にでもなったつもりか？ そんなことが聞きたくて、数千年ぶりに殿上したのか、兄上」

「ええ……。私はただの市民です。法を犯さないと貴方には逢えませんからね」
その言い方には、決死の覚悟さえある。

「しかし、無駄足だったな。あの事件を掘り返しても何も出てはこないぞ。一人の馬鹿な将神がトチ狂っただけの話よ」

「……違う！　何かあったはずだ。貴方がたには――。貴方は緑麗を信頼していたはずです。もしかすると、本当はいまここに居る九雷よりも」

「くだらんな。その夢見がちな推論に何の意味がある？」

「そして、それは緑麗も同じだった……。なのに、なぜです!?　なぜ、あんな悲劇が起こらなくてはならなかったのか！　貴方はその理由を知っているはずですよ、昊！」

こんなに真剣で激しいドクターを、私は知らない。

(ドクター、あなたにも疵があるんだね……)

改めて、そう思った。

皆、三千年前の事件に心を痛めていて、それをずっと引きずっている。

九玄娘々もドクターも、そして、陽輝大将も九雷元帥も。

「私も知りたい。緑麗が自ら地上に降りたその理由を、是非、聞かせて頂きたい」

私はあの夢のビジョンを思い出していた。

確かに、緑麗は地上に興味を持っていたが、そのために叛旗を翻したとは思えない。

「……」

波の打ったような玉座の間では、皆が玉帝の次の言葉を待っていた。が、この人は真実を語るつもりはないんだろう。

「昊、答えて下さい！」

焦れたドクターが更に前に出た。

「お前がそれを知る必要はない。大事なのは事実だ。緑麗は私に叛旗を翻し、私は為政者として当然の処置をした。それだけだ」

「そんなはずは——！」

「それほど後悔するのだったら、お前は緑麗の処刑に立ち会うべきではなかったな……」

「私にも緑麗との約束があるのです。知っていますか？ 貴方は――。彼女はただ、憂いでいただけに過ぎない。この天界が、いつしか麒麟と黄龍に滅ぼされることを。だから、緑麗は天界に残された心残りな二人のことを、私と陽輝に頼んだのです」

「……“二人”？」

「陽輝には九雷を、そして、私には貴方を頼むと、それだけを言い残して、一人、地上へ落とされた緑麗の想いが、貴方に分かるんですか!？」

ドクターの悲痛な叫びが、やっと玉帝を激高させた。

「黙れ、天真ッ！ ……それ以上言うと、例え血を分けた兄とはいえ、許しはしないぞッ！」

怒りに震えた玉帝が立ち上がって叫んだ。

「いいえ、黙りません！」

「よせ、天真！」

咄嗟に二人の間に割って入った九雷元帥は、ドクターの心情が分かっているようだった。

「頼む、天真。抑えてくれ——」

「九雷、もう時間がないんですよ」

「……!?!」

見れば、玉帝が玉座の肘掛を掴んだまま、床に座り込んでいる。

「陛下！」

元帥と、両脇に控えていた近衛兵らしき兵士が駆け寄ったが、玉帝はそれを虫を振り払うようにして、遠ざけようとする。

「騒ぐな！ ……なんでもない」

「昊、貴方はもうまともには動けないはずですよ。それを押して普段通りに振舞うのは見事としか言いようがありませんが、そこまでして貴方が沈黙を守るのは、一体、なぜなんです——」

ドクターが、治療するためなのか、玉帝の傍に近付いたが、彼はそれすらも拒否した。

「触るな、天真。貴様は典医ではないであろうが」

「私の強さは変わりませんね……」

「私に構うな。緑麗の話を開かねばならぬ」

ドクターに半ば強制的に身体を支えられながら、玉帝は何とか玉座に座る。

「さて、お前が知りたいのは一体なんだ？ 緑麗」

「私は、貴方が『黄龍の保持者』にかけて呪縛を解いてもらうために来た。最初はな」

そう、それが、私のスタートだ。

「だけど、ここに来て、事実を知るにつれ、段々変わってきた。だが、その事実も、人の数だけある。色々情報が入り乱れていて、いまじゃどれが真実なのか分からない。それはなぜか。親友にはさんざん馬鹿と言われている私の頭で、私なりに考えたわけだが、それはつまり、それぞれの主観ってやつが入ってるからだ。だから、私はどの話も信じないことにした」

「……？ それで？」

「私は、別に貴方に真相を教えてもらいに来たわけじゃない。ただ『話をしに来た』と、言わなかったか？ 全ての当事者の話を聞けば、自ずと真相も見えてくると思うんでね。だが、決定的に足りないのが、一番の当事者である緑麗の主観

だ。緑麗が何を考え、どういう結論に達したか——。それは誰も知らない。緑麗の記憶は、貴方に消されたというのが『事実』らしいが」

「……」

「恐らく、その記憶の中には、何か一番大事なことが隠されているはずだ」

「緑麗の記憶を戻すことはできんぞ。それも刑の一部だからな」

「そうだろうな。だから、私は私の考えで、私なりの結論を出すことにした」

「その結論とは……？」

「私は貴方を、倒す——」

手にしていた秀光を、鞘のまま玉帝に向けた。

「……」

ドクターが息を呑んだ。

元帥は仮面を貼り付けたままだし、脇に控えている近衛兵達も啞然としてい
る。

玉帝は、フツと笑っただけである。

「呪いをかけた張本人を倒せば、その呪いも解けるだろう。よしんば解けなくて

も、貴方は私の敵だ」

「……」

「神仙にとって、甲斐馨なんて人間は、取るに足らん存在だろう。放っておいてくれた方が良かったんだが、たまたま将神の生まれ変わりだったために、私は多大な迷惑を蒙った。その諸悪の根源を倒さないと私の平穏な日々は戻ってこない」

「なるほど、闘って勝ち取るか。緑麗、お前はどこまでも将神のようだ」

「私は沙龍。ただの人間だ」

「フン……。だが、それで話が終わりなら、次は、この天界に許可なく潜入し、恐れ多くもこの火雲宮に乗り込んできた罪をつぐなってもらおうぞ」

「昊、何を……!?!」

「侵入者二名を捕らえよ！」

その一声の下に、近衛兵達が動いた。

「治癒能力が厄介だ。天真を嚴重に拘束しろ」

「……ッ！ 貴方は為政者としてでなく、軍神としての誇りまで捨ててしまったのですかッ!？」

ドクターが叫んだ。

「誇りだと？ 笑止！ この世界の存続の前に、神一人の誇りなど、何の役に立つというのか！」

「ドクター……っ！」

私が動く間もなく、ドクターは二人の近衛兵に簡単に取り押さえられてしまった。

「……っ!？」

そして、私の周囲にも自動小銃を構えた近衛兵が集まる。

こちらはさすがに武器が最新鋭だ。

迂闊には動けない。もはやこれまで、という絶望的なシチュエーションか。そして、ゆっくりと、九雷元帥が階段を降りて来た。

私は董天に教わった全ての知識を片っ端から検索しようとして——、やめた。そもそも董天自身がこの人の手足なのだから、私にはもう、どうしたって勝ち目はないってことに気付いたのだ。

「……」

「……」

無言で交わす視線が痛いぞ、コノヤロー。

(どうする……？ どうすれば、この絶望的なシチュエーションをひっくり返せる……？)

それを考えたいのに、考えなくちゃいけないのに、私を見つめる九雷元帥の黒い瞳が全てをことごとくりセットしてしまう。

「なぜ、来た……？」

「……？」

「俺の処に居れば、その命を無駄に縮めることも無かったというのに、なぜ来

た」

「……本当の答えを聞きたい？」

もう、これしかないな。

陽輝大将との約束を果たす方法が、一つだけあるとすれば、もうこれしか無い。

策はないし、私に泣き落としはできない。

脅しはこの人には通用しないし、ハツタリなんでもっと通用しない。

といっても、これを母国語で言うのは、実はかなりしんどい。日本語ならまだいいんだけど。

でも、まあ、いいや。

多分、嘘じゃないから、嘘っぽくはならないだろう。

「我愛你」 (I Love you)

「……」

元帥が息を吞んで、絶句した。

なのに、この人は信じられない言葉を続けた。

しかも——、微笑んで。

「我也」 (me, too)

「……」

うわ……、やられた。

この展開は予想してなかった。

いや、そもそも、どんな展開も予想してなかった。我ながら、阿呆だ。こう言ったらこうなる、とか、普通考えるだろう。

私の方こそ絶句して、二の句が告げないでいた。

でも、いつまでも呆けてるわけにもいかない。

「なら、あなたが『そこ』に居るのはおかしいよ」

とてもそういう状況じゃなかったけど、手を差し伸べてみた。

「請回来到我」 (please come back to me)

私これがするのも、おかしいかもしれない。

ここは、私の住んでいる世界じゃないし、私は招かれざる来訪者なのだから、普通に考えれば、この絵は絶対おかしい。

でも、『私の陣営に』という意味では間違っではないはずだ。

「……」

この手を取ることが何を意味するのか、当然、元帥には分かっているだろう。気の遠くなるような年月をかけて挑んだ彼の計画を、放棄させるわけだから。しかし、元帥は微笑を崩さずに、言った。

「……それは反則だぞ」

「分かってる」

「……俺は、最初からお前の味方だ」

「それも、分かってる」

元帥が、更に微笑んでゆつくりと私の手を取ったとき、その瞬間の私の凶悪な笑みを、キサさんあたりが見たら頭を抱えるかもしれない。

「小龍、もう一人、パーティーに招待してこい！」

「キューウ！」

私の肩から離れ、小さな龍は空に舞い上がった。

壇上からは玉帝が青い顔をしたまま、この成り行きを見ていた。

「……」

そして、ドクターは両脇の近衛兵に拘束されながらも、微笑んでいた。

さて、これからどうしよう、と思ったとき、元帥が玉座に一礼した。

「陛下、お赦しを。私には、かつて愛した者を捕らえることはできません」

「フン、下手な芝居はよせ、九雷。お前の腹など、知れている。その女を使つて、黄龍を手中にしようというのだろう。だが、それでは足りんのだ……。それだけではな——」

と、咳き込む玉帝が、今度こそ血を吐いた。

私と同じだ。

あれは、私と同じ症状。

「昊……！」

ドクターが左右の近衛兵を振り払って、玉帝のもとに行こうとしたが、無理だった。

「緑麗……、お前は正しい。その命尽きるまで、運命に抗おうとするお前は、どこまでも正しい。しかし、それでは朕は倒せんぞ。『そのまま』では決して、倒

せはしまい……。甲斐馨、お前はここで己の無力と無謀を悔いて、死ぬがいい――！」

「……っ!？」

私と元帥を囲んでいる近衛兵達が、一斉に銃口を向けたそのとき、グラツと地面が揺れた。

いや、地面ではなく、建物全体が揺れたのだ。

そして、派手な爆発音がして、天井があっけなく崩れ落ちてきた。

「沙龍！」

あれ？

「……謝々」

単に標高差のおかげか、それとも元帥が微妙に庇ってくれたおかげか、私はその瓦礫を浴びずに済んだ。

しかし、丸見えになった空を見上げて、こちらにはお礼を言うつもりはない。

「ちよっと！ 危ないじゃないよ！ もうちよっと狙う場所を考えてよね！」

すると、飛龍に乗った陽輝大将が、悪びれもせずに言う。

「あー、わりい。目算間違えたワ」

玉座の間は、陽輝大将が撃ち込んだ対戦車ミサイル級の弾頭により、見るも無残に半壊した。

かろうじて玉座は残っているが、そこに座っていた人は消えている。

「派手にやってくれちゃって……」

そこここに倒れている近衛兵を踏み越えて、とりあえず外に出ようとしたら、急に身体が軽くなって浮いた。

「あれ……?」

それは、キサさんが掃除機をかけるときによくやる、私の襟首引っ掴んでどかせる乱暴な方式ではなくて、限りなくソフトに腰ごと持ち上げるような――。

「沙龍、無闇に動くな」

私を片手で持ち上げて、九雷元帥はそのまま外へ出た。

なに、この、いきなりの保護者みたいな態度は。

この人も、どこかイカれたんじゃないだろうか。

「あゝ、元帥……？」

「……なんだ」

……と言われてもなあ。

「さっきのは苦し紛れの冗談です」とか、いや、いつそ、もう「結婚してください」とか言って、笑い話にしてしまおうかと色々考えたけど、このシチュエーションではそれも無理だった。

なんでこんな非常時に？ とか、言われたって、それは私が聞きたい。

気付いたらそうなっていました、としか答えられないわけだから。

「あゝなあ……、お前ら……」

陽輝大将の呆れた声が聞こえるけど、無視してこの初歩のラブシーンを続けていたら、今度はドクターの疲れた声が聞こえた。

「まあ、放っておきましょう……」

さつきまで青空が広がっていたはずの火雲宮上空は、俄かに暗雲が立ち込めていた。

ニヤニヤしながら何か言いたげな陽輝大将に、九雷元帥が先に言った。

「沙龍をそそのかしたのは、お前か、陽輝」

「人聞きの悪い。俺は三人で一緒に飯を食おうぜ、って言っただけだぜ？」

元帥は軽く溜息をついたが、その顔は嬉しそうだった。

でも、本番は、これからだ。

この紫色に変色した空を、私は見たことがある。

これが、何かの前兆だというなら、私は、何度も見たことがある。

この暗雲は、神獣……いや、魔獣出現の予兆だ。

暴れ狂う魔獣が、この空を我が物顔で駆ける姿を、私は何度も見た。

「分かったよ……。なんで『いま』なのか」

麒麟の保持者である玉皇大帝も、黄龍の保持者である私も、どちらも限界に来ている。

このままでは、二者がぶつかり、あの夢の中のシーンのように、空と大地を巻

き込んだ殺し合いが始まる。

それを避けることはできない。

だから、『いま』なのだ。

どちらかが、どちらかを確実に倒さなければならない。

そして、九雷元帥も、陽輝大将も、どちらにつくのか、最初から選んでいたんだ。

三千年前から、その準備をしていたんだ、この二人は。

あとは、私の決心だけ――。

でも、そんなのは、私だって、日本の狭いバスルームでとつくに決めてきた。

秀光をギョツと握り締めて、二人を見た。

「じゃ、行くか？」

陽輝大将があっさりと言う。

「うん」

しかし、元帥は厳しい顔をして、言った。

「待て、陛下はもとより、麒麟は黄龍の真の力でなければ倒せないはずだ」

「で？ いまから何か策でも練る時間があるのか？」

「……」

元帥は更に厳しい顔をして黙った。

「策なんかなくていい。最悪、世界が滅びるだけだ。簡単だろ？」

「無茶な——」

「無茶は承知。だけど、私はやるよ」

だって、私は、そのために来たんですから。

「なぜだ？ 記憶もないのに、なぜその結論に至り、しかも、なぜ、そんな無茶な闘いに挑む？」

「ふう……、元帥は『なぜ』が多くて困るな」

と、笑って言ってやった。

「お前が言ったんだぜ。記憶があるうとなかろうと、緑麗はここに戻って来る、ってな」

「……」

「いい加減、諦めな。お前は俺と緑麗に振り回される運命なのよ」

「そうだな……。どうも、そうらしい……」

火雲宮の広大な敷地には、何棟もの建物があり、それぞれエリア分けされている。

その一つ、本殿から北西の方面にあるエリアに、一人の若者が空を見上げるようにして立っていた。

滑走路程もある道路の真ん中で、他の人影はない。皆既日食のような暗さの中で、それは少し異様な風景にも見えた。

なぜなら、彼は銀白の髪をしており、全身から放つ光彩もまた、一際異様なのである。

しかし、服装は、場違いと言っているくらい、ラフだった。

年齢は、かなり若く見える。

人間で言えば二十歳前後といったところか。

本来、このエリアに居るのは官吏か軍属に限られているはずだが、彼はそのど

ちらにも見えない。

「……」

不気味な静寂が支配していた。

銀白の髪如若者、白帝白虎聖君は、ポケットに両手を突っ込んだまま、とぐろを巻くような暗雲を見据えている。

これを西域の外れから見たのは、何年前だったか――。

緑麗は自分達には何も言ってくれなかったが、その暗雲が長い長い闘いの始まりであることは、白帝君には分かった。

「結局……、三千年もかかっちゃったな、阿姐」

四方将神の中でも一番読心術に長けている白帝君には、緑麗の思考がある程度読めた。

だからなのか、緑麗は決起する前になると、白帝君を遠ざけるように、任地に駐屯することを命じた。

白帝君にとって、緑麗は上官になるので、その命令には渋々従った。

しかし、遠く離れた帝都で何が起きているのか、感知することはできた。それが四方将神というものだ。

叛乱の最中に、青龍広君が死んだときは、青龍広君自身の無念と、朱雀星君の深い嘆きも五行の気脈を通して伝わってきた。

だが、自分にはどうすることもできない。

中立を守る本能を備えた白帝君には、官軍賊軍のどちらかに同調するといったことはなかったし、緑麗が敢えて自分を遠ざけた意図も理解していたので、そのまま自分の任地である西域に留まっていた。

緑麗が処刑され、帝都に仮初の平和が戻ったとき、白帝君は自ら火雲宮に出頭した。

青龍広君以外の四方将神達は謀反には参加しなかったが、朱雀星君が玉帝により幽閉されたので、その様子見を兼ねて出向いたのである。

「白帝君、お前に叛意がないのは分かっている。だが、赤帝君は敖広の幫助という大罪を犯した。本来なら極刑を科すところだが、緑麗を捕らえた功績により罪一等を減じたまで。無罪放免にすることはできぬ」

玉帝は、謁見を申し出た白帝君に直々にそう言い渡した。

「天帝サンよ、建前は分かった。でも、それは本音じゃないだろ？俺は今日は腹割って話に来ただぜ」

白帝君は、普段からこういう物言いをする。

四方将神は玉帝の直接の臣下ではないので、不敬罪を問われることもないのだが、それでも無礼であることに変わりはない。

が、玉帝は、白帝君のこの自由さというものを結構気に入っていた。

「相変わらず腹芸をしない奴よ。太上道君から受け継いだ洞察力も伊達ではないといった所か」

ひとまず、朱雀星君への面会は許されたので、彼が幽閉されている場所へ出向いた。

そして、やつれてはいても固い決意を崩さぬ朱雀星君を見て、白帝君もまた、何かを決意した。

「なあ、阿哥、もしこのまま大人しく蟄居する気なら、話相手くらい必要だろ？」

そう言つて、強引に転がり込んだのである。

「呆れた奴だな。自分から罪人になりたがるなんて」

「阿姐だつて似たようなもんだろ」

「……好きにしろ」

白帝君にとつて、同じ西域出身の緑麗は上官というより姉代わりだったし、何かと面倒を見てくれるこの朱雀星君は同僚というより兄代わりだったので、こういう結果になつてしまつたとしても、誰を恨むという気持ちはなかつた。

それに、緑麗の本意と、玉帝の本意を計らずとも知つてしまつた白帝君には、こうするより他なかつたのかもしれない。

ただ、この生活は白帝君にとつてそれほど苦にはならなかつた。

ひたすら時を待つというのは、人によつては狂うような地獄かもしれないが、生来の彼の気質からすれば、どうということとはなかつた。

世間的には死んだことにされ、表通りを堂々と歩くことはできなくなつたが、自墮落に昼まで寝て過ごす生活は、気楽でもあつた。

勿論、朱雀星君からは何度も小言を言われたが。

そうして、いま、再び火雲宮の敷地に降り立ち、暗雲を見つめる彼にとって、この空は待ち焦がれていたものだったかもしれない。

「大哥、あんたの無念をあの旦那が果たしてくれんのかどうかは分かんねえが、少なくとも大哥は間違っていないかと思うぜ」

白帝君は先代の青龍を敬意を込めて『大哥』と呼んでいた。

四方将神達のリーダー的存在だった敖広は、東海龍王家の嫡男でもあり、人望も高かった。

気侷な白帝君も、朱雀星君のお小言は右から左に流せても、敖広には頭が上がりなかつた。

それ故に、思慮深いはずの敖広が、緑麗の叛旗に乗じて、別個に玉帝を討とうとしたのは、他の四方将神にとつてはまさに青天の霹靂だった。

緑麗が自分の腹を明かしていなかつたのは、敖広に対しても同じだったはずなのに、なぜ敖広が先走つて玉帝を討とうとしたのか、白帝君は理解に苦しんだ。

（阿姐には一計があるんだ。それを、大哥がやつちまったら、犬死にしかならねえじゃねえか——）

白帝君は、カヤの外でそう思った。

しかし、それも、敖広の死がもたらした五行の乱れで分かったのである。

(そうか、そういうことか……)

敖広は、自分の仕事をしようとしただけなのである。

つまり、四方将神としての仕事、である。

(そうだな、大哥。あんたはいつだって、正しいことしか言わないし、やらねえ)

中央に位置する強大すぎる力を『調整』するのが、彼等、四神に課された役割なのである。

ならば、ぶつかり合う二つの力を、青龍の本能として『制御』しようとした敖広は正しい。

しかし——、と白帝君は思うのだ。

(あんたはそれで良かったかもしれない。逆賊として葬られようが、無念を残そうが、誇りを持って殉職できたあんたは、それで満足かもしれない。だがな——)

白帝君は、天に片手をかざし、届かないのを承知で言った。

「かつこよく散るより、無様に生き残る方がよっぽどカツコイイって、俺が証明してやるよ——、大哥」

白帝君が玉京宮に向かうと、既に、そこには律儀に正装を纏った朱雀星君が待っていた。

「遅いぞ、聖霄（※白帝君の字）。もうすぐ陛下も見えられる」

「へいへい。分かってますよ」

「……」

いつもは口やかましく小言を言う朱雀星君も、さすがに今日はそれ以上の説教はしなかった。

1 阿姐は「お姉ちゃん」、阿哥は「お兄ちゃん」の意味だが、白帝君は血縁関

係からそう呼んでいるわけではない。「大哥」も本来は長男の兄に対して使う言葉だが、「兄貴」という訳し方が一番ポピュラー。

木佐小次郎は、玉京宮の宝物殿に居た。

そこは、火雲宮の本殿からはそう遠くない、皇族のプライベート・エリアに当たる。

本来なら厳重な警備がされて然るべき場所だったが、辺りに人影は見当たらず、更に途中で出くわした董天のおかげで、簡単に宝物殿まで辿り着くことができた。

木佐は松木の指示で、董天は九雷の命令で、ここに来たのである。

「確かに、美人だ……」

しかし、そう呟く木佐に特別な感慨はなかった。

木佐がいま見ているのは、宝物殿のほぼ中央、頑丈なガラスケースに横たわる緑麗の身体だった。

「その御方が、かつて天界で地位と名声を欲しいままにしていた将神、緑麗様で

す。私は直接お会いしたことはありませんでしたが」

董天が、木佐の背後から言った。

「彼女は三千年もの間、こうして眠っているんですか？」

「そうなりますね。ただ、仮死ではなく、完全に死んでますが」

「え……？」

「魂魄を取り出した直後に身体の時間を凍結させてあるんですよ。よっぽどの力量がなければできない技ですけどね」

「そんなことが出来るんですか……」

「施したのは、天真大夫です。あの方は、それを三千年間悔やんでもいるようですが」

「……」

「しかし、大罪人である緑麗様の身体がここに大切に安置されているのはなぜなのでしょうね。恐らくこの事実を知っているのは陛下と九雷様のお二人だけなのでしょうが。それを突き止めた貴方がたのお仲間はさすがです」

松木ゴローは突き止めたわけじゃない。

誰かから——恐らく九雷本人から——聞き出したのだろう、と木佐は思っていた。

「董天さん、僕は東京で会ったときから、貴方は馨の敵じゃないと思っていた。そして、それはいまも変わっていない。にも関わらず、ずっと付き纏う不安のようなものがある」

木佐は、いい機会だと思ったのでその話をした。

「私が沙龍様を裏切ると？」

「いいえ、そうは思いません。水雲宮から逃げるときも、九玄さんが現れたことで、貴方はホツとしたようにも見えた」

「そうですか？」

董天は、怖いほど事務レベルの応対だ。

「ただ、貴方は底が知れない。九雷元帥と馨という二人の策士に仕えながらも、その実、何にも縛られていない。自由、いや、虚無と言えるかもしれない」

「フ……、昔、貴方に同じようなことを言われましたね。そうそう。これは言うておきましょうか。私は昔から貴方が嫌いでしたよ、黒帝玄武佑君——。貴方が

感じる不安は、もしかしたら、その過去に起因するのかもしれないね」

木佐は顔をしかめた。

「過去に何があったんです？」

「特に何があったわけでもないんですがね。それに、話したとしても、私の、そう、この『虚無感』ですか？ 貴方に言わせれば。それは、貴方には一生分からないでしょう」

「……」

そのとき、木佐は、ふと何かを感じて、辺りを見渡した。

「なんだ……？」

これは、人の気配とも、殺気とも違う。

董天もその気配に気付いたのか、いままでの営業スマイルを完全に消した。

「どうやら、我々の仕事の時間のようですよ」

（『仕事』……？）

董天はどうだか知らないが、木佐が言われているのは、この緑麗の身体を護ることである。沙龍が望むと望ままいに限らず、この『身体』は沙龍の生命線とな

るからだ。

「鼠が二匹、か」

その声がした方を見れば、青年が一人、ひっそりと立っている。

とても屈強な武人には見えないが、天界で、いや、この世で間違いない一番の力を持った人物である。

木佐にも、その途方もないキャパシティは理解できた。

（これが、『玉皇大帝』か——）

嚙下する木佐の隣で、董天も顔を強張らせていた。

「どうやら、九雷様はとんでもない賭けをしてしまったようですね。あの方らしいと言えばそれまでですが……」

董天は独り言のようにそう言つて、玉皇大帝の前に恭しく跪いたが、それが形だけであるのは、木佐にも分かる。

「玉皇大帝陛下、御自ら、このような場所に何の御用でしょうか。我が主君よ、ここには関係者以外一步も入れるなど仰せつかっておりますが」

「血迷ったことを申すな。天界の主君は、朕一人よ」

玉帝は感情の一切こもらない言葉と動作で、董天を踏みつけた。

「……っ!？」

すると、何かに撃ち抜かれたように董天の身体が一気に崩れ落ちた。

木佐は突然の出来事に身構えながらも、まだ辺りを見渡していた。

(いや、違う。さつき感じた気配はこの人じゃない。『これ』は……、まさか……)

木佐が思った通り、玉帝の背後の暗闇に、二人の『神』が現れた。

「裏切り者の真武君よ。よもや、そのような姿でここに現れるとは思わなかったぞ。地上を彷徨い、力も誇りもなくしたか」

そう言った深紅の髪を持つ背の高い男は、既に長刀を構えている。

しかし、もう一人の若い方の男は、ニコニコしながら言った。

「よ、玄ちゃん、久しぶり」

「朱雀星君と、白虎聖君——、か」

木佐にとっては、自分と同質の力を持つ者たち、である。

34 董天の過去

約三千四百年前――。

「おい、知ってるか？ 金熬島の遠征には筆頭で北方軍が借り出されるらしいぜ。しかも今回は元帥閣下が指揮するんだと」

「へえ、北方軍と言ったら例の緑麗大将じゃねえか。すんげー美人なんだよな、コレが！」

「なにッ？ お前見たことあんのか？ くー、羨ましい！」
守衛達がそんな噂話をしている。

俺はうんざりしながら、天界軍参謀本部への門をくぐった。

今日で五回目だ。その名を聞いたのは。

下級の守衛までこの有様だ。天界軍は一人の女に骨抜きにされちまったのか？ その緑麗ってのはナニモンだよ？

しばらく留守にしている間に、帝都も様変わりしたもんだぜ。まったく、やってられねえ。

俺の名は、董天。本当の名前はもう覚えちゃいない。一応、この名で軍籍を取ってるので、名乗っているというだけの仮の名前だ。

任務のたびに名前を変え、身分を変え、参謀本部のお偉方が知りたい情報を探ってくるというのが俺の仕事だ。

いまじゃ、そこそこの収入もあつて、そこそこの生活をしちゃいるが、昔は天界でも最下層のスラムに居た。

あそこの暮らしは最低だった。どう最低なのか、話したくもないほどにな。当時、ケチな詐欺まがいの商売をしていた俺は、仲間と共にカモにする客を探して街を歩いていた。

そして、あいつと会った。あの忘れられない目をした男に。

一見弱そうにみえたもんで、カモろうとしたら、実はとんでもなく強かった。

仲間数人はあつという間におねんねだ。腰の抜けた俺は眼力だけでビビらされた。魔界とやらに住んでる魔王ってのはこういう奴かと思ったね。

しかし、俺が口八丁で逃げようとしたら、そいつはなんの気まぐれか、天界軍の諜報部員にならないかと持ちかけてきやがった。どう考えても物好きだぜ。

「だ、旦那ア、何の冗談で？」

「結構、向いてると思うがな。やる気があるなら、俺が推薦状ぐらいは書いてやる」

チャンスだ、と思った。

ここより酷い場所なんて、あるはずがない。ここを抜け出せるなら、なんだつてやってやるさ。

その男は、俺が『是』と言うと、その場で推薦状を書いて寄越した。

確かに、その一枚の紙ッ切れには絶大な効力があつた。次の日、それを持って帝都に行ったら、朱雀門の門番には偽筆だと疑われ、どこかの一室に引っ張って行かれた挙句、高尉クラスの士官が三人も出てきたくらいだからな。

しかし、結局本物だと証明され、俺はすんなりと軍属になって働くことになつ

たのだ。

なんてこった！

昨日まで路地裏の泥水啜ってた俺が、末端とはいえ、天帝陛下の臣下になつたつてののか、おい？

推薦状を書いてくれた男とはそれっきりだったが、まあ、こんなロクでもない俺を拾って、定職に就かせてくれたそいつには一応感謝している。

そう年も変わらない、すかした野郎だったが、VIPの気まぐれってやつかね。

まあ、そんなことはどうでもいい。

最初は、この仕事も結構スリリングだったぜ。

それまで、色んな商売を渡り歩いていた俺には、結構その手の才能があったらしい。

女を騙して情報取るなんざ朝飯前だったし、役者気分で自分の作り上げた役になりきるのも面白くて、周りの奴らがそれを信じ込むのがさらに面白かった。

ロクに学校も行っていない俺が育ちのいいお坊ちゃんになったり、お偉い仙人様

になつたりできるんだぜ？

まあ、面白かったのも初めのうちだけだったけどな。

数年もすれば妙に手慣れちまつて、事務的に仕事をこなす自分が馬鹿みてえになつてくる。

任務を言い渡され、潜入先の事前調査をし、目当ての人物に近付く。目的を達成したら、あとはトングラだ。勿論、アフターケアだって、ある程度する。

そんな、普通の奴に言わせれば非日常的な毎日を繰り返しているうちに、気付いた。

たまにやばい橋を渡つたりすると、日頃の憂さが微かに晴れるということに。達成感とか、そういうモンじゃない。

騙された奴が、それに気付いて、なり振り構わず俺を殺そうとする。特に、女なんて酷いもんだが、その狂気に満ちた顔が、妙に俺を掻き立てる。いつだったか、女に刺されて生死の境を彷徨つたときは、安物のドラッグの昂揚感以上の興奮を感じたものだ。

死ぬのか？　とうとう俺は、こんなツマらねえ、お似合いの死に方をするの

か？ ——そんな風に思うことが、おかしかった。

何がおかしいのか分からない。

とにかく、危険な仕事さえやってりや、こういう死ぬ間際のギリギリ感ってやつを体験できるって分かった。

そんなこんなで、俺はいつしか、誰もやりたがらないような汚れ仕事ばかりを進んで引き受けるようになった。お偉方にとっちゃ、イイ駒だろう。

そうして、名指しで入る仕事も出てき始めた頃、俺はとある場所に呼ばれた。

その日、俺は久しぶりにいい気分だった。

俺を、直属の部下にしたいと言って来た男がいるという。その男こそ、俺を諜報部員に推薦した、九雷という男だ。

俺が覚えているときは、どこだかの次官をしていたはずだが、俺が仕事でしばらく帝都を離れている間に、奴はなんと天界軍のトップにまで昇り詰めていた。いまじゃ、泣く子も黙る元帥様だ。

あの若さでは異例の人事だと噂され、さらに、出自に関する噂が小声で囁かれていたが、俺にとってそんなことはどうでもよかった。

真つ当な方法にしろ、裏技を使ったにせよ、現在、トップの座に座っていると、いうその事実こそが、紛れも無い、あの男の実力だ。

あれは只者じゃない、と思つた俺は間違つちやいなかったぜ。

そして、その只者じゃない男に指名されたということに、俺はひどく気を良くしていた。

しかし、だぜ？

巷の噂で、「九雷元帥」という言葉と同じくらいに、いや、それ以上に出てくる「緑麗大将」という名前には、正直うんざりした。

聞けば、大層な美貌で、大した腕の持ち主だというが、そんなのはたかが知れている。軍隊を女が指揮してんじやねえよ、と、みなが思わないのが不思議だ。

俺は女は別に嫌いじゃないが、強い女と頭のいい女は嫌いだ。

とにかく、その女が、俺のいい気分をぶち壊したってことは間違いない。

「久しぶりだな。『自殺志願者』と仇名がつけられているのを知っているか？」
既に元帥の貫禄を身につけたその男は、会うなりそう言った。

「危険な仕事ばかりしているのもですから。影でそう呼ばれているのは存じて
おります」

最近の俺は、お偉いさんと話すときはこんな風に畏まることも覚えた。
しかし、この男の前では、これは演技ではなく、本物だ。

こんな静かな威圧感の前で、虚勢張れる奴が居たら、見てみたいぜ。

「アドレナリン・ジャンキーか……。どうだ？　しばらく俺の下で働かないか？
俺なら、お前の希望を多少なら叶えてやれるぞ」

全てを見透かすような目でそう言われた。

「私は貴方に拾われた身です。粉骨碎身、お仕え致しましょう」

「文字通りになるかもしれんぞ。いいのか？　俺は、お前の死に場所を提供して
やる、と言ってるんだ。それも、最高にスリリングなやつだ」

笑いがこみ上げてくるような、背筋がざわざわするような昂揚感というもの

を、俺は生きてから二度目に味わった。一度目は、この男に会ったときだ。

「御意」

心はとつくに決まっていた。この男に最初に会ったときから。

それからの俺は、九雷様の信頼を得ようと必死になった。相変わらずやばい仕事ばかりを好んだが、諜報部と違って、九雷様の仕事は何のバックアップもない文字通りの単独行動だ。少しのミスでも命取りになる。同僚の中には、いつの間にかいなくなった奴も多い。中には九雷様自身によって消されたのも居ただろう。

しかし、俺は持ち前の要領の良さで、何とか仕事をこなしていた。

そして、だいぶ信頼を勝ち得たと思われる頃、全ての発端となった、あの事件が起こった。

恐らく、天界史上、最初で最後の謀叛人となった、緑麗の決起である。

仕事で色んな名前を名乗ったが、その中で一番長いのが、これだ。

『清源妙道真君』

崑崙の仙人に化けていたときの名だが、ここでの仕事は情報操作がメインで、仕事自体はわりと地味で簡単なものだった。

どちらかというところ、仙人修行の方が困難だった。

なにせ、俺達は本物そっくり完璧に化ける必要がある。普通の官吏になるくらいならわけもないが、これが特殊な職業だと、今回みたいに本業そっちのけ状態になる場合もある。

だが、俺は道士の修行は積んだことがあったので、それほど時間もかけずに仙人に化けることができた。

寶貝も使えるようにもなったし、一応最終的な秘術も納めた。

そして、カモフラージュに、気まぐれに地上で人間に善行を施したりして、本物の仙人以上に仙人らしい暮らしをしながら、いつものように裏ではきっちりと本来の仕事をこなしていた。

そんなとき、天界から逃げてきたあの不愉快な男に会った。

「真武君、と仰いましたか。もしや、あのご高名な？」

（そうだ。コイツはあの変人と名高い、博識を鼻にかけた、嫌味な黒帝玄武佑君じゃねえか）

「高名かどうかは知りませんが、四方将神として天界に仕えていたのは事実です。ですが、いまは流浪の身、どうかお構いなく」

「いえ、そうも参りません。困っている方を助けるのも、我々仙人の勤め」

（別に好きで構ってんじゃねえよ。西王母が受け入れるっつーから仕方なく相手してんじゃねえか）

ここ、崑崙の仙道達は、大半が緑麗の叛乱に付き合った酔狂な輩だ。

しかし、それも崑崙の全体意思ではないと西王母が貫き通していることと、崑崙の仙道達は自分の脅迫により仕方なく参戦したまでと緑麗が裁判で主張したのもあって、天界への叛逆を不問にされているのが現状だった。

だが、そんなのは現場に潜入している俺から見れば、『公式見解』（＝真実に非ず）だ。事実関係は逆だということなどすぐに分かる。

緑麗が拒否したにも関わらず、仙道達の方が、無理矢理参加したのだ。それは、九雷様の推測とも一致している。

俺の仕事の一つは、その天界への反抗勢力に目星をつけ、そいつらを生かさず殺さずすることだ。

そうすれば、仙界は、天界の統治下に半永久的に存続する。それが、俺が最初に教わった天界の統治法とやらだ。

ま、要するにガス抜きってやつだ。

反抗の芽は完全に摘まないこと——。

だから、その反抗勢力には、希望をもたせる必要もあるのだという。

緑麗の処刑で意気消沈した奴らに、いつの日にかまた決起すべく夢を抱かせるってわけだ。平たく言や、出所がバレない噂をまことしやかに流すっていう地味な仕事だが、そんなのはスパイの仕事の初歩の初歩だ。

九雷様の仕事にしちやつまらない、と顔に出たのか（出したつもりはない。見抜かれたただけだ）、九雷様は、これは俺に仙道の力を身につけさせる機会だ、と言った。

仕方がない。上官の有難い心遣いだ。せいぜい、パワー・アップを図ってやるさ。

確かに、俺は路地裏で怪しげな薬を売っていた頃に比べると遥かに強くなったし、この仕事のおかげで随分物識りにもなった。

いまは、俺を殴って育てたあのババアにも負けないだろうし、無学だった俺をさんざん虚仮にしてくれた、あの女教師にも負けないだろう。

まあ、そんな話はどうでもいい。

問題は、なぜか俺の洞府に居座ることになった、あの元四方将神だ。

とつとと出て行って貰いたいところだが、俺の作った『清源妙道真君』という仙人格は、懐の大きい奴なので、そうもいかない。

チツ。こんなことなら、世捨て人で偏屈で人嫌いの仙人にしとくべきだったぜ。

さらに、うざいのが、よく訪ねてくる九天玄女だ。西王母に言われて真武君の世話を焼きに来ているそうだが、奴には優しいくせに、俺には妙に鋭い眼光飛ばしやがる。

こいつは確かに美人だが、見かけに騙されてはいけない。天界軍諜報部のブラックリストじゃ、かなり上の方に載ってる危険人物だ。確かに、どこにも隙の

ない立ち居振舞いをしている。

先の緑麗の叛乱のときも、先陣を切って、天界軍の猛者どもを薙ぎ倒してたつていう話だからな。小手先技しか使えない俺が敵う相手じゃない。

「ところで、真武君。御仁はあてがあって、どこかに行かれるおつもりなので？」

（お前が居たら、俺は仕事ができねえだろうが。早いとこどっか行きやがれ）

「地上へ行こうかと思っっています。私の生きる目的も果たす役目もいまは地上にある」

「黄龍のことですか？」

「そうです」

（緑麗を追っかけてった黄龍を追っかける玄武？ ……馬鹿じゃねえか、こいつら）

「我々四神は、もとより黄龍から発した存在。赤帝君と白帝君はその中央に抱く

ものに拘らないと言うが、私にはやはり麒麟を受け入れることはできませんでした。働く場を作ってくれた陛下の恩に背いてまで、天界を捨てた私を浅はかとお考えでしようが……」

「いえ。どこまでも一途で——。羨ましいほどの情熱です」

(あー、アホらしい。勝手にやってくれよ)

天界は、緑麗の叛乱以降、なにやら混沌としている。

同僚の仕入れた『トップ・シークレット』では、四神のうち、この真武君を残して全員が殺されたという話だが、俺にとっては、それはトップ・シークレットでもなんでもない。

真武君、あんたが殺されなかったのは、ラッキーだったってだけじゃないのか？

「地上へ逃れた黄龍を探し出すのは、大変だと思えますか？」

この世間知らずは、多分、人間界の広さってもんを分かつちやいない。

黄龍は今後、たった一人の人間の身体に宿るって話だ。そのたった一人をどうやって探し出すんだ？

地上は広いぜ？ 天界の何倍あるか、分かりやしない。俺も何度か地上に降りたことがあるが、恐らく、地上を知らないあんたは途方に暮れて終わるだろうさ。

「そうですね。でも、なんとかなるでしょう」

「……」

だめだ、こりゃ。

確かに確率はゼロじゃないが、仮に、ものすごい低確率で黄龍に出会ったとして、だ。

俺の最大の疑問はむしろ、こっちである。

「無粋なことを聞くようですが、黄龍と出会ってどうされるんです？」

「不思議なことを聞かれる。私は黄龍のために存在している。彼の者のために生き、彼の者のために死す。そして場合によっては、彼の者を滅するのが私の役

目」

「つまり、黄龍のそばで生きることそのものが、貴方の生きる目的、ということですか？ 私にはよく分かりませんが」

「では清源妙道真君、貴方の生きる目的は何なのです？」

（清源妙道真君？ ああ、俺のことか。いけねえいけねえ、あまりにも馬鹿げたこと聞くもんで、ここでの名前を忘れそうになったぜ）

「……」

（いや……、違う。俺は……、答えられない……？）

（俺の生きる目的？ そんなのあるわけないだろう。俺は死に場所を探して生きてる男だぜ）

「貴方のように、他者のため、でないことは確かです」

とりあえず、そんな風に答えておいた。

「それでは、貴方は自分のために生き、自分のために死す、と？ 一人で生き、一人で死すことに、なんの意味があるのでしょうか。それでは死者と同じだ」

「……」

「貴方はそんな今の生を歓びと感じたことはあるのですか？」

（生の歓び……？ ケツ……、育ちのいいお坊ちゃんが言いそうなセリフだけ）

「……」

（おっと、しかし、黙ったままじゃ怪しまれちゃう。ここはそれらしいこと言っておかないとな。俺は腐っても仙人様だ）

「貧道は、世を儂んでこのような洞に庵を結んでおります身。積極的な生きる目的や歓びなど、どうして持てましようか」

「その理屈はおかしいぞ。清源妙道真君。それではただの隠居老人と変わらぬげ。苦手な女が現れやがった。」

「これは九天玄女殿。何がおかしいと言うのです？」

「世を儂んでいる者が、なぜ不老長寿の仙人となった？ 私は、仙道とは森羅万象の理を追求する者と理解しているが」

出たな。このストイック・マニアが。

いい加減にしてくれよ。俺は俗人で、ただのスパイで、仙人の振りをしているだけだ。などと、プロらしからぬ弱音を吐くところだったぜ。

あゝ、九雷様、そろそろ戻ってもいいですかね？

そんな無駄な議論を続ける日々に、俺はいささか疲れてしまった。

そろそろボロも出ようかという頃合を見計らって、旅に出ると周囲に告げ、清源妙道真君はいずこへとなく消えた……ことになっている。

ある意味、神経消耗する仕事だったぜ。

真武君はその後、西王母の協力を得て人間に転生してもらおう道を選んだ、と同僚から聞いた。勝手に転生でもなんでもしてる。俺には関係ない。

そして、帝都に戻った俺は、九雷様から壮大なある計画を告げられた。

だが、さすがにこの計画は、俺には荷が重過ぎた。

「逃げてもいいぞ」という九雷様の言葉を真に受けて、俺は実際、本当に逃げるつもりだった。が、すぐに思い直した。

この人の「逃げてもいいぞ」は、「だけど、必ず殺すぞ」だ。惜しむ命じゃないが、それじゃ、九雷様が最初に約束してくれた『最高にスリリングな死に場所』は得られない。

そう。この計画の果てには、必ず、俺を満たす何かがある。

最高の昂揚感に包まれて死ねる場所がきつとあるのだ。

俺はその仕事を引き受け、一人、地上へ向かった。何のバックアップもなく、コネもなく、一から始めた。不老を怪しまれないためにも一箇所に留まるのを避け、各地を転々とし、地道な作業を続けた。

そして、この壮大な計画の仕上げとして、九雷様に言い渡された『最後の仕事』。

あれから、余る程の時間で身につけた知識と力——。これを以って、自他共に認めるベテランの俺は、どこまでも卒なく、この『最後の仕事』を勤め上げる自信があった。

実際、九割方は勤めたと思うぜ？

あの元将神の魂は、ちゃんと天界に戻って来たわけだからな。

だが、忘れていたぜ。

俺は、所詮、ケチな詐欺師だってことを……。

「董天さん！　しっかりして下さい！」

ああ、聞こえてるって、揺さぶるなよ。

だが、『そいつ』はあんたでも無理だ、真武君。

五行を自由に駆使できる力は伊達じゃないからな。九雷様だって無理だろう。

唯一、対抗できるのは、俺の育てたあのクソ生意気でどうしようもなく偉そう

な――、そう、カイ・カオルだけだ。

玉皇大帝が単独で宝物殿に向かったという連絡を、部下から受けた陽輝大将は、バイクで真っ先にそこへ向かった。

「相変わらず一番にこだわるヤツだな。沙龍、俺も黒焰で先に行く！」
元帥はそう言って、私とドクターを残して行ってしまった。

といっても、私も飛龍に乗って、いままさにその宝物殿とやらに向かっている途中だ。

ドクターには勿論、同道してもらった。

「ドクター、お願い。一回でいい。黄龍召喚できるようにドーピングして」
そう言うと、ドクターは絶望的な顔をする。

「公主！ 無茶ですよ！」

「心配しないで。最後の最後の切り札として使うから。もう自分でも分かるんだ。ここまで来るのに、体力も精神力もかなり前借りしちゃった。だから——」

「……」

「お願い、悔やみたくないんだ。このまま死んだら、絶対化けて出る」

「貴女は……、ホントに不良患者ですよ……」

ドクターは最後には諦めて、私の額に触れた。

そこらあたりから、私の記憶は曖昧で、ところどころよく覚えていない。

沙龍は玉京宮の宝物殿で信じられない光景に出くわしていた。

最も恐れたその光景には、叫び声すら出ない。

「キ、サさん……？」

宝物殿の最上階は、ほとんど原型を留めていなかった。その部屋の片隅に、血の海といった表現がピッタリの中、木佐が倒れている。

フラつく足どりで木佐に近寄ると、かすかに木佐の身体が動いたように見えた。

「……！！」

そして、何かを言おうとしている。

沙龍は、咄嗟にそばに駆け寄ってから、縋るような目で天真に振り返った。

「大丈夫、落ち着いて——」

そんな常套句を言われても、気休めかもしれない、と沙龍は思ったが、天真は手際よく木佐の応急処置を始めていた。

「……っ」

声にならない木佐の言葉が、その表情を覗き込んでいた沙龍にはほぼ伝わった。

木佐は血まみれだし、どう見ても瀕死で、ほとんど虫の息である。しかし、

「うん、分かった——」

そう言って木佐の懐から何かを抜き取り、沙龍は背を向けたのである。

玉帝の両脇に控える二人の男と、こちら側の九雷と陽輝が、一触即発な雰囲気を作っている。

が、沙龍にとっては、敵が増えようが味方が増えようが、そんなことはどうでもよかった。

沙龍にとっての敵はただ一人だし、この怒りを向けるべき相手も一人だった。

「貴様か……。私のキサさんをあんな姿にしたのは……」

怒りに染まった沙龍の目は、少し離れた所に立つ玉帝に向けられている。

秀光を握り締める手が、震えていた。

「そうだ。ついでに、そっちの小物もな」

玉帝の視線を追った先には、うつ伏せの董天が死体のように転がっていた。

「なるほど……。私の大切な親友と、世話になった元教官だ……。殺るには充分すぎる理由だな……」

秀光を抜くと、怒りにまかせて鞘を放り捨てた。

「私は、かつて、こんなにも誰かを殺したいと思ったことはないぞ……」

そして、九雷にも陽輝にも構わず、玉帝に迫った。

「殺したさ。いままでに、相当数な。だが、自慢じゃないが、殺しを楽しんだ覚

えはない！ 殺したいと思って殺したことはないんだよッ！」

「沙龍！」

九雷の制止は、聞こえていない。

「だが、お前は別だ——！」

沙龍は、秀光を天空に掲げ、光輝く『何か』を呼び込んだ。

「来い、黄龍を呼べ……！」

玉帝が、身構える。

「ブチ切れた。完全にな！」

九雷が董天のうつ伏せの身体を起こしたとき、董天は僅かに意識を取り戻したようだ。

「董天、死ぬのはまだ早いぞ。ここからが、お前の望んだ結末だ。それを見届けろ！」

「……御意」

一度頷いてから、九雷は、臨戦態勢の飛龍に叫んだ。

「敖開！ 緑麗の身体を護れ！」

飛龍は「その名で俺を——」と言いかけたが、さすがにそんな暇はないと思っ

たらしく、風火輪で一氣にホールの中央へ向かう。

「陽輝、お前は俺と来い！」

「ああ、天ちゃんの両脇の野郎だろ？」

陽輝は、左肩に掛けていたライトマシンガンM60は捨て、右肩に掛けていたアサルトライフル、M16A4カスタムを両手にして、既に走っていた。

虹色に輝く秀光が、玉帝の胸元の手前で辛うじて止まっている。

玉帝の身体を包む防御壁が、それ以上の刃の進入を防いでいるのだ。

ここからは力比べだった。

弾け合う二つの力が、バチバチと音を立て、火花を巻き散らしている。

沙龍は、そのままの姿勢で、あくまでも心臓を貫くつもりらしい。斬るのではなく、突きに来たということが、既に沙龍の殺意を物語っていた。

「なんだ？ この力は……!? 土行じゃない——」

玉帝は、沙龍の力の質が、五行属性のどれでもないことに気付いた。

黄龍の『土行』を予測していた玉帝にとって、この異質な力は予想外だった。「お前なんかには、黄龍の力を使つてたまるかッ！」

しかし、それは沙龍の強がりであつて、黄龍召喚は最後の切り札なのである。沙龍が秀光に宿らせた力は、木佐が碧媛から渡された札の力を解放させたもので、仙術の一種である。

それは、五行を無効化させ、純粋な物理力だけが支配するフィールドを作り出す。

にも関わらず、玉帝が秀光の切っ先を止めることが出来るのは、彼の力の桁が違ふからなのだ。

「だが、無理だ。緑麗ッ、それでは朕は倒せぬ……ッ！」

「倒すッ！」

「その蝕まれた身体では、決して倒せん！」

「そんなのは、やってみなきや分かんねえーんだよッ！」

一層、火花が散つた。

「気が付きましたか？」

薄らと瞼を持ち上げた木佐の視界を軽く手で封じて、天真は更に『氣』を送り込んだ。

「ドクター……？ ……ッ」

「すぐに起きてはいけませんよ」

木佐は、天真の回復技によって、やっと意識を取り戻した。

だが、天真とて万能ではない。身体に負った傷を、無かったものにはできない。

受けたダメージはそのまま、身体の機能だけが復活した、という感じだ。

木佐より傷の深かった董天は、尚更である。しかし、その董天が、木佐の隣でフラフラと立ち上がった。

「真武君……、沙龍様は、かつて貴方をホータン玉（注1）と称した……。そして、いま、貴方を傷つけた陛下に、我を忘れて怒りをぶつけている……。まったく、困った方ですよ……」

「……………」

董天の視線の先には、恐らく自分が教えた全ての戦闘術というものを最大限に駆使して闘う沙龍が居る。

「あれほど、誰かに依存するなどお教えしましたのに……。これでは貴方と同じだ」

「何を、言ってるんです？」

「お互い、生きてここを出られたら、お教えできる日もくるでしょう……」

「死に損ないが、今更のこのこ出てきてんじゃねえよ！」

陽輝はアーマライトを乱射しながら楽しそうである。

「チツ、オッサンはすっこんでな……ッ！」

白帝君はその身を翻して、手甲をはめ直した。接近戦に持ち込む算段である。だが、それがなかなか容易にできない。

弾切れの一瞬を狙うか、二、三発は食らう覚悟で懐に飛び込むしかない。

その派手な闘いの隣では、赤帝朱雀星君に相對する九雷が静かに挑発の笑みを浮かべている。

長刀を持ってはいるが、手にしているだけで、構えてはいない。

對する赤帝君は、伸縮自在の炎の劍『紅蓮』を正眼に構えている。

「九雷元帥、なぜ貴方が『そこ』に居る……？」

赤帝君のその疑問は当然だった。

『青帝』の称号は公式には持っていないものの、いまや、青龍はこの男である。

同じ四方将神であるはずなのに、こうして敵対しているのは、状況としては正しくとも、四神の本能としては間違っているからだ。

青龍広君が、なぜ、死ぬ間際に九雷にその力を譲渡したのか、その現場に居た赤帝君には理解できなかつた。

なぜなら、その直前まで、敖広と九雷は劍を合わせていたからだ。敖広は玉帝を討つために。九雷はその玉帝を守るために。

だから、敖広の不可解とも思える『譲渡』には、何か意味があつたはずなので

ある。

しかし、赤帝君はその意味や理由を推測はできても、理解はしたくなかった。職務とはいえ、大切な仲間の命を奪った九雷を、許せなかったからだ。

「なぜ……、敖広は四神の力を貴方に継承させたのだ」

「そう焦るな、赤帝」

九雷は、完全にかからかうような口調で宥めた。

「三千年も瞑想していて、まだ分からないのか？ いや、分かっているけど、認めたくないだけか、お前の場合」

「……」

「俺は別に真武君が好きなのじゃないが、日和見のお前達よりは遥かに骨があると思っている。奴の行動はいつも一貫している。呆れるほど、純粹にな」

「だから、真武君の味方をする、と？」

「そんなところだ」

「相変わらず自信過剰な男よ——」

実際のところ、九雷は単に時間稼ぎをしていたに過ぎない。

例え沙龍が玉帝を倒しても、いまの黄龍の力では完全に麒麟を消滅させるのは難しい。

だとすれば、最悪のケースも考えられる。

『そのとき』に、四方将神が揃っていないければ、更に最悪なことになる。そのため時間稼ぎなのだ。

「グッ……！」

力押しで負けたことは何度もある。

いかに鍛えようと、人間の身体には限界があり、まして沙龍はかなり小柄な女性である。物理的な力の強さは、一番早く限界を迎えた。

だからこそ、それをカバーするために、上海であらゆる修業をしてきたのだ。

それは、技であり速さであり、一瞬の判断力である。

しかし、最後の最後で未知の力を引き出すのは、やはり、その心——精神力——だと元教官は言った。簡単に言えば『絶対負けない』という意味だと。

「この人間ふぜいが……ッ！ 朕が負けるはずがない！」

「そのセリフを吐いた奴はなあ、全員、墓の下なんだよッ！」

沙龍が、秀光を僅かに引いて、更に押し込もうとしたとき、その力に耐え切れずに刀身が折れた。

しかし、沙龍はそれに動揺することはなかった。

「それを言うなら、『絶対負けない』だ——ッ！」

背中に手を回して、帯に仕込んであった小柄を抜き取ると、迷わずに敵の心臓の上にそれを突き立てたのだ。

その小さな最終兵器は、弱っていた防御壁を簡単に破った。

「……ッ！」

「やったか？」

半分観戦していた飛龍が、無表情のまま呟いた。

「いや、油断するな！」

九雷が叫ぶ。

「……!?!」

心臓を貫かれながらも、玉帝は、沙龍の小柄を握る手を片手で掴んだ。

「いまだッ！ 黄龍を——解放しろ、緑麗！」

「な……ッ!？」

そして、沙龍の額に、もう片手を置く。

「いまなら、麒麟を滅することができる！」

(注1) ホータン玉……ホータン(和田)で採れる羊脂玉(翡翠の最高級のもの)。

つまり、最高の宝という意味。

沙龍と玉帝は、渦巻く『氣』の中心に居た――。

静かだった。

周囲には、五行の『氣』が嵐のように荒れ狂っていたが、ここには静寂だけがあつた。

沙龍の心の内に映し出されたヴィジョンには、二人の男女が居る。
玉皇大帝と緑麗である。

「陛下。明日からは敵同士です。お別れを言いに来ました」

「緑麗、人払いはしてある。今日くらいは本音で語り合おう」

「ご冗談を。私はいつも陛下に対しては本音でしたが？」

「そうであろうな。でなければ、天下の天帝相手に口喧嘩はできぬか……。ある意味、お前ほど信頼できる者もおるまいな」

「お誉めに預かり恐縮……。なわけねーだろ！　誉めてないな？　それは」
「フ、当然だ。朕がお前を誉めたことがあつたか？」

これは、恐らく、玉帝が私に見せている緑麗の記憶の一部……。

以前、九雷元帥の記憶に触れたときに、僅かに読めた感情とは違う。

緑麗の想い、願い、意識……。その全てが、自分のもののようにはっきりと感じ取れる。

この二人、分かつてる。ちゃんと。

緑麗が、叛乱を起こす気がないことを――。

ただ、形だけの芝居。一世一代の芝居。

それは周囲を欺くためじゃない。

麒麟と黄龍を欺くためだ――。

「朕はここに残って、なんとかこの力を抑える方法を探す。四方将神にそれができるかと問うたが、赤白両君にはできぬと言われた。敖広は、あの通り朕には反抗的だし、真武君は恐らくどこまでも黄龍を追うであろう」

「みな、個性豊かつすからね」

「呑気だな。真武君のお前への執着ぶりはただことではないぞ。おお、そうだ。

緑麗、この際だ。いっそ、九雷を諦めて真武君にせよ」

「なに言ってるんですか。真武君の執着は、どー見たって私じゃなくて、黄龍に對するものですよ」

「まあ、冗談はさておき、問題は、朕が麒麟を抑え切れなくなった場合だ。そのときには麒麟を確実に倒せる存在が必要になる。一万年あれば黄龍は調教できようが、朕の方がもたなければ、その時期は早まるかもしれない。あらゆる可能性を覚悟しておけ、緑麗。恐らく、九雷も動くだろうからな」

「御意……」

これは、二人だけの計画。

黄龍を生かし、麒麟を滅するための、二人しか知らない計画。

両者を滅することは困難だと判断した、苦肉の策。

でも、想いはみな一緒だ。

緑麗も、玉帝も……、九雷元帥も、私が出逢った人達の想いはみな同じだ――

――。

なのに、所々重なり、所々スレ違う計画。

「よいか、緑麗。『そのとき』が来たら、迷わず朕を麒麟ごと消滅させよ。それができるのはお前しかおらぬし、こんなことを頼めるのはお前しかおらぬ」

「陛下……」

「お前一人に背負わせはせぬ。……だが、お前は泣くであろう。迷いもするであろう。だから、その枷は朕が外してやる。お前の魂を持つ者ならば、必ずできるはずだ」

そういうことか……。全て、分かったよ、緑麗。

私でなければ、意味がなかったんだね……。？

玉帝の真意を知る貴女にはできないから――。

だから、玉帝は緑麗の記憶を消した。そして、黄龍に呪いをかけ、私の怒りを煽った。

緑麗の記憶を持たない私が、黄龍の呪いを解くためにここに来て、怒りに任せて玉帝を倒すように。

全て、貴方達の計画通り――。

一万年の刑と偽った、黄龍の『調教』。

ただの無知で無垢な破壊神に、様々な人の魂を渡り歩かせ、この世の森羅万象

を体験させ、地上神として塗り替える計画。

その黄龍を以ってしてのみ倒せる麒麟。

『逆』にしなかったのは、帝位を空白にするわけにはいかなかったからだ。

そして、二人だけの秘密にしたのは、普段は自我を持たないのに、存続の危機にはそれを全力で排除してしまうという本能が備わっている神獣達に悟られるわけにはいかなかったからだ。

だから、いま、私なら、できる。

この怒りを胸に、私だけがこの小柄を突き立てることができる。

最後まで、麒麟と黄龍に悟られることなく――。

ただ、この瞬間まで、じっと耐えてきたのか、貴方達は……！

沙龍は、黄龍を召喚した。恐らく、最後の一度。

全ての想いを込めて――。

「泣くな、甲斐馨。緑麗や九雷の受けた悲しみに比べれば……、どうということはないのだ」

「玉皇大帝陛下……」

「これで、やっと終わる……。各々が、勝手な思惑であれこれ画策した中、結局、当初の目的を成し遂げたのは朕一人……。フフ……、かなり気分がいいぞ」

「ドクターに教えてあげてもいい？」

「いいだろう……。でなければ、兄上も納得できぬだろう」

「元帥には……」

「フツ……、いまとなつては、思い出されるのは、お前との喧嘩ばかりでな……」

……

「……」

「最期に、お前の呪縛を全て解こう……。辛い想いをさせた……。許せ」

玉皇大帝は、沙龍の額に手を添えて暫し微動だにせず、それから、静かに微笑み、目を閉じた。

巨大な『氣』の渦巻く内部を、外側から見渡すことはできない。その圧倒的な力の奔流の前に、誰も近寄ることができなかつた。

天真が、ふと、顔を上げた。

「昊……？」

「……」

天真の独り言が、何を意味するのか九雷は察した。

「行くぞ、真武君。『俺達』の仕事は、恐らく、まだ終わっていない」

「……。結構、人使い荒いんですね」

木佐には、なぜ九雷がここにいるのか、分かっていない。

だが、いまの彼が敵でないことは分かる。そして、自分達には共通の敵がいるのだ、ということも。

それだけで充分だった。

木佐はなんとか立ち上がって、黙って九雷についていった。

沙龍は、全ての力が抜けたように座り込んでいた。

「も……、完全に……ガス欠……」

黄龍はどこに行ったのか。

少なくとも、いま、その気配を感じることはできない。

「ホントに……、麒麟ごと倒せたのか……？」

依り代である玉帝と共に葬ったはずだが、沙龍にその実感はなかった。

やがて、渦巻く『氣』が収束すると、目の前には、赤帝君と白帝君が居た。

「勘弁してくれ……」

もう指一本動かす力もないというのに――。

「緑麗様……」

「なんべん言や分かるんだよ。私は沙龍。……って初対面か？　じゃあ、覚えておけ。まあ、もうすぐこの命も尽きるがな。だから、静かに逝かせろ」

「いや、貴女のやるべきことはまだ終わっていない――。御免！」

「…………ツ!？」

九雷と木佐が、ようやく晴れた視界で初めて見たものは、小さな沙龍の身体に貫く巨大な炎の剣だった。

その頃、松木ゴローと偃月は、火雲宮の地下層に居た。

これも、半分は松木の推測で、半分は九雷からヒントを聞きだした結果なのだが、この敷地内には何かしらのコントロール・ルームがあるのではないかと踏んだのである。

軍備関係の防御システムや、ライフラインの供給システムまで、その全てを統括するような制御システムがあるとしたら、そこを利用しない手はない。

案の定、九雷はその存在を仄めかしたが、それは松木が期待していたものとは少し違っていた。

確かに、この地下の廊下は、最新式の設備というよりは、大昔からある遺跡のような感じで、あまり人の出入りが見当たらない。

が、全くないというわけでもなさそうだった。

廊下の行き止まりで、ごく普通にありそうな扉を見つけると、松木も偃月も無

言で立ち尽くした。

「……」

「……」

「なんで入らないんだ？」

偃月が聞く。

「いや……、偃月君こそ」

「いや、ここは参謀が最初に入るべきだろう」

「……いや、やっぱ、こつちの世界に一日の長がある偃月君の方が」

などと、変な譲り合いを始める。

二人とも具体的には気付いていなかったが、つまり「あまり入りたくないオーラ」が漂っているのである。

簡単に言えば、「何か嫌な予感」がするということだ。

それは、偃月よりも、松木の方が強く感じていた。

（幽霊とさえ気軽に会話しちゃう僕が……？ この先のものを恐れてる……？）

松木はそう思った。

小さい頃から靈感が強すぎて、その力を持って余していた松木は、遊び半分に降霊をして、よく家の者に怒られていたほどだ。

「……まあ、とにかく入ってみないことには始まらないか」

と、意を決してドアに手をかけ、ソツと開けてみる。

鍵はかかっていたいなかった。

部屋の中は薄暗いが、半分は見渡せた。

それが、いくつものモニターの光のおかげだというのは分かった。

「……？ コンピューター・ルーム？」

壁一面に埋め込まれたようなモニター群を見て、松木は呟いた。

警備室といってもいいような部屋である。

「ふおおおおお……うくくくく……」

そんな不気味な声が奥から聞こえて、松木と偃月は心底ビビった。

老人特有の声で、何やら一人、悦に入ってるような忍び笑いだ。

「じーさん、あんた何やってんだ？ こんな薄暗い地下室で」

偃月が問い掛けると、いま気付いた、とでもいうように老人が顔を上げた。

「ム？ ノックくらいせんか。全く近頃の若者ときたら。よいか、そもそも人の礼節とは——」

「いや、エロ本全開で見ながら説教たれてもあんまり、説得力ないんじや……」
偃月が言う傍で、松木はなぜか直立で硬直している。

「無粋な輩め。これは芸術である。断じて低俗な画集ではない！」

「で、じーさんは、結局ナニモンなんだ？」

「フツ……、ワシが誰か分かったら、超レアな記念品を進呈しようぞツ！」

「池〇めだか」

と、偃月が即答すると、どこからともなく金ダライが降ってきた。

「……痛！」

偃月は潰れた。

「外れの場合はコレじや」

「……って、そんなん、分かるわけないだろ!？」

「泰山府君——」

松木が息を呑みながら、やっとの思いでその名を口にした。

「おおツ？ ワシが分かるとは、すあすが陰陽師ツ！ いや、お見事お〜ツ！
老人が紐を引っ張ると、松木の頭上でくす玉が割れて、紙吹雪が舞った。

「ちよ、ちよつと待った。泰山府君……ッ!? 人の生死を司るってー神様か！
偃月が頭をさすりながら言った。

日本では、安倍晴明により陰陽道の主神となっている神である。
松木が過敏になっているのは、そのせいだった。

「そうみたいだよ、偃月君」

「この、存在自体が冗談みたいなエロチビタヌキジーサンが？」

そう言うのと、また金ダライが降ってきて、偃月は沈没した。

「つまり、ここは泰山府（天界の役所の一つ）ですか？」

「左様。中でも、あらゆる生き物の誕生と死の時を定める部門——だった所
じゃ」

「“だった”……？」

「いまは単なる書庫兼心靈スポットじゃよ。客など滅多に来ん。まして、人間の
客など、ボン達が初めてじゃな」

「はあ……」

と、所在なげに部屋を見渡す偃月。

「茶でも飲んでいくか？ ボン達、一体何をしに来たんじゃ？」

「ずばり聞きます。貴方が生と死を司る神ならば、人の寿命を伸ばすことは可能ですか？」

松木はいつになく真剣な表情で聞いた。

「……フム。そういうことか」

泰山府君はキーボードを片手で操作して、幾つかのモニターをアクティブにした。

勿論、もう片方の手は芸術本を離していない。

泰山府君が見せてくれたそのモニターには、ありとあらゆる世界中の情報が呼び出せた。

NHK（何でも・放送します・協会）の集金裏技テクから、ネオ・シャチ（全国規模でシャチを保護する裏組織）の構成員、はたまた東の小国の最新芸能事情まで。

「昔はな、コレで管理しておったのよ。天界の思うがまま、意のままに、仙界と人界を操り、人の命の誕生と死の時を決めておった。天命——とは、つまりそういうことよ」

「昔は、というと、今は違うんですね？」

「今は、人の命は全て自然の法則に任せてある。天の意思は介在させていない。させないことにしたのじゃ。ワシらはただ見守るだけ。それを神のスタンスにしようとな。ワシの言ってることが分かるか？」

「馨君を助けることはできないってことですか……」

「死んだ人間を蘇生させるような『奇跡』を起こすのが、神の気まぐれならば、そんな理不尽なことはないであろう？」

「ですが、馨君は生まれたときから既に天帝の呪いを受けていた。それこそが神の気まぐれではないのですか？ 貴方がたは、見守るだけと言いながら、一握りの特権を認めている。それをどうお考えなのです？」

真剣な松木の言葉を、泰山府君は軽く擲揄った。

「若いのう。陰陽師……」

「まだ、たったの二十数年しか生きていませんから」

「まあ、そう焦らんでも、甲斐馨の寿命は今日では終わらん」

「……？」

「アレはそんなヤワにはできていないのじゃ」

「哥々は死なずに済むってことか？」

しかし、泰山府君はその問いには答えず、モニターの一つを凝視していた。

そこには、玉京宮の上空に出現した、麒麟の巨大な姿があった。

「まあ、昊の尻拭いはどっちにしろしなくてはならんがのう……」

「ア……レ……？ 私、死んだ——よな？」

と、のっそり起き上がったのは、昨夜呑み過ぎたせいで昼まで惰眠を貪っていたような、絶世の金髪美人だった。

気だるい空気を撒き散らしながらのお目覚めである。

その怪力で自分の上に覆いかぶさっていた重たそうなガラスケースの蓋を押し
のけた。

「確かに、あの炎の剣がブツスリいって、鼓動が止まったのを感じただけど……」

と、ブツブツ言ってるのは、勿論、この場に居る全員に聞こえている。
というよりも、全員、驚愕しながら聞いている。

「かつ、馨……ッ？」

第一声は木佐だった。

木佐は、朱雀星君を掴み上げていた両手を離し、自分を止めようとしていた陽輝の手を振り払って、その『金髪美人』の元へ駆け寄った。

「何、アホ面してんの、キサさん。イイ男、台無しっすよ？ そんな、大口開けたままで」

緑麗は、そう言った。

「……」

九雷は、その腕に抱いていた沙龍の身体をひとまず天真のそばに降ろして、間抜けな漫才をしている二人に近寄る。

「アレ？ なんで視線が違うんだ？ キサさん、背、縮んだ？」

「僕が縮んだんじゃなくて、馨が成長したんだろ」

「……？」

「百聞は一見にしかずだ」

木佐は長身の緑麗の身体を横に引っ張って、さつき緑麗自身が放り投げたガラスケースの蓋の前に立たせた。

そのうつすらと映る自分の姿に、『沙龍』は絶句した。

「あまり悠長にしてられる状況じゃないからな。状況判断は五秒でしろ。すぐ闘いになる」

「……………し、しました。状況判断、しました！」

「大丈夫か、緑麗……？ いや、沙龍？」

近付いてきた九雷が躊躇しながら声を掛ける。

九雷が戸惑うという姿を、沙龍は初めて見た気がする。

「中身は沙龍です」

キリツと真面目な顔をして言ったのだが、沙龍はすぐに笑ってしまった。

「でも、もうどっちでもいい。なんか、もう、どうでもよくなった」

その様子を見ていた天真が、やはり少し離れた場所で沙龍達を見守る赤帝君を見て、眩く。

「つまり、赤帝君は、こうなることが分かっていたわけですね……」

なら、さっきまで赤帝君を殺しそうになっていた木佐や、沙龍の亡骸を離そうとしなかった九雷に、一言弁解すればいいものを、それが彼の美学なのだろうか。

甲斐馨の身体は確かに死んだ。そして、緑麗の身体に魂が移された。

そういうことなのだが、洒落にならない『敵』が目の前に出現した以上、ここで雑談しているわけにもいかない。

「いや、もうちよつと、参ったね、なんて笑う時間とか欲しいけど、それは後でするワ」

沙龍はそう言いながら、折れた秀光を拾い上げる。

が、使い物にならないのが分かるとすぐに投げ捨てた。

「公主、身体の具合はどうです？ 長い間固まったままだったんですからね。

ちやんとウォーミング・アップして——」

天真が声を掛けると、沙龍は振り向いた。

「それより、ドクター、その元教官殿を頼む。それと、私のその身体も一応確保しといてくる？」

「ええ、分かってます」

董天は壁に背を預けた状態で力なく崩れていたが、意識はあるようだ。

「ご心配なく、沙龍様。これでも天界人の端くれです。人間の身体よりは丈夫で

すから」

「そうか……。お前が大怪我しているのを見るのは初めてののような気がするな」

「私も、貴女に心配して頂いたのは初めてののような気がしますよ」

「これでも長い付き合いだからな。まあ、お前達の生きてきた長さに比べれば短いもんだが」

「緑麗、敵が来る！」

飛龍が龍の姿になって、背中に乗れ、と身体を傾けた。

「……よし！ 行くぞ！」

「待てよ、馨。素手で行く気か!？」

そのとき、見事な青い色をした霊獣、青鸞が壊れた天井の上に姿を現し、

「緑麗！ 真武君！ 間に合ったな！」

九天玄女がその青鸞の上から顔を出した。

「預かっていたお前達の剣を持ってきた——」

なぜ麒麟が復活したのかといえば、沙龍がぶつけた黄龍の力が足りなかったのだらう。

再三、九雷が言っていたように、緑麗の身体でないと、黄龍の力は百パーセントは引き出せないのだ。

赤帝君と白帝君は、九雷以上に、麒麟と黄龍の関係とからくりを知っていた。

『我々は当初より、天の力を調整する者として存在しています。それが麒麟であらうと黄龍であらうと、その役目は変わりません』

朱雀星君に炎の剣で貫かれたとき、沙龍は彼の言葉を、直接心の中に聞いた。

『しかし、陛下がその御自身の魂魄に封じた麒麟は、我々に調整されることを拒否しました。そして、やがて、陛下の身体を食い潰し、いずれ黄龍を滅ぼすつもりだ、と——』

不思議と痛みは感じなかった。

それは、この炎の剣が、悪意から発したものではないからだ、と分かった。

『真武君は正しかった。最初から、黄龍を望む真武君は、敖広とは違う方法で、それを成し得ようとしたのです。だから、我々も、真武君と最終的な目的を同じ

くし、今日のこの日のために、耐え忍んできたのです』

「なら、青龍は？ 討ち死にした青龍広君の意思は誰が受け継いだの……？」

沙龍は、鼓動が止まる寸前に、朱雀星君に聞いた。

『それは、貴女にはもう分かっているはずだ』

既に、玉京宮の建物自体が半壊している。

黒く染まった空に、更に漆黒の影で輪郭が浮かび上がった禍禍しい魔獣は、いまにも放射能を吐いて帝都を焼き払いそうな勢いがある。

「奴の狙いは黄龍だけだ！ ゼロ距離でぶっ放す！ 飛龍、行けるな!？」
「分かった！」

しかし、そうは言っても迂闊には近づけない。

竜巻にさらされる小型戦闘機で、巨大怪獣に向かうようなものだったが、沙龍はちっとも負ける気がしなかった。

この他人であって他人でない身体には、信じられないほどの力が溢れている。

これこそが『真の保持者』か、と思わずにはいられない。

ゴゴゴツ

と、耳をつんざく音と共に、麒麟は鹿のような脚で近付くもの全てを薙ぎ払う。

「こりやだめだわ……、近付けもしねえ」

地上でバイクを駆りながら麒麟に近付こうとしていた陽輝も、その凄まじい薙ぎ払いに、一旦愛車を停車させた。

その上空では、青鸞に乗った九天玄女が同じく滞空している。

「策はあるのか!? 陽輝大将」

「ウーン……。俺にはないな」

「あっさり言うなー！」

そのやや後方では、真っ白な大虎に乗った朱雀星君が、飛龍と沙龍のコンビに近付いた。

「緑麗様！ 我々も助力致します！」

「その申し出は有り難いのだが、赤帝君。そもそも、近付けないとなると――」

沙龍の上空から別の声がした。

「お前が指揮を取ってみろ。俺達はその通りに動いてみる」

「……元帥？」

黒焰虎に乗った九雷が降りてきた。

「つまり、カミサマがたを手足に使えと？ 私に？」

「そうだ」

「分かった。とりあえず、やってみよう」

沙龍の決断は早い。

三次元の戦い方をしたことはないが、幸い、三半規管は弱くはないはずだ。

「よし」

沙龍は、緑麗の姿で飛龍の背の上に立った。

「飛龍、麒麟の吐く火炎の射線上にだけは乗るなよ」

「フ……、俺の速さを見くびるな」

飛龍の自信満々の答えを聞いて、沙龍も微笑んだ。

ふと、思い出す。

(そう——。村では、私と飛龍に追いつける者はいなかった)

「懐かしいな、飛龍……」

「キュウツ」

と、そのとき、沙龍の肩を占領していた小龍が怒ったように、沙龍の頬をついた。

「小龍、お前はドクターの所に戻れ。危ないぞ」

「キュクルルル」

「なに？ ……腹が減った？」

「違う。一緒に居たいと言っている」

飛龍が通訳してくれた。

「そいつが居てもなんの役にもたたんが……。俺にも気持ちは分かる」

「そうか。じゃあ、好きにしろ。だが、危なくなったら飛んで逃げろ。いいな？」

「キュ！」

麒麟の猛攻が一瞬、止んだ。

「赤帝君、囹になつて、その火炎を西側上空に誘導してくれ！ 陽輝大将はヤツの脚を止めてくれ！」

「了解しました！」

「任せろ！」

二つの影が、空と地上で動く。

「九玄姐さんは、北から回り込んで注意を逸らしてくれ！」

「心得た！」

九玄を乗せた綺麗な水色の鸞が急速に羽ばたいていく。

「元帥は東を頼む！」

「分かった。死ぬなよ、沙龍——。三度目はご免だぞ」

九雷を乗せた黒焰虎が去る。

「キサさん——！」

沙龍は崩れかけた尖塔の上に立っていた木佐を拾って、飛龍を麒麟の正面に回り込ませた。

アドレナリンが身体を駆け巡る。

「将神復活か——。いいねえ、この緊張感」

陽輝が建物を飛び越えて、いち早く麒麟に迫った。

「貴女と再び共に闘えるのは、武人として最高の誉れだ！」

九天玄女の心は、この黒い空とは反対に、どこまでも澄み切っている。

「三千年の決着をいまつける！」

赤帝君は、麒麟の撃ち出す炎を相殺すべく、火属性の『氣』を一気に放出した。

「阿哥、無理すんなー」

白虎の姿に変化している白帝君は、その熱量になんとか耐えた。

「これで終わりだ！」

九雷は、飛龍の軌跡を目で追いながら、剣を抜いた。

木佐小次郎は、飛龍の背の上で、先ほど九天玄女から渡された『七星剣』を一度振ってみてから、下段に構えた。

「これ……。日本に持って帰れないかな」

そんな木佐の独り言に、沙龍は笑っていた。

(この刀剣マニアめ——)

「突っ込め、飛龍！ 正面が空いた！」

麒麟が旋律のような雄叫びをあげる。

「そう焦るな……。お望み通り、呼び出してやる。本物の黄龍をな……。沙龍は、額に浮かび上がった紋様を二本の指で触れた。」

『我、唯一の神獣にして無二の存在、黄龍の全ての力を解放せり——！』

39 青い空と黄色い花

三千年の時を経て、その本当の姿を現した黄龍が、まっすぐに麒麟に襲い掛かった。

爆発的な衝撃が嵐を呼び、周囲に巨大な光の柱を生んだ。

「クッ……!!」

その眩しさと衝撃を、飛龍と木佐は体勢を低くして耐えた。

が、一人、平然と立ったままの緑麗は、会心の笑みを浮かべている。

「よくやった、『馨』。上出来だ。ここまで『調教』できたんだな。後は私がやる！」

「……緑麗？」

敏く気付いた飛龍が首だけ振り返ったとき、そこには将神緑麗が居た。

「ああ、そうだ。黄龍に起こされた」

そう言って、緑麗は微笑み、隣で素っ頓狂な顔をしている木佐にも目くばせし

た。

「貴女は……」

「心配するな。馨は寝ているだけだ。さんざん働かせたからな。最後までいいは私に任せてくれ」

緑麗は、聖と魔の両方を断ち切るといわれている自分の剣を取り出し、水平に掲げた。

「娘々、どこまでも律儀な奴よ。いい手入れだ——」

「……」

木佐は、確かにこの表情は自分の知っている甲斐馨ではない、と思った。

余裕がある——と言えいいのか、やはり二十歳そこそこの小娘にはない貫禄がある。

「真武君、よく聞いてくれ。私の聖魔剣と、お前の持つその七星剣だけが、麒麟の弱点をつける。奴の弱点は、首の両側にある鱗だ。私が仕損じたら、頼む」

「首の両側!? 鱗って、どれくらいの大きさなんです!?!」

「なに、野球のボールくらいはある」

「そんな小さいんですか!？」

「なんだ。自信がないのか？ かつてのお前なら、ゴマ粒だって両断できたんだがな」

いくらなんでもそれは冗談だろうと思ったが、そんなことを言われては反射的に言い返してしまう。

「や、やりますよ！」

そして、緑麗は黒々とした天空にその聖魔剣を向けて、垂直に掲げた。

「行くぞ、九雷、陽輝！ コイツを突き立てて、晴れて一杯だ！」

「緑麗……!？」

「あいつ、『戻って』きたのか!？」

九雷と陽輝は、それぞれ、いまの緑麗の意識が誰なのかを知った。

眼前に迫る黒々とした麒麟の本体に、木佐は我に返って七星剣を構えた。

(野球のボール大の鱗!？ そんな無茶な！)

優れた動体視力と運動神経がなければ、高速移動中に、その『弱点』を突くか斬るか、はできない。

しかし、木佐も緑麗も、その奇跡をやったのけたのである。周囲の協力者たちが麒麟の動きを封じてくれたからだろう。

ほどなくして、火雲宮の上空に青空が戻った――。

馨はずっと眠りっぱなしだ。

あの激しい闘いから三日経って、いま、ここ水雲宮の最上階で惰眠を貪っているのは、間違いなく、ダイナマイト・バディでもなんでもない、僕をよく知る、あの小さな馨だ。

麒麟が消滅したあの瞬間、緑麗さんはそれを見届けるかのように、また眠りについた。

恋人と言葉を交わすこともなく。

戦友と飲み交わすこともなく。

『これ』は甲斐馨の命だから、この命で緑麗として時間を過ごすつもりはない、と、あの緑青の瞳が告げていた。

なんて潔い人だろう。

そして、僕達の前にいきなり姿を現した小柄な老人が、ドクター・天真と一緒に、馨の元の身体を蘇生した。

どういう理屈でどうなったのか、僕には詳しくは分からないが、ともかく馨は、本来の自分の身体で意識を取り戻したのだ。

「黄龍！ ……こ、黄龍……？ あれ……？ 黄龍は？」

などと間抜けなことを言いながら。

黄龍を召喚した直後に意識を失ったとかで、緑麗さんに意識を取られている間、このことはなに一つ覚えていなかった。

再び凍結された緑麗さんの身体は、別の場所に移されたらしいが、もうこの身体が使われることはないだろう、と九雷元帥は言っていた。

「いっそ、無に帰した方がいいのかもしれない…」

「しかし、緑麗さんが今度目覚めるときに必要なのでは……？」

「いや、それは誰も望んでいないだろう」

と、意味深にそんなことを言っていた。

水雲宮のテラスで、目の前に広がる眩しいほどの青空を眺めながら、僕は長かったこの旅を振り返って、色んな想いを巡らしていた。

董天さんは大きな仕事が終わってゆっくり養生しているのかと思いきや、見舞いに行った病院にはおらず、諦めて戻ろうとしたときに城下町の通りで出くわした。

たぶん、僕のことを待っていてくれたんだろう。

「もう、会えないかと思いましたよ」

「いつのまにか姿を消すのも、仕事の一つなのでね」

そう言って営業用の笑顔を見せ、例の約束していた話をしてくれた。

「私は沙龍様の教官時代に、常々、他人を信用するなどお教えしました。他者に心の拠り所を作るな、とね。それが、あの裏社会で生きていくための必要悪だったからです」

そこまでは、普通に分かる話だ。

しかし、彼の屈折した性質はその上をいく。

「……というのは、建前でして」

「え……？」

「昔、貴方が天界での地位を捨てて、黄龍を追いかけたとき、私にはその行動が理解できなかった。貴方は純粋馬鹿ともいえるほどの情熱で、黄龍のために生きると断言した。それが、妙に鼻についたのでね、ちよつとした意地悪をしたのですよ。」

「いずれ転生した貴方と沙龍様が出逢うことは分かっていましたから、それを邪魔してやろうと思ひまして。幼い沙龍様に、誰も信用するなと吹き込んで、他人を寄せ付けないような人間に育てた——つもりでした」

なるほど、それが本音か。

「ですが、あの方は、見事に私の予想を裏切ってくださいました。いえ、忠実に私の言葉を守った結果なのかもしれません。つまり、『誰も信用するな』という私の言葉通り、私のことを信用しなかったのですね。元より、小細工の通用するような方ではなかった」

そういうことか。

誰も信用するなと言われて、でも、そう言った本人を信用していないから、その人の言葉も信用しない――。

結局、馨はどこまでも好き勝手にやってきたんだよな。

「董天さん。僕は、前世で、貴方に対してかなり無神経なことを言ったのかもしれない。」

それをどうこう言うつもりはありませんが、少なくとも、いまの僕は貴方に感謝しています」

「なんですって？」

「貴方は、自分で気付いていないのかもしれないが、馨を大切に育ててくれた。恐らく、かなり屈折した、しかし、深い愛情を持って。だから、感謝しています」

「……参りましたね、ホントに。貴方はちっとも変わっていないようだ。まあ、貴方がそう思いたいのも分かりますが……。いま、ここに居る私は『天界軍調査室所属、董天准尉』に過ぎないんですよ、真武君。『経験豊富で有能だが、刹那

主義、礼儀と愛想はいいが人付き合いの悪い諜報部員』という、私自身が作り上げた性格を、そのまま演じているに過ぎません。仕事のたびに名前を変え、性格を変え、いつしかどれが本当の自分なのか、分からなくなるくらい長い年月を過ごしてきました。沙龍様と過ごした時間も、その中の一瞬です」

「それが建前か本音かは問いません。でも、貴方は結局、馨を本当の意味で裏切りはしなかった。違いますか？」

「さあ、どうでしょうね」

その苦笑がひどく寂しそうに見えた。

「ただ、なにかしらあるとしたら、私は、生涯でたった一人、恐怖に似た憧憬を感じた人と、たった一人、愛憎にも似た怒りを感じた人が、揃って執着している方に興味を引かれたのかもしれないね。そして、その方の数奇な行く末を見届けることができた。……満足してますよ」

董天さんは最後にそう言っていた。

意地でも馨に対する情は認めたくないらしい。

長年生きていると、ああなるもんだらうか。

その翌日、偃月君は「お世話になっている人の所に戻る」と言つて、早々に退散した。

松木さんは、その偃月君に途中まで一緒について行って、広元まで送つてもらつたら、後は一人で日本に帰れるから、と言つていた。

「馨君が目覚めるの待つてたら、日本での僕の仕事なくなっちゃうからねー」と、あの軽い調子で別れを告げてきた。

「まあ、馨君は目覚めても帰らないって言ひ出すかもしれないけど」それは、やけに確信したような言い方だった。

僕も、そう思いますよ、松木さん。

とりあえず、馨がいつ目覚めてもいいように、茶碗蒸しの用意だけはしておこう。

【劇終】

あとがき

作者の力量不足で何故「帰還」というタイトルなのか、分かりにくいと思いますが、これは沙龍にとっての「帰還」ではなく、緑麗（もしくは黄龍）にとっての「帰還」です。

つまり、緑麗にとっては終わりの物語で、沙龍にとっては始まりの物語になるのが今作。

相当昔に書いた話なので、今読み返すと頭から書き直したくなる衝動に駆られます。（やらないけどね！）

PDF版という事で、初稿通りに、ラストシーンでの木佐さんと董天の会話を加筆しておきました。

二〇二一年七月二十七日 小龍